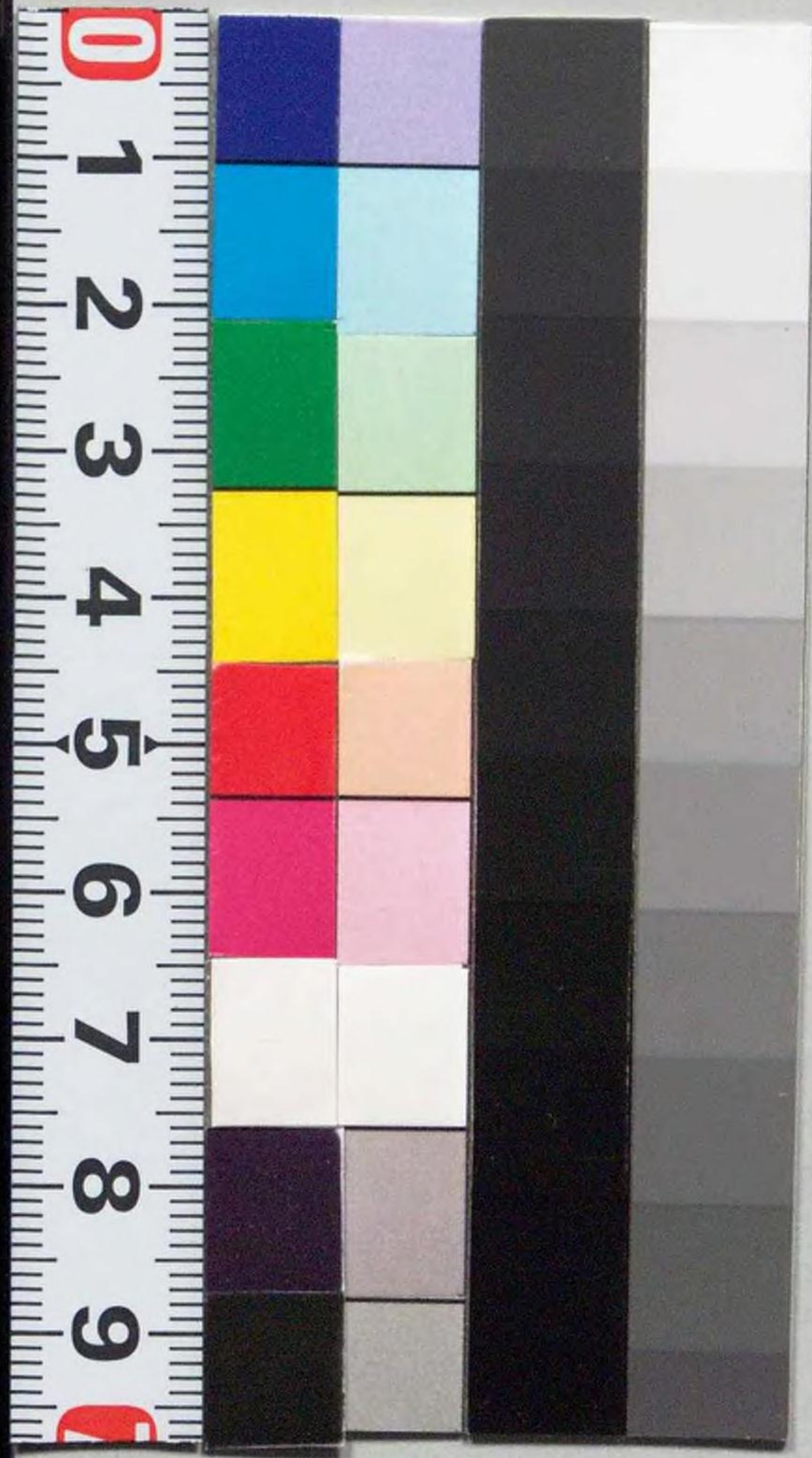


797-529



1200501607363

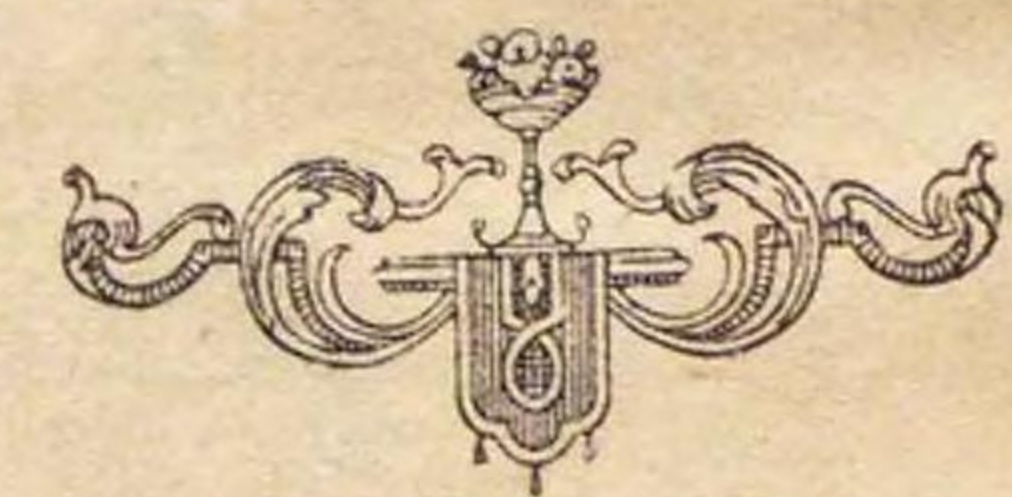
0  
複写





30.12.28





弘文堂刊





春のうららかな日が暮れかけてゐた、小さなばら色の雲が高くあかるい空に懸かつて、丁度それが漂つてゐるのではなく、何處か紺青の深みのなかへ吸はれていくやうに見えてゐた。

縣の市まちの町端づれの通りの一つにある美しい邸宅の開放された窓際に（それは一八四二年のことであつたが）二人の婦人が腰かけてゐた、一人は五十歳ぐらゐ、も一人は七十歳の老婦人である。

最初の婦人はマリヤ・ドミトリエヅナ・カリイチナといつた。彼女の良人は、もと縣の檢事で、當時遣り手だといふ評判で——てきばきした、決斷力に富んだ、癩癩持の、剛愎な人だつたが——十年前に死んだ。彼は相當の教育を受け、大學に學んだ、しかし、貧しい家柄に生れて、早くから自分で道をきり拓くこと、金をためることの必要を知つてゐた。マリヤ・ドミトリエヅナは戀仲で彼と結婚

した、彼は男振りがよかつたし、伶俐で、そのうへ氣が向きさへすれば、非常にやさしかつた。マリヤ・ドミトリエヅナ（娘時代の姓はペストワといつた）は、まだ子供の頃に兩親に死に別れた、モスクワに數年、その女子専門學校にゐたが、そこから歸つてからは、O市から五十露里離れた世襲の



持村のポクローフスコエで、伯母とそれから兄と一緒に暮してゐた。この兄は間もなくペテルブルグへ勤めに出たが、それからずうつと、思ひがけない急病でポックリ死んで終ふまで、妹をも伯母をも、苦しめ通したのだつた。マリヤ・ドミトリエヅナはポクローフスコエの領地を相續した、しかしそこには永く住まなかつた、四五日のうちに彼女の心をすっかり征服してしまつたカリイチンとの結婚の二年目に、ポクローフスコエは他のもつと収入のある、しかし美しくない、屋敷なんかもついてゐない領地と交換された、同時にカリイチンは〇市に一軒の家を手に入れた、そしてそこへ妻と一緒に永住的にひき移つたのであつた。家には大きな庭園がついてゐた、それは一方が眞直に野原へ、郊外へと續いてゐた。だから——農村の静けさなどといふの大嫌ひなカリイチンが——田舎へ行く必要がなくちつともないときめたのだつた。マリヤ・ドミトリエヅナは一度ならず愉しい小川と廣い草原と緑の森のある自分の美しいポクローフスコエを心の中に悲しんだ、でも彼女は何事によらず良人にさからはなかつた、彼の才智と世間的な知識に敬服してゐた。十五年の結婚生活の後に、一人の息子と二人の娘を残して彼が死んでいつた頃には、マリヤ・ドミトリエヅナはもうすっかり自分の家と市の生活に馴れてしまつて、自分でも〇市を離れようなどとは考へたこともなかつた。

マリヤ・ドミトリエヅナは若い頃、可愛らしいブロンド髪の乙女といふ評判をとつてゐた、そして五十歳の今日でも彼女の容貌は、すこし肥つて縹緞が落ちたとはいふものの、氣持ちよさを失つてゐ

3  
なかつた。彼女は善良といふよりも情に脆い方だつた、大人になつても女學生氣質が抜けなかつた、彼女は自分を甘やかして、自分の習慣が破壊されでもすると、直きに腹を立てて泣きさへした、その代り何も彼も彼女の思ひ通りになり、誰も彼女に逆らふものがない時には、彼女は非常に親切で愛想よかつた。彼女の家は市内でも最も居心地のいい家の一つに數へられてゐた。財産は彼女の相續した遺産以上に、良人の手によつて得られたものもあつて、非常に裕福だつた。娘二人は彼女と一緒に暮してゐた、息子はペテルブルグのある一流の官立學校で教育を受けてゐた。

マリヤ・ドミトリエヅナとならんで窓際に坐つてゐた老婆は、彼女の父親の妹で、かつて彼女がポクローフスコエで孤獨の幾年を一緒に送つたあの伯母であつた。彼女はマルファ・チモフェーエヅナ・ペストワといつた。彼女は變り物で通つてゐた、きかん氣で、誰にでも面と向つてツケツケ思つてゐる通りを言つた、そして貧乏なくせに千も二千も持つてゐるやうな暮し振りをしてゐた。彼女は亡くなつたカリイチンが我慢できなかつた、で姪が彼にかたぐくや否や、自分の小さい持村へ去つて、そこで或る百姓の煙突もない小屋にまる十年といふものを住み通したのだつた。マリヤ・ドミトリエヅナは彼女を恐れてゐた。老年になつてさへも髪の毛の黒い、すばしつこく目はしのきく、小柄な、鼻の高いマルファ・チモフェーエヅナは、ちゃんと身體を伸ばして、活潑に歩き廻り、そして早口のツキリと、細い透る聲で話した。彼女はいつも白い室内帽を被つて白い短衣を着てゐた。



「どうおしだえ？」と彼女が突然マリヤ・ドミトリエヅナに訊ねた。「溜息なんかついて？」  
「別に」と相手は言った。「なんて美しい雲でせう。」

「それであれが可哀さうだとお言ひなにかえ？」

マリヤ・ドミトリエヅナは返事をしなかつた。

「何だつてゲデオノフスキイはやつて来ないんだらう？」とマルファ・チモフェーエヅナはすばしつこく編み針を動かしながら言った（彼女は大きな毛糸の襟巻を編んでゐた）。「あの男なら一緒に溜息をついてくれるだらうからね——でなければ、何とかごまかしますさ。」

「どうしてあなたはいつもあの方のことといふとひどく仰有るのでせう！ セルゲイ・ペトロウイチは——立派な方ですわ。」

「立派なね！」と非難するやうに老婆は繰返した。

「それにどんなにあの方は亡くなつた良人に忠實だつたでせう！」とマリヤ・ドミトリエヅナは言った、「今でもあの人のことを平気で思ひ出すことが出来ないのです。」

4  
「さうだらうともさ！ あの人のはあの男の耳を掴んで泥濘ひかるの中から引き出してやつたんだもの、」とマルファ・チモフェーエヅナは吐出すやうに言った、そして編み針が一層早く彼女の手の中で躍つた。「如何にも温和しさうに猫を被つてさ、」と再び彼女が始めた、「頭は眞白けなのに、口をあければ、

5  
嘘つばばかり言つて、さうでなければくだらない噂話です。あれでも五等官なんだ！ なんの、坊主の伴といつたところだよ！」

「缺點のない人なんてあるでせうか、伯母さま？ さういふ弱點はあの方にもありますわ、勿論。セルゲイ・ペトロウイチは教育は、無論、お受けにならなかつたし、フランス語も話せません、ですけどあの方は、何とおつしやつても、氣持ちのいい人ですわ。」

「さう、あの男はしよつちゆうお前さんの手を舐めるからね。フランス語が話せないのかい、——可哀さうに！ わたしだつてフランス語の『言葉遣ひ』ぢや大きな顔は出来ないけど。いつそ何も話せなければいいに、嘘も吐かないからね。おや、来たよ、さう言へば、噂をすれば影とやら、」とマルファ・チモフェーエヅナが通りの方を眺めて附けたした。「ほら、歩いて来るよ、お前さんの氣持ちのいい人が。なんてノツポだらう、まるで驚みたいぢやないか。」

マリヤ・ドミトリエヅナは捲髪を直した。マルファ・チモフェーエヅナは薄笑ひを泛べて彼女を眺めた。

「どうしたものさ、なんだか白毛しろがが見えるやうぢやないかえ？ パライシカに小言をお言ひがいいよ。あの子はどこを見てゐるのだらう？」

「もうあなたは、伯母さま、しよつちゆう……」とマリヤ・ドミトリエヅナは怨めしさうに口呟つた、



そして肱椅子の肱を指で打ちはじめた。

「セルゲイ・ペトローウィチ・ゲデオノフスキイさまがお見えになりました！」と頼べたの赤いコサツク服の少年が扉のうしろから飛び出して来て叫んだ。

二

さつぱりしたフロックコートを着て短いズボンを穿き、卵色の揉皮の手袋を嵌めて、そして二つの襟飾りを——黒いのを上、それからもう一つ白いのを下に結んだ、背の高い紳士がはいつて来た。恰好のいい顔と滑かに梳きつけられた兩鬢からはじめて踵のない音のしない長靴に至るまで、すべてがキチンとした整頓と禮儀正しさに息づいてゐた。彼は最初女主人に、それからマルファ・チモフェーエヴナにお辭儀をした、そして、ゆつくり手袋を脱ぐと、マリヤ・ドミトリエヴナの手近付いた。恭々しく、二度續けてそれに接吻をしてから、彼は、急がずに、肱椅子に腰を下した、そして微笑を泛べて指の先を擦りながら、言つた。

「エリザヴェータ・ミハイロヴナさんはお丈夫ですか？」

「はア、」とマリヤ・ドミトリエヴナは應へた、「庭にをりますわ。」

7

「エレーナ・ミハイロヴナさんも？」

「レーノチカも矢張り庭にをりますのよ。何か變つたこと御座いませんか？」

「どうして無いことがあります、どうして無いことがあります、」と客は、ゆつくり瞬きをし乍ら唇を突出すやうに言つた。「フム！……さう、いや、珍聞があります、それも吃驚するやうなのです、ラヴレツキーさんが、フォードル・イワノウィチが歸つて來ました。」

「フェーヂャがかい？」とマルファ・チモフェーエヴナが叫んだ。「いいえお前さん、澤山だよ、いつもの嘘つパチだらう？」

「どういたしましたして、わたしが直接お會ひしましたので。」

「ぢやア、どうだかね。」

「非常にお丈夫になられたです、」とゲデオノフスキイは、マルファ・チモフェーエヴナの言つた言葉が聞こえなかつたやうな風をして、續けた、「肩幅なんかもずつと廣くなつて、顔の色も牙々してゐます。」

「丈夫になりましたか、」とマリヤ・ドミトリエヴナがのろくさく言つた、「何だつて丈夫になんかなつて呉れるのでせうつて氣がされるぢやありませんか？」

「さうですよ、」とゲデオノフスキイが押しもどすやうに言つた、「ほかの者だつたら世間へ顔を出す



のも恥ぢるでせう。」

「何故さ？」とマルファ・チモフェーエヅナが遮つた、「なんといふくだらないことを言ふものだらう？ 人が故國へ歸つて來たのです——それをいつたい何處へいけつて言ふんです？ ほんとにあればえらい悪いことをしましたよ！」

「失禮ですが、奥さん、妻の不品行は、常に夫の責任ですから。」

「それはお前さん、結婚をしないから、それでそんなことをお言ひなのだよ。」——ゲデオノフスキイは強ひて笑顔をつくつた。

「伺ひますが、」と彼は一寸黙つた後で訊いた、「この可愛い襟巻は誰にお上げなさるので？」

マルファ・チモフェーエヅナはチラと彼の方を眺めた。

8 「誰につて」と彼女は言つた、「決して告げ口なんかしない、ズルをしない、嘘を言はない人にさ、そんな人がこの世の中にゐさへしたらね。フェーヂャはわたしよく知つてゐます、あれは唯妻を甘やかしたからいけないのです。さうです、なるほどあれは愛しあつて結婚しました、しかしこの愛の結婚なんてものからは決して何もいいものは生まれません。」それから老婆は、マリヤ・ドミトリエヅナの方へ横目をつかつて、立ち上がりながら、附け加へた。「だがお前さんは、誰のことでも勝手に悪口をお言ひがいいよ、わたしのことでもね、わたしはまゐります、お邪魔しません。」さう言つてマ

9

ルファ・チモフェーエヅナは出ていつた。

「いつもあゝなのです、」とマリヤ・ドミトリエヅナが、伯母を目で送つてから、言つた、「しよつちゆうなんです！」

「お年がお年ですから！ 仕方ありません！」とゲデオノフスキイは言つた。「今もズルをしない入つて仰有つてでした。しかし今時ズルをしない者があるでせうか？ さういふ時代なのです。或る私の友人が、立派な、そして、おことわりをして置きますが、相當地位も悪くない男なのです、それがよく申しました、今時は、とかう申すのです、牝鶏までが粒に近づくのにズルをするのだ——かう横の方から近付かうとしよつちゆう狙つてゐる。しかしわたしが考へますに、奥さま、貴女のお心はほんたうに天使のやうで御座います、どうぞわたしに貴女の雪のやうなお手をおかしくください。」

マリヤ・ドミトリエヅナは弱々しく微笑した、そしてゲデオノフスキイに自分のふくよかな手を小指だけ離して差出した。彼はそれに唇を押し當てた、それから彼女は自分の肱椅子を彼のほうに近づけて、そして心持ち身を傾けて、小聲で訊ねた。

「それでは貴方はあの人にお會ひでしたの？ 本當にあの人は——何ともないんですか、達者で、愉快さうなんですか？」

「愉快さうなんですよ、平氣なんですよ、」とゲデオノフスキイが叫びた。



「貴方は、あの人の奥さん今どこにゐるかお聞きになりませんか？」

「最近まで巴里にをつたのです、この頃は伊太利へ移つたといふことです。」

「恐ろしいことですか、本當に、——フェーヂャの境遇は、わたしはどうしてあの人が堪へていけるか不思議です。それは、どんな人にも不幸は起るものですが、でもあの人は、言つて見れば、歐羅巴中に吹聴されてゐるやうなものぢやありませんか。」

ゲデオノフスキイは歎息した。

「さうですよ、さうですよ。あの女は俳優とも、ピアニストとも、それから、あちらの人の言葉を藉りていふと、獅子とも野獸とも關係してゐるのだつていふぢやありませんか。恥も外聞もまるでなくして終つてゐるのです……」

「ほんとうに可哀想です、」とマリヤ・ドミトリエヅナが言つた、「親戚なものですから、あの人はわたしには、セルゲイ・ペトローウィチ、貴方も御存知でせう、遠縁の甥になりますのよ。」

「どうして、どうして。どうしてわたしが貴女の御家庭に關したことを知らないでをりませう？　ハイ。」

「あの人は宅へ參るでせうか、——貴方どう思召す？」

「さう思はねばなりません、しかしあの方は自分の村へいらつしやるのだといふ事で御座います。」

マリヤ・ドミトリエヅナは眼を空へ向けた。

「あゝ、セルゲイ・ペトローウィチ、セルゲイ・ペトローウィチ、わたしはつくづくわたし達女が身を慎まなければならぬことを思ひますわ！」

「婦人にもいろいろ御座いますよ、マリヤ・ドミトリエヅナ。ありますよ、不幸にも、さういふのが——浮氣つぽいと申しませうか……成程、年にもよります、それにしても、小さい時分からの躰がよくないのですね。（セルゲイ・ペトローウィチは隠しから碁盤縞の青いハンケチを取出して、それを擴げ始めた）。さういふ婦人は、勿論、御座います。（セルゲイ・ペトローウィチはハンケチの端を代る代る自分の唇に持つて行つた）。しかし概して申しますと、考へると、つまり……都會の塵は格別です、」と彼は結んだ。

「お母さま、お母さま、」と部屋へ駈込んで來ながら、愛くるしい十一ばかりの女の子が叫んだ、「ヴラジミル・ニコライチが馬に乗つていらつしつてよ！」

マリヤ・ドミトリエヅナは立ち上つた、セルゲイ・ペトローウィチも立ち上つた、そしてお辭儀をした。「これはこれはエレーナ・ミハイロヴナさん」と彼は言つた、そして禮儀のために部屋の隅へいつて、その長い眞直な鼻をかみはじめた。

「そりやアいいお馬よ！」と少女は續けた。「あの方は今耳門のところへいらつして、あたしとリ-



サ姉さんに、玄關の方へ廻るからつて仰有つたのよ。」  
蹄の音がした、そして美しい栗毛の馬に跨つたスツキリとした風采の騎手が往來に現れて、開け放された窓の前にとまつた。

三

「今日は、マリヤ・ドミトリエヅナ！」と響き高い氣持のいい聲で騎手は叫んだ。「わたしの新しい買物は如何です？」

マリヤ・ドミトリエヅナは窓際に寄つた。

「今日は、ウオルデマールさん！ まあ、いいお馬ですこと！ 誰からお求めになりました？」

「新馬係の士官からです……。強盗奴、高く取りやがつた。」

「なんていふ名ですの？」

「オルランドつていふんですが……。馬鹿げた名前ですよ、わたしは變へようと思つてゐます……。」

Eh bien, eh bien, mon garçon (註—ヨシ、ヨシ)……なんてうるさい奴だ！」

馬は鼻を鳴らし、脚を踏みかへ、泡を吹いた鼻面を振りたくつた。

「レーノチカ、撫でてやつて頂戴、こわがることはない……。」

女の子は窓から手を差伸べた、がオルランドは急に掉立ちになつて、パツと横へ飛んだ。騎手はとり亂さなかつた、ぐつと脚を締めて、鞭でもつて首のところを打つた、そして馬のいやがるのも構はずに、再び彼を窓際に立たせた。

「Prenez garde, Prenez garde (註—氣をおつけ、氣をおつけ)」とマリヤ・ドミトリエヅナが繰返した。

「レーノチカ、撫でて御覽」と騎手が言つた、「わたしは勝手にさしはしないから。」

女の子は手伸ばして、臆病げに、絶えずブルブルと身内を顫はして轡を噛んでゐるオルランドの震へる鼻柱に觸つた。

「ブラーボー」とマリヤ・ドミトリエヅナが叫んだ、「さア、では降りてこちらへ入らつしやいまし。」  
騎手はくるりと馬の向きを變へた、拍車を當てた、そして歩度をつめたギヤロップで往來をずうつと駈けぬけて、中庭へ乗り入れた。一分後に彼は鞭を振りながら玄關の方に通ずる入口から客間の中へ駈け込んだ、同時に、もう一つ別の入口の闕の上に、すらりとした、背の高い、十九歳ばかりの髪の毛の黒い娘が——マリヤ・ドミトリエヅナの長女のリーザ姿を現はした。



いま讀者諸君に紹介したばかりの青年は、ヴラジミル・ニコライチ・パインシンといった。彼は内務省の囑託をしてゐるペテルブルグの官吏であつた。〇市へは臨時囑託の資格で來てゐるので、遠縁に當る知事のゾンネンベルグ將軍の指圖を受けてゐた。パインシンの父親といふのは、退職の參謀騎兵大尉で、評判の賭博者で、甘つたるい眼と皺くちやな顔をした、いつも神經質に唇をピクピクさせてゐる人で、一生涯上流貴族の間を泳ぎ廻り、兩方の首都のイギリス俱樂部に顔を出して、要領のいい、ひどく當にはならないが、親切な好い男だといふ評判を取つてゐた。その要領のいいのに拘らず、彼は殆ど常に貧乏のすぐ近くにあつて、たつた一人の息子にもわづか許りの滅茶苦茶になつた財産を殘しただけであつた。その代り彼は、自分流に、息子の教育について骨を折つた、ヴラジミル・ニコライチはフランス語を美事に、英語を上手に、獨逸語を下手に話した。さうなくちやならない、ちやんとした人達が獨逸語を上手に話すことは恥かしいことである、しかし或る、それも多くは滑稽な場合に、獨逸語をちよつと使ふのは——ペテルブルグの巴里つ子の所謂、*C'est mine très chic*（註——それも結構）で、構はない。ヴラジミル・ニコライチは十五歳の頃から既に平氣で客間へ這入つて

ゆき、氣持ちよくそこで立ち廻り、丁度いい時に引き下ることが出來た。パインシンの父親は自分の息子の爲に多くの手蔓を獲た、三遍勝負の間に札を切りながらとか、うまくいつた「一人勝ち」の後とかに、彼は自分の「ワローヂカ」のことをどんななかの賭博好きの知名の士に一言申し上げるのを忘れなかつた。一方またヴラジミル・ニコライチは、自分でも、大學にゐた間に、そこを彼は學士の稱號を獲て出たのであるが、名門の家柄の青年達と知己になつて、上流の家庭に出入し始めた。彼はどこでも歓迎された、男振りも悪くなかつたし、氣輕で、剽輕で、常に健康でそして萬事によく氣がついて、必要な所では——恭々しく、差支ない所では——圖々しかつた、申分のない同僚で、 *charmant garçon*（註——立派な男）だつた。秘められた世界が彼の前に展かれた。パインシンは直きに社交術の秘訣を呑み込んだ、彼はその慣例に心からの尊敬を拂ふ事が出來た、半ば冷笑的な物々しさをもつてくだらぬことに従事することが出來、すべての重大な事をつまらぬことに思つてゐるやうな風をすることが出來た、巧に舞踏をし、英國風の服裝をした。僅かの中に彼はペテルブルグで最も愛想のいい要領のいい若者の一人として評判された。パインシンは實際非常に要領がよかつた——父親にも劣らなかつた、しかし彼はその上に非常な才子でもあつた。彼は何でも出來た、彼は上手に歌つた、達者に繪を描いた、詩を作つた、美事に舞臺で芝居をした。まだやつと數へ年二十八であつたが、彼はもう侍從で、可成り上の官等を持つてゐた。パインシンは深く自分を、自分の才幹を、



自分の聰明を、信じてゐた、彼は大膽に愉快に、ぐんぐん先へ進んだ、彼の生活はさながら油の上を流れるやうに流れて行つた。彼はすべてのものに、老人にも若い者にも、愛されつけてゐた、で人間を、殊に婦人達を理解してゐると思つてゐた、彼はよく彼女達のありふれた缺點を知つてゐた。藝術に門外漢でない人間として、彼は自分の裡に情熱をも、或る種の昂奮をも、歡びをも感じてゐた。そしてその結果としていろいろな例外を自分に許してゐた、放蕩をしたり、社交界以外の人達と知己になつたり、概して自由に氣樂に振舞つてゐた、しかし心持ちは彼は冷やかで狡猾だつた、騒がしい酒宴の最中にも、彼の賢い小さな褐色の眼はすべてを警戒し偵察してゐた、この大膽な、この自由な若者は決して我れを忘れ、全く夢中になるといふことがなかつた。彼は決して自分の成功を誇つたことがなかつたことを彼の名譽のために言つて置く必要がある。マリヤ・ドミトリエヴナの家へは彼は〇市へ着くと直ぐに姿を現した、そして直ぐにすつかり馴れつこになつて終つた。マリヤ・ドミトリエヴナは彼に夢中になつた。

パーンシンは愛想よく部屋に居合したすべてのものにお辭儀をした。マリヤ・ドミトリエヴナとリザウエータ・ミハイロヴナに握手をして、軽くゲデオノフスキイの肩を叩いた、それからくるりと踵を廻して、レーノチカの頭を捉へて額に接吻した。

「あんな荒い馬にお乗りになつて可怕くありません？」とマリヤ・ドミトリエヴナが訊ねた。

「いいえ、あいつは非常におとなしいですよ、それよりも何が可怕いつて、わたしはセルゲイ・ベトロウイチとプレフェランスをやるのが一番可怕いですよ、昨日ベレニーツインさんのところでわたしは酷い目にあはされました。」

ゲデオノフスキイは薄つぺらな卑屈な笑ひかたをした、彼は知事のお氣に入りであるペテルブルグの若い、華々しい官吏に取入らうとしてゐた。マリヤ・ドミトリエヴナとの談話の中で彼は屢々パーンシンの驚嘆すべき才能を述べ立てた。果してさうであるならば、と彼は論じた、どうして稱讃せざにゐられませう？ 最高級の生活にこの人は成功してゐる、模範的に勤務してもゐる、傲慢らしいところは少しもない。尤も、パーンシンはペテルブルグでも有能な官吏の一人に數へられてゐた、仕事は彼の手許で熱した、彼はそれについて、自分の仕事に特別の注意を拂はない社交界の人に相應しいやうに、冗談交りに話した、しかし「仕事師」だつた。長官達はかういふ部下を愛してゐる、彼自らは、ならうと思へば、臆ては國務大臣にもなれることを疑はなかつた。

「わたしが貴方を酷い目にあはせたと仰有る、」とゲデオノフスキイが言つた、「しかし先週わたしから二十ルーブルお勝ちになつたのはどなたで御座いましたかな？ それからまた……」

「悪漢、悪漢」とパーンシンは愛想よい、しかし殆ど輕蔑したやうな調子で彼を遮つた、そしてそれ以上彼には注意を向けなくて、リーザのところへ近づいた。



「わたしはオーベルの序曲を見付けることが出来ませんでした」と彼は始めた、「ベレニーツイナ夫  
人は古典音楽なら何でもあると言つて大そう威張つてゐましたが、——本當はあの女ひとのところにはポ  
ルカとワルツの外は何も無いのです、併しわたしはもうモスクワへ手紙を出しました、ですから一週  
間もしたら序曲をお手になさることが出来ませう。それから」と彼は續けた、「わたしは昨日新しい  
ロマンスを書きました、歌詞もわたしのです。よかつたら、おきかせしませうか？ どんなものにな  
つたか解らないのです、ベレニーツイナ夫人は大變いいつて言つてゐましたけれど、併しあの女ひとのい  
ふことなんか何にもなりません、——わたしは貴女の御意見を伺ひたいんです。しかし、まア今度  
にしませうか……」

「何故こんどになさいますの？」とマリヤ・ドミトリエヴナが口を挿んだ、「どうして今ぢやいけま  
せんのか？」

「承知しました」とパーンシンはチラと現れて直ぐとまた消えて了つた一種の晴れ晴れとした嬉し  
さうな微笑を泛べて言つた、——膝で椅子を寄せて、ピアノの前に坐つた、そして五六の和音アコードを取つ  
て、はつきり語を區切りながら、次のやうなロマンスを歌ひはじめた。

月ぞ漂ふ地上遙かに

蒼白き雲間を縫ひて、

されど至高いとき所より妙なる光

海波を動かす。

吾が心の海なれを戀ひて

己が月となせば、

たゞなれをのみ息づきどよむ、——

喜びに、はた悲しみに。

愛の憂鬱に、聲なき憧れの憂鬱に

心は喘ぐ、

吾は苦し……さあれなれは知らず悩みを、

かの月のごとく。

第二聯はパーンシンによつて特別の表情と力を籠めて歌はれた、風のやうな伴奏の中に浪のどよめ  
きが聞かれた。吾は苦し……といふ言葉のあとで、彼は軽く溜息をついた、眼を伏せて、そして聲を  
叫くやうに低めた。彼が歌ひ終つた時、リーザはモチーヴを讃めた、マリヤ・ドミトリエヴナは、い



いこと、と言つた、——がゲデオノフスキイは、素的です！ 詩も、韻律も同じやうに實に素的です！と叫びさへした……。レーノチカは子供らしい尊敬をもつて歌ひ手を見成つた。一口に言つて、そこに居合せたすべてのものに若いデレツタントの作品は非常に氣に入つた。併し控室に通ずる客間のうしろに、たつた今這入つて來たばかりの、老紳士が立つてゐたが、その人の伏せられた顔の表情と肩の動かし具合から判断すると、パーンシンのロマンスは成程美しいことは美しいが、彼には満足と與へなかつたらしかつた。暫く待つてから、そして粗末なハンケチで長靴の塵を拂つてから、その人は急に眼をしかめ、氣難かしげにきつと唇を結び、自分の、さうでなくとも前こごみの背をかがめて、靜かに客間に這入つて來た。

「あ！ フリストフォル・フォードルイチ、今日は！」と誰よりも先にパーンシンが叫んだ、そして素早く椅子から立上つた。「わたしは貴方がそこにいらつしやうとは思ひませんでした、——貴方がいらつしやるんだつたら決して自分のロマンスなど歌ふんぢやありませんでした。貴方が軽い音樂に興味を持つてをられないのを、わたしは知つてゐます。」

「わたしは聴きませんでした、」と拙いロシア語で這入つて來た人が言つた、そして皆のものにお辭儀をして、間が悪さうに部屋の眞ん中に立ちどまつた。

「貴方、ムツシユウ・レンム」とマリヤ・ドミトリエヅナが言つた、「リーザのお稽古においでくだ

さいましたの？」

「いえ、リサフェート・ミハイロヅナさんぢやありません、エレーナ・ミハイロヅナさんにです。」

「あ！ さう、ぢや——結構ですわ、レーノチカ、レンムさんとお二階へいらつしやい。」

老人は少女の後に縦いて行きかけた、しかしパーンシンが彼を呼び止めた。

「お濟みになつても歸らないでください、 Fristフォル・フォードルイチ」と彼は言つた、「リーザウエータ・ミハイロヅナさんと二人でベートオベンのソナタを二部で弾きますから。」

老人は何か鼻の下で呟いた、がパーンシンは拙い發音の獨逸語で續けた。

「わたしにリザウエータ・ミハイロヅナさんが、貴方があの女ひとにお上げになつた宗教的なカンタータを見せて呉れました、——結構なものです！ どうぞわたしが嚴肅な音樂を評價し得ないなんて思はないでください。——それどころか、時に退屈ではありませんが、しかしその代り非常に爲めになりますよ。」

老人は耳まで赤くなつた、リーザの方を斜に見やつて、そして急いで部屋を出て行つた。

マリヤ・ドミトリエヅナはパーンシンにもう一度ロマンスを繰返すやうに頼んだ、しかし彼は學識ある獨逸人の耳を侮辱することを欲しないと説明した、そしてリーザにベートオベンのソナタを練習しようと言つた。マリヤ・ドミトリエヅナは溜息をついて、自分もゲデオノフスキイと一緒に庭を散



歩するやうに勧めた。「わたし」と彼女は言つた、「もう少し可哀なフェージャのことでお話をしたり、御相談を願つたりしたいの。」ゲデオノフスキイは微笑した、お辭儀をして、二本の指でもつて帽子を一方の鏝にきちんと載せられた手袋ごと取つて、そしてマリヤ・ドミトリエヴナと一緒に部屋を出た。部屋にはパーンシンとリーザが残つた、彼女はソナタを取つて展げた、二人は黙つてピアノの前に坐つた。階上からはレーノチカの不正確な指で奏する音階の弱々しい響が聞こえて來た。

## 五

フリストフォル・テオドル・ゴトリーズ・レンムは一七八六年、サキノニヤ王國の、ヘムニーツといふ町の、貧乏な音楽家の家に生れた。父親はホルンを、母親は立琴をやつてゐた、そして彼はもう五歳の時から三種類の樂器を稽古してゐた。八歳で彼は孤兒になつた、そして十歳から自分の藝で生活の糧を獲ることを始めた。彼は長い間放浪し続け、どこでも演奏した——酒場でも、市場でも、百姓の婚禮でも、舞踏會でも、遂には合奏團に加はつて、そして次第に昇進をして、樂長にまでなつた。演奏家としては彼はかなり拙かつた、しかし本質的に音樂を理解してゐた。二十八歳の時に彼はロシヤへ移住して來た。或る大地主が彼を呼び寄せたのであるが、實は音樂なんか迎も我慢の出來ない方

だつたが、見榮で合奏團を置いてゐたのだつた。レンムはこの地主のところにて七年間樂長として住み通した、そして空手で彼のところを飛び出した、地主が零落おぼろれたからで、約束手形をやらうと思つてゐたが、しかし後にはそれさへも止めてしまつた、——と口に言つて、鏝一文かきに拂はなかつたのであつた。人々は彼に歸國するやうに勧めた、併し彼はロシヤから、偉大なるロシヤから、藝術家達のこの金鑛から、乞食になつて歸ることを欲しなかつた、彼は踏みとどまつて、自分の幸福を試さうと決心した。二十年間哀れな獨逸人は自分の運命を試みて、いろ／＼な人のところに身を寄せた、モスクワにも、縣まちの市にも住んだ、艱難辛苦をした、貧乏の味を知り、氷に打突かる魚のやうに腕きもした、しかし故國へ歸らうといふ考へは、彼の出遭つた如何なる不幸のさ中にも彼を見棄てなかつた、この考へ一つが彼の心を引立ててゐたのであつた。運命はしかしこの最後のそして最初の幸福をも彼に興へようとはしなかつた、五十歳にして、病み疲れ、早くも老ひさらばうて、彼はO市に辿りついた、そしてそこに永久に、もうすつかり自分にとつて憎むべきロシヤを見棄てようといふ一切の希望を失つて、どうにかかうにか出教授でもつて自分の貪しい生活を支へながら、落着いて了つたのである。レンムの容姿が彼に禍ひした。彼は背が低く、猫背で、曲つて突出した肩胛骨と引込んだ腹と、巨大な扁平な蹠と、筋張つた赤い手の、固いコチコチした指の青白い爪を持ち、顔は皺だらけで、頬は落ち窪み、唇はきつと結ばれて、それを彼は絶えず動かしたり噛んだりしてゐるのだが、それが



彼の癖のムツリ黙りこんでゐる時には、殆ど不吉に近い印象を與へた、彼の白髪はいくつかの房になつて高くもない額の上に懸かつてゐた、今くべた許りの石炭のやうに、彼の小さなぢつと据つた眼はボンヤリくすぶつてゐた、彼は大儀さうに、一步々自分のぎごちない體軀を押し出すやうにしながら歩いた。その他の彼の動作は籠の中の梟の、丁度みんなから見られてゐるのを感じて、而も殆ど自分ではその大きな、黄ろつぽい、きよとんと眠たげにしばらくいたいゝる眼で見えずにゐる時の、ぎごちない科を思ひ出させた。古いむかしの、頑固な悲しみがこの哀れな音樂家の上に消し難い痕跡をとどめ、彼の、さうでなくても美しくない姿を醜くしてゐた、けれども第一印象だけにとゞまらないでゐることの出來た者には、何か善良な、誠實な、何か並ならぬものがこの半ば破壊された存在の中に感じられた。バッハとヘンデルの崇拜者であり、潑刺とした想像力と獨逸國民に特有な想念の大膽さとを惠まれたその道の達人であるレンムは、あるひは——誰が知らう？——祖國の偉大な作曲家の列に加はつたかも知れぬのだ、若しも生活が彼を違つて導いたならば、が、不幸な星の下に彼は生れた！彼は盛りの頃に澤山書いた——しかも彼は自分の作品の一つをも出版されたのを見ることが出來なかつた、彼は型の如く仕事にかかり、序にお辭儀もし、丁度いい時に奔走することが出來なかつた。何でも、よほど以前に、或る彼の崇拜者で友人の、同じ獨逸人でそして同じやうに貧乏なのが、わざわざ金を出して彼のソナタを二つ出版して呉れたが、——しかもそれは皆な樂器店の穴藏の中にそつ

り残つて、闇から闇へ跡方もなく、さながら夜誰かが河の中へでも棄てて了つたやうに、消え失せて了つたのであつた。レンムは遂にすべてを斷念した、それに年もとつた、彼は干乾びて、手の指とおなじやうに硬張つてしまつた。一人、養育院から連れて來た年をとつた料理女と一緒に（彼は生涯結婚をしなかつた）彼はO市のカーリーチン家から餘り遠くない小さな家に住んで、散歩をしたり、バイブルと新教徒の讚美歌集を讀んだり、シュレーゲルの譯でシェークスピアを讀んだりしてゐた。彼は長いこと作曲をしなかつた、しかし思ふに、リーザが、彼の秀れた女弟子であるリーザが、彼の心を動かすことが出來たのであらう、彼は彼女のために、パーンシンの言つたカンタータを書いたのである。このカンタータの歌詞は讚美歌集から抜粹されたもので、二三の詩句は彼自身が書いた。「主」を二つの合唱が讚め歌ふ、——幸福な者達の合唱と、不幸な者達の合唱と、その二つが最後に溶け合つて、そして一緒に歌ふのである、「恵み深き神よ、罪深き吾等を許し給へ、して吾等よりなべての邪惡なる思ひと地上の願ひとを焼き棄て給へ。」——非常に叮嚀に書かれた、彩色さへも施された扉には、「義しき者のみ正し。宗教的カンタータ。吾がいとしき弟子、エリザウェータ・カリーチナのために作りかつ捧ぐ、彼女の師なるハー・テー・デー・レンム」と書かれてあつた。「義しき者のみ正し」と「エリザウェータ・カリーチナ」といふ文字は彩光で圍まれてゐた。下のところには、「おんみのためにのみ、für Sie allein」と書き添へられてあつた。——それでレンムは赧くなつて、リ



リザを横目で見たのである、彼はパーンシンがカンタータのことを言ひ出した時、非常に苦しかった。

六

パーンシンは強くキツパリとソナタの最初の和音<sup>フツコトド</sup>をはじめた（彼は第二部の方を弾いてゐた）、しかしリザは自分の方を始めなかつた。彼は中止して、そして彼女の顔を眺めた。眞直に彼の上に向けられたリザの眼は、不満の色を現してゐた、彼女の唇は微笑してゐなかつた、顔全體がいかめしく、殆ど悲しげであつた。

「どうなすつたのです？」と彼は訊いた。

「何故あなたは御自分のお約束をお守りになりませんでしたの？」と彼女は言つた、「わたくしあの方にそのことを仰有らなかつてお約束で、フリストフォル・フォードルイチのカンタータをお見せしたのでしたわ。」

「濟みませんでした、リザウェータ・ミハイロヅナ、——つい口から出ちやつたんです。」

「貴方はあの方をお苦しめなさいましたわ、——それからわたくしをも矢張り。もうあの方はわたくしのこと信用なさいませんわ。」

「どうしろとおつしやるんです、リザウェータ・ミハイロヅナ！ 子供の時分から平氣で獨逸人を見ることが出来ないのです、それだからわたしはあの人を窘めたくなるのです。」

「貴方は何をおつしやいますの、ヅラヂミル・ニコライチ！ あゝ獨逸人は、可哀想な、寂しい、不幸な人ですわ——それでも貴方にはあの人可哀想ぢやありませんこと？ あの人を窘めたくなりませうこと？」

パーンシンは困惑した。

「貴女のおつしやる通りです、リザウェータ・ミハイロヅナ」と彼は言つた。「みんな——わたしのいつもの軽卒が悪いのです。いいえ、何もおつしやらないで下さい、わたしは自分をよく知つてゐます。わたしの軽卒は随分わたしに禍ひしました。そのお蔭でわたしはエゴイストといふことになつて了つたのです。」

パーンシンは暫く口を噤んだ。何かから話をはじめても、彼はいつも結局は自分自身のことを語るところに落ちるのだつた、そしてそれは彼のところにあつては何だか可愛らしくそしてやさしく、誠實に、まるで思ひがけないやうに、出て来るのだつた。

「現に貴女のお宅でも」と彼は續けた、「お母さまは、無論、わたしによくして下さいませ——あの方は非常に善良です、貴女は……しかし、わたしは貴女のわたしに對する御意見を知りませぬ、その



代りあなたの伯母さまは唯もうわたしを我慢することが出来ないのです。わたしはあの女をも矢張り、どんなかの軽卒な、馬鹿げた言葉で怒らせたのに相違ありません。あの女はわたしを嫌つてゐるぢやありませんか、さうでせう？」

「ええ、」とリーザは少し口ごもつて言つた、「貴方はあの女の氣に入つてゐませんか。」

パーンシンは鍵盤の上に指を走らせた、微かな苦笑ひが彼の唇の上を這つた。

「それで、貴女は？」と彼は言つた、「わたしは貴女にも矢張りエゴイストに見えますか？」

「わたくし貴方をまだよく存じませんの、」とリーザは押し戻すやうに言つた、「でもわたくし貴方をエゴイストだなんて思つてゐませんわ、わたくし、それどころか、お禮を申上げなければなりませんわ……」

「知つてます、知つてます、何を貴女がおつしやらうとしてゐるのか、」とパーンシンは彼女を遮つた、そして再び指を鍵盤の上に走らせた、「わたしが貴女に持つて來た樂譜だの、書物だの、貴女のアルバムに書いた拙い繪だの、さういつたものの爲めにでせう。わたしはそれをみんなすることが出來ます——それでも矢張りエゴイストであり得ます。貴女がわたしに退屈をされたり、わたしを悪い人間だと思つてゐられないことは解ります、でも矢張り貴女は、わたしが——何と言ふんでせうか？——法螺の爲めには親も兄弟も無い男だつて思つていらつしやるのです。」

「貴方はすべての世間的な人達と同じやうに、落着きがなくなつて忘れっぽいのですわ、」とリーザが言つた、「それだけですわ。」

パーンシンはちよつと顔をしかめた。

「いや、」と彼は言つた、「わたしのことを言ふのはよませう、わたし達のソナタを始めることにしませう。只一つわたしは貴女に願ひして置きますが、」と彼は樂譜臺の上の樂譜の頁を手で慰しながら言つた。「どう貴女がわたしのことをお考へになつてもよろしい、エゴイストだつて仰有つてもいいです——構ひません！　しかし世間的な人だなんてわたしを言はないで下さい、そんなことを言はれるとわたしは堪りません……。Anch'io sono Pittore. わたしはこれでも藝術家です、へほですが、そしてそれを、がその、わたしがへほ藝術家だつてことを——わたしは貴女に今すぐ實地にお目にかけます。始めませう。」

「ええ、始めませう、」とリーザが言つた。第一樂章のアダヂオはパーンシンが一度ならず間違へたに拘らず、可成りうまく行つた。自分の手に入つたものなら彼は非常に器用に弾いた、しかし解釋は拙かつた。その代りソナタの第二樂章の——可成り早いアレグロは——まるで駄目だつた、第十二拍節で、二拍節だけ遅れたパーンシンは、我慢が出來なくなつて、笑つて自分の椅子を退らせた。

「駄目だ！」と彼は叫んだ、「わたし今日は弾けません、レンムさんに聞かれなくつてようござんし



た、あの人は氣絶するでせう。」

リーザは立上つた、ピアノを閉じて、パーンシンの方へ向いた。

「ぢや、何をしませう？」と彼女は訊いた。

「ほんとに貴女らしい質問ですね！ 貴女はちつともぢつとしてゐられない女ひとですね。ぢや、よかつたら、繪を描きませうか、すつかり暗くなつて了はないうちに。多分もう一人の女神——繪の女神は——何といひましたつけ？ 忘れまして……もう少しわたしに好意を持つてくれるかも知れません。アルバムはどこにありますか？ あのわたしの風景はまだ完成してゐなかつたと思ひますが。」

リーザはアルバムを取りに次の部屋へ行つた、がパーンシンは、一人後に残つて、隠しから麻のハシケチを出して、自分の爪を擦つた、そしてかう斜に、自分の手に見入つた。彼の手は非常に美しく白かつた、左手の拇指に彼は螺旋形の金の指環をはめてゐた。リーザが戻つて來た、パーンシンは窓際に腰を下して、アルバムを擲げた。

「ハア！」と彼は叫んだ、「貴女はわたしの風景の模寫を始められたんですね——結構です。非常にいいです！ 唯ここんところが——鉛筆を拜借——すこし影が薄いですね。見ていらつしやい。」

さう言つてパーンシンは勢ひよく幾本かの長い線を描き加へた。彼はしよつちゆう同じ一つの風景を描いてゐた、前景には大きなモジャモジャの立木があつて、遠くに草原を見せ、地平線上にぎざぎ

ざの山脈を描いた。リーザは彼の肩越しにその仕事を見てゐた。

「繪の方では、一般にまあ人生に於てはさうなのですが、」とパーンシンは、頭を右に左にかしげながら言つた、「輕快と大膽さが——第一なんです。」

丁度この時レンムが部屋に這入つて來た、そして輕くお辭儀をして、出てゆかうとした、しかしパーンシンはアルバムと鉛筆を投げ出して、彼を遮つた。

「貴方はどこへ行かうつていふんです、フリストフォル・フォードルイチ？ 貴方はお茶にお残りにならないのですか？」

「歸らなくちやなりません、」とレンムは氣難しさうな聲で言つた、「頭が痛むのです。」

「くだらない、——お残りなさい。シェークスピアについて議論をしようぢやありませんか。」

「頭が痛むのです、」と老人は繰返した。

「わたし達は貴方のみないところでベートオベンのソナタをやらうとしたんですよ、」とパーンシンはやさしく彼の腰を抱いて、晴れやかに微笑しながら續けた、「しかしまるで駄目でした。考へて見てください、わたしは二つの音符を正確にとることが出来なかつたんです。」

「貴方はもう一度自分のロマンスを歌はれる方がよろしい、」とレンムが言つた、そしてパーンシンの手を拂ひのけて、さつさと出て行つた。



リーザは彼の後を追った。彼女は玄關の階段のところで彼に追いついた。

「フリストフォル・フォードルイチ、お待ち遊ばせ、」と彼女は彼に獨逸語で、廣庭の緑色の草の上を彼を門のところまで送つてゆきながら言つた、「わたくし濟みませんでした——御免あそばせね。」

レンムは何も答へなかつた。

「わたくしヴラヂミル・ニコライチに貴方のカンタータをお見せしました、わたくしあの方があれをお解りになると信じましたの、——そしてあれは、確に、あの方に非常に氣に入りましたわ。」

レンムは立ちどまつた。

「それは何でもありません、」と彼はロシア語で言つた、そしてそれから自分の國の言葉で附け加へた、「しかしあの方は何も解りはしません、どうして貴女にはそれが解らないのでせう？——あの方はヂレッタントです——そしてそれだけです！」

「貴方は誤解していらつしやいますわ、」とリーザは反對した、「あの方はなんでもお解りになりますわ、そして御自分でも大抵なんでもお出来なさいます。」

「さうです、何でも二流にです、安物で、やつつけです。それが氣に入られるのです、それであの方も氣に入られるのです——いや、結構なことです。わたしは怒りません、あのカンタータとわたし——わたし達はどちらも老ぼれの馬鹿ものなんです、わたしは少し恥かしいです、しかし何でもあり

ません。」

「御免遊ばせね、フリストフォル・フォードルイチ」とリーザは再び言つた。

「何でもありません、何でもありません、」と彼は再びロシア語で繰返した、「貴女はいい方です……おや、誰か來ました。さよなら。貴女は非常にいい方です。」

さう言つてレンムは急ぎ足で門の方へ歩み去つた、そこからは彼の知らない一人の紳士が、灰色の外套を着、麥藁帽子を被つて這入つて來つた。叮嚀にその人にお辭儀をして（彼はO市のすべての新顔にお辭儀をした、知人には通りで顔を反向けた——さういふことにもう彼はしてゐた）、レンムはその側を通り抜けて、そして垣根のあちらへ姿を消した。見知らぬ人は吃驚して彼の後姿を見送つた、それからリーザの方を見ると、眞直に彼女の方へ歩み寄つた。

七

「貴女はお解りにならないでせうね、」と彼は帽子を取りながら言つた、「しかしわたしは解りましたよ、最後に貴女にお目にかかつてからもう八年になりますね。貴女はあの時分子供でした。ラヴレツキイです。お母さんはおいでですか？ お目にかかれませうか？」



「お母さまはお悦びなさいますわ、」とリーザが押し戻すやうに言った、「母はこちらへおいでになつたのを存じてをりますのよ。」

「貴女は、多分、リザウェータとおつしやいましたね？」とラヴレツキイは階段を登り乍ら言った。「ええ。」

「わたしは貴女をよく憶えてゐます、貴女はその頃からもう忘れられないやうな顔をしてゐました、わたしはあの時分よく貴女にキヤラメルを持つて来てあげたものでした。」

リーザは赧くなつた、そして何といふ不思議な方だらうと思つた！ ラヴレツキイはちよつと控室に立ちどまつた。リーザは客間へ這入つた、そこにはパーンシンの話聲と笑聲とが響いてゐた、彼は何か町の噂を、もう庭から歸つて来てゐたマリヤ・ドミトリエヅナとゲデオノフスキイに話して、そして自分でその話してゐることを大聲で笑つてゐた。ラヴレツキイの名を聞くと、マリヤ・ドミトリエヅナはすつかりどぎまぎして、蒼くなつた、そして彼を迎へに立上つた。

「御機嫌よう、御機嫌よう、わたしのやさしい從兄弟！」と彼女はひき伸したやうな殆ど涙ぐんだやうな聲で叫んだ、「ほんとうによく！」

「御機嫌よう、わたしのやさしい從姉妹」とラヴレツキイも言つた、そして懐しげに彼女の手を握り緊めた、「お變りもなく？」

「おかけ遊ばせよ、おかけ遊ばせよ、わたしの大事なフォードル・イワローヌイチ。まア、嬉しいこと！ 先づ第一に、わたしの娘を、リーザを紹介させてくださいまし……」

「わたしは自分でもうリザウェータ・ミハイロヅナと知己になりました、」とラヴレツキイは彼女を遮つた。

「ムツシユウ・パーンシン……。それからセルゲイ・ペトロウイチ・ゲデオノフスキイさん……。さア、おかけ遊ばせよ！ お目にかかつてながら、本當に、自分の眼が信じられないくらゐですわ。お達者ですこと？」

「御覽の通り、元氣でゐます。それに貴女も、——ちつともお變りなさらないやうで——この八年間にすこしもお痩せになられなかつたですね。」

「随分長いことお目にかかりませんでしたのね、」と空想的にマリヤ・ドミトリエヅナは言つた。「何處から今おいでになりましたの？ 何處へおとまりになる……いえ、わたしかう申したかつたのです、と彼女は早口に言ひ直した、「かう申したかつたのですよ、ずつとこちらにいらつしやるお意りかつて？」

「わたしは今ベルリンから來たのです、」とラヴレツキイは言つた、「そして明日すぐ村へ參ります——多分、永住するやうになるでせう。」



「貴方は、無論、ラヴリキーにお住居になるのでせう？」  
 「いえ、ラヴリキーぢやありません、ここから二十五露里ばかり奥に小さな村がわたしにあるんで、わたしはそこへ行くつもりです。」

「それはあのグラフィイーラ・ペトロヴナさんからの？」

「さうです。」

「でも、フョードル、イワーヌイチ！ ラヴリキーにはあんなにお立派なお住居があるぢやありませんか？」

ラヴレツキイは心持ち眉をひそめた。

「ええ……ですけれど、その村にも小さな傍屋があるんです、それにわたしには今のところそれ以上何も必要がないのです。あすこが——今のわたしに一番相應しいのです。」

マリヤ・ドミトリエヅナは再び、からだを眞直にして、両手を開きさへしたほど困惑した。パーンシンが彼女の助けに飛込んだ、そしてラヴレツキイとの對話を引受けた。マリヤ・ドミトリエヅナはすぐ落着いた、肱椅子の背に身を沈めて、そして唯時々口を挿んだ、がそれでゐて酷く氣の毒さうに自分のお客を眺めたり、酷く物々しげに溜息をついたり、それからまた酷く佗しさうに頭を振つたりしたので、相手は遂々堪らなくなつて、可成り鋭く、どこかお悪いのですか？ と訊ねた。

「お蔭さまで、」とマリヤ・ドミトリエヅナが言つた、「でも何故ですか？」

「ただ、お悪いんぢやないかと思つた丈けです。」

マリヤ・ドミトリエヅナはツンとした、そしていくらか侮辱されたやうな顔付をした。「若しさうなら」と彼女は思つた、「さうで、わたしはちつとも構やしないよ、お前さんて人はどんなことだつて屁でもないんだからね、他の者なら悲しみの爲めに痩せるところだよ、それだのにお前さんは却て肥つたぢやないか。」マリヤ・ドミトリエヅナは心の中ではすこしも遠慮しなかつた、口へ出して言ふ時にはさすがにずつと優美であつた。

ラヴレツキイは、實際、運命の犠牲らしくなかつた。彼の頬の紅い、大きな白い額とすこし厚ぼつたい感じの鼻と、廣い正しい唇とを持つた、純ロシア的な顔からは、實に曠野の健康とガツシリとした永久的な力が感ぜられた。彼は美事な體格をしてゐた、——そして灰白色の髪は、若者のそのやうに、彼の頭上に波うつてゐた。唯彼の、碧い、腫れぼつたい、そしていくらか見据ゑたやうな眼の中にだけ——沈鬱でもなければ、疲勞でもないものが認められた、そして彼の聲はなんだか餘りにならな過ぎるくらゐ、なだらかだつた。

「おや、あれはフェーチャぢやないかえ？」と不意に隣の部屋の、半ば鎖された扉の向うで、マルファ・チモフェーエヅナの聲が響いた、「フェーチャだよ、ほんとに！」さう言つて老婆はつかつかと



客間へ這入つて来た。ラヴレツキイは椅子から立ち上る間がなかつた、だのにもう彼女は彼を抱き緊めてみた。「ちよいとお見せ、お見せ、」と彼女は彼の顔から身を離しながら言った。「へえ！ほんとになんてお前は立派だらう！ 老けたけど、しかしちつとも醜くならなかつたよ、本當に！ なんだつて手なんか接吻するのさ——お前わたしをぢかに接吻しておくれ、若しわたしの皺くちやな頬でも構はなかつたら。多分、わたしのことなんか訊きもしなかつたんだらう、どうです、伯母は生きていますかねつて？ だがお前はわたしの手で生れたんぢやないか、なんてまア年をとつたものだらう！ けど、そんなことはどうでもいい、どこでお前がわたしを思ひ出してくれたつてね！ でもお前は歸つて来たから、いい子だよ。それで何かえ、お前さん」と彼女はマリヤ・ドミトリエヅナに向つて附け加へた、「あの子に何か御馳走をしてくれましたか？」

「わたしは何も欲しくありません、」と急いでラヴレツキイが言った。

「まア、お茶ぐらゐはお上りな、お前。まア、まア！ どこか知らないところからやつて来たのに、お茶もくれないのなものね。リーザ、行つて、支度をしておくれ、急いでだよ。わたしは憶えてゐるが、これは小さい時大變な大喰ひでね、だから今だつて、きつと、喰ひ辛抱だよ。」

「今日は、マルファ・チモフェーエヅナ」とパーンシンが横の方から、そこらを歩き廻つてゐる老婆のところへ近づいて、低くお辭儀をしながら言った。

「許して下さいよ、貴方」とマルファ・チモフェーエヅナは押しつけるやうに言った、「嬉しくつて貴方に氣が附かなかつたのです。母親に似て来たよ、お前」と彼女は再びラヴレツキイの方を向いて續けた、「鼻だけは父親似だつたが、成程父親をつくりだよ。それで——長くおいでかい？」

「明日立ちます、伯母さん。」

「何處へ？」

「村へです、ワシーリエフスコエへ。」

「明日？」

「明日です。」

「ぢや、明日なら、明日がいいよ。幸ひあれ、——お前が一番よく知つてゐるわけだからね。唯お前、忘れないでね、お別れに来るんですよ。」老婆は彼の頬を軽く叩いた。「わたしはお前に會へようとは思はなかつた、と言つても死ぬとも思はなかつたがね、いいえ——わたしはまだ十年位は大丈夫だよ、ベストフの血統はみんな長命だからね、亡くなつたお前の祖父さんが、よく、二人前の壽命を授かつてゐるんだつて言ひ言ひしたものだよ、それにお前がどれだけまだ外國をぶら付いてゐるか、解りやしなかつたぢやないか。だから、しかしお前はまだどうして若者だよ、若者です、多分、昔のやうに、十ブードを片手で差上げることが出来るだらう？ お前の父親といふ人は、かう言つちや悪いが、も



う何かといふと尻理窟を並べてゐたが、しかしお前のために瑞西人を雇つたのは大出来だつたよ、憶えてゐるかえ、お前はあれと拳固で打合つてたぢやないか、體操とでも、ありやあ言ふのかい？——しかし、何だといつてわたしはこんなにお喋舌りをしたんだらう、たゞパンションさんの（彼女は決して彼を、ちやんと、パンションと呼ぶことをしなかつた）議論のお邪魔をしたばかりだ。だけれど、それよりお茶を飲みませう、テラスへ行つて、お茶を飲まうよ、宅のヂヤムはお前さんのロンドンやパリーのと違ひます。行かう、行かう、がお前は、フェーデュシャ、わたしに手をかしておくれ。お！ まア何てお前の手は肥つてゐるだらう！ きつとお前となら轉ばないよ。」

皆は立ち上つた、そしてテラスの方へ歩いて行つた、祕やかに立ち去つたゲデオノフスキイを除いて。家の女主人やパンションやマルファ・チモフェーエヴナとラヴレツキイとの會話の間、彼は部屋の隅つこに、注意深く眼をしばたきながら、子供のやうな好奇心をもつて、唇を突出して、坐つてゐた、今彼はこの新しい客についての報知を町全體に觸れ廻らうと急いだ。

その日の、午後十一時に、カリーチン家では丁度かういふ風なことが起つてゐた。階下の、客間の闕の上で、ちよつとしたい機会を捉へて、ヴラジミル・ニコライチはリーザに別れを告げた、そして彼女の手を握りながら、言つた、貴女は誰がわたしをここへ引きつけてゐるか御存知です、貴女は

何のためにわたしがしよつちゆうお宅へ伺ふか御存知です、それほど何も彼もはつきりしてゐるのに、何をこの場各言ふ必要がありません。リーザは何とも答へなかつた、そして微笑せずに、僅かに肩を上げて、そして顔を赧らめながら、床を見詰めてゐた、しかし執られた手を引つこめようとはしなかつた。が階上では、マルファ・チモフェーエヴナの部屋で、薄暗い古びた聖像の前に懸かつてゐる燈明の光りをうけて、ラヴレツキイが膝の上に肘を突いて、そして顔を両手で支へて、肱椅子に坐つてゐた、老婆は、彼の前に立つて、時折り黙つて彼の髪の毛を撫でてゐた。家の女主人に別れを告げてから、彼は一時間の餘も彼女のところに坐つてゐたのだつた、彼は自分の昔馴染の女友達に殆ど何も話さなかつた、そして彼女も彼に訊かなかつた……。さうだ、何を話すことがあるだらう、何を訊くことがあるだらう？ 彼女は何も彼もよく知つてゐた、彼女は深く彼の心に充ち溢れてゐるすべてのことに同情してゐた。

## 八

フョードル・イワーノウィチ・ラヴレツキイは（私はちよつと私の物語りの糸を切ることを讀者に許して貰はねばならない）古い貴族の家柄の出であつた。ラヴレツキイ家の祖先はワシーリイ暗帝時



代にプロシヤから出て、上ベデエッキイに五十町歩の土地を給はつたのであつた。その子孫の多くのものが種々の勤務に服し、諸侯や邊境の守備に任じてゐる有名な將軍に仕へたりしてゐたが、併し彼等の中の一人として侍従以上に出たものは無く、さればといつて非常な財産を作り上げたものも無かつた。ラヴレツキイ家の中で最も富裕でもあり有名でもあつたのは、フョードル・イワーヌイチの曾祖父の、アンドレイといふ慘酷な、随分思ひ切つた性格の、伶俐なそして狡猾な人であつた。今日まで彼の我むしやりに就いての、狂暴な性格に就いての、無思慮な寛大さと飽くことを知らない貪慾に就いての噂が消えずにゐる。彼は非常に肥満して、そして背が高かつた、顔は淺黒く髭が無くつて、甘つたるい物言ひで、眠さうであつた、が彼が靜かに話せば話すほど、彼の周圍のものは一層ヒリヒリするのだつた。彼は妻をも自分に似寄りのを娶つた。眼のギョロツとした、鉤鼻の、圓い黄色い顔の、ジプシーの出で、癩癩持ちで執念深く、どの點から見ても夫に引けをとらなかつた、夫は夫で殆ど彼女を殺さない許りだつた、そしてしよつちゆう彼といがみ合つてゐたものの、彼女は夫よりも早く死んで終つた。アンドレイの息子の、フョードルの祖父に當るピョートルは、自分の父親に似なかつた、これは平凡な、田舎紳士で、可成り淺墓で、饒舌家で、鈍間で、亂暴ではあつたが、しかし悪い人ではなく、お客好きでまた犬好きであつた。彼が父親から立派な二千人の農奴を譲り受けたのは、三十を越してであつたが、ところが彼は直きに彼等を散らして終つた、すこしづつ自分の領地を賣り拂つ

た、奴僕を甘やかした、まるで油虫のやうに四方八方から馴染や馴染でない如何がはしい人達が彼の廣大な、温かいそして清潔でない大邸宅へ這ひ寄つて來た、すべてそれが手當り次第に、だが鱗腹、詰め込んで、酔拂ふまで飲んで、そしてその上、親切な主人を讃めそやしたり持上げたりしながら、持てるだけのものを持つて行つて了ふのだつた、そして主人も、機嫌の悪い時には、同じやうに自分の客達を——懶け者だの下司野郎だのと呼んだが、ゐなくなると寂しがつた。ピョートル・アンドレイチの妻は温順な性質の女であつた、彼は彼女を隣家から、父親の選擇と命令によつて迎へた。彼女はアンナ・バザロワナといつた。彼女は何事にも干渉しなかつた、悦ばしげにお客を迎へ、自分でも喜んで、髮に粉をふりかけるのは、彼女の言葉によると、死ぬほど嫌だつたけれど、お客に行つた。ネルの總巻きを載つけてね、と彼女はよく年をとつてから話した、髮の毛をすつかり上の方へ撫でつけて、油で塗り固めて、粉をふつて、鐵のピンを挿すのだよ、——後で落ちなくつてさ、だけれど假髮でなくちやお客に行けないのだよ——侮辱されたやうに思ふのだね、——いやになつちまふ！——彼女は競馬馬を駈けさせることが好きだつた、カルタ遊びなら朝から晩まででもよかつた、そしていつても、彼女の夫がカルタ臺に近づくと、彼女の分に書付けられた少し許りの儲けを片方の手で隠したものだつた、それでゐて自分の持物やお金はすつかり彼の無責任な管理にまかせ切つてゐた。彼等は二人の子供をまうけた、フョードルの父親である、息子のイワソとそれから息女のグラフィーラ。



イワンは家庭でなく、金持の、年を老つた伯母の、クベンスカヤ公爵夫人の手許で育てられた、彼女は彼を自分の相續人に選定してゐた（さうでなかつたら父親は彼を手放す事をしなかつたらう）、まるで人形のやうに彼を着飾らせて、凡ゆる種類の教師を彼のために雇つたり、フランス人の、以前僧院長であつた、ジャン・ジャック・ルッソーの弟子を家庭教師に當てがたりした、それは Courin de Vaucelles とかいふ、要領のいい、小心な陰謀家で、——彼女の口を藉りていふと、外國から来た Fine fleur（註—美しい花）で、——そして殆ど七十に手のとゞきさうな年をして彼女はこの「美しい花」と結婚したのであるが、自分の財産を全部彼の名義に書換へて、そしてそれから間もなく白粉を塗つて、à la Richelieu 香水をプンプンさせて、黒ん坊の少年達や、足の細い犬や、口やかましい鸚鵡などに取り囲まれて、ルイ十五世時代の絹張りの曲り脚の長椅子の上で、ベチト作のエナメル煙草箱を両手に抱へて、死んで行つたのだつた、——夫に棄てられて、死んで行つたのだつた、といふのは取入ることに巧いクールタン氏が彼女の金をさらつて巴里へ行つてしまつたからで、この思ひがけない打撃が（私は彼女の死のことを言つてゐるのではなく、彼女の結婚のことを言ふのである）イワンの上に落ちて來たとき、彼はやつと二十歳を過ぎたばかりであつた、彼は富裕な相續人から急に寄食者に變つてしまつた伯母の家に留まることを欲しなかつた、彼が育つて來たベテルブルグの社交界が彼の前に鎖された、下級官吏からのくるしいそして光りのない勤務には嫌悪を感じた（す

べてこれはアレクサンドル皇帝の治世のほんの初めの頃であつた）、彼は嫌でも村へ、父親のところへ歸らなければならなかつた。汚らしく見すばらしく、醜く彼の生れた巢は見えた、田舎の生活の寂しさ、うす暗さが事々に彼を苦しめた、憂鬱が彼を嚙んだ、その代り彼をも家のもの全部が、母親を除いて、不機嫌に眺めた。父親には彼の都會風の習慣が、彼の燕尾服が、大きな襟飾りが、書物が、笛が、彼の小ザツパリした風采が、そこに嫌悪を見出したのは偶然でないが、氣に入らなかつた、彼はしよつちゆう、息子の不平を言つては、口小言を言つた。——「こゝでは何も彼もあれの氣に入らぬのだ」と彼は言ひ言ひした、「食卓についても好き嫌ひを言つて、喰べもしない、召使の部屋の臭ひと息苦しきが辛棒出來ない、酔拂ひはあれを胸悪くさせる、あれの前ぢや喧嘩も出來ぬ、勤めることは嫌、弱いのだらうよ、多分、健康がね、フウ、何といふやさしいことだ！ それもみなボルテールが頭にあるからです。」老人は特にボルテールとそれから「狂信者」のデイドローを容赦しなかつた、彼等の文章は一行も讀んだわけではないのだが、といふわけは書物を讀むなんといふ柄ではなかつたので。ピョートル・アンドレイチは誤らなかつた、確に、デイドローも、ボルテールも彼の息子の頭の中に坐つてゐた、その上彼等だけでなく——ルッソーも、エルヴェシエースも、それから多くの、さういつたやうな著述家達が彼の頭の中に坐つてゐたのだ、——しかしただ頭の中だけであつた。イワン・ペトロロウイチの師匠の、退職僧院長のアンシクロペヂストは、十八世紀の凡ゆる知識を悉



く自分の被教育者の頭に注ぎ込むことだけに満足してゐた、それで彼はさういふもので一杯になつて歩いてゐた、それは彼の裡に、彼の血と混り合ふことなく、彼の心にまで徹することなく、固い信念となることなくして、残つてゐた……。それに五十年前の青年から、私達が今でもまだそれに達し得ないでゐるのに、信念などといふものを要求することが出来るだらうか？ 父親の家の訪問者達をもイワン・ペトロロウィチは同様に壓迫した、彼は彼等を輕蔑した、彼等は彼を怖れた、その上十二も年上の姉のグラフィラとも、彼はてんで反が合はなかつた……。このグラフィラは不思議な存在だつた、不潔で、佻儻で、瘦せすぎで、廣く見開かれた眼とキツカリ結ばれた薄い唇とを持つた彼女は、顔だちでも、聲でも、ぎごちないせかせかした動作でもジプシー女のおばあさんの、アンドレイの妻そつくりだつた。強情で、權柄で、彼女は結婚の話になぞ耳も藉さなかつた。イワン・ペトロロウィチの歸宅は彼女にいい感じがしなかつた、クベンスカヤ公爵夫人が彼を手許に置いてゐた間、彼女は少くとも父親の領地の半分は貰へるものと思つてゐた、彼女は吝嗇の點でも、お祖母さんそつくりだつた。それ以上に、グラフィラは弟を嫉んでゐた、彼は非常に教育があつた。彼は非常に流暢に、巴里風の發音で、フランス語を話した。が彼女はやつと「ボンジュール」と「コムマン・ヴ・ポルテ・ヴ？」と言へるだけだつた。成る程、彼女の両親はまるでフランス語を知らなかつた、——しかしそんなことは彼女には何もならなかつた、イワン・ペトロロウィチは憂鬱と退屈にどうしていいか解らなかつ

た、かれこれ一年ばかり彼は村で暮した、しかしそれは十年以上にも思はれた。ただ自分の母親とだけ彼は心を慰めることが出来た、で幾時間も幾時間も彼女の天井の低い部屋で、善良な婦人の巧まぬお喋りを聞きながら、ヂャムを喰べながら、坐つてゐた。會々、アンナ・パヴロヴナの小間使の中に一人非常に可愛らしい、明るい、やさしい眼と纖細な顔の輪郭とを持つた、マラーニヤといふ名前の、伶俐な、溫和しい娘がゐた。彼女は初手からイワン・ペトロロウィチの氣に入つた、そして彼は彼女を愛した、彼は彼女の怯々したやうな歩きつきを、含羞んだやうな應對を、靜かな聲を、靜かな微笑を愛した、日毎に彼女は彼に可愛く思はれた。彼女も亦イワン・ペトロロウィチに、ロシヤの娘だけがなし得るやうな、魂の一切の力を捧げて、慕ひ寄つた、——そして身をまかせた。農村の地主の屋敷では如何なる祕密も長く保たれることはない、直きに皆は若主人とマラーニヤとの關係を知つた、この關係の噂は遂にピョートル・アンドレイチ自身に耳にまで達した。他の場合であつたら、彼は、恐らく、何の注意もこのやうなくだらぬ事に向けることをしなかつたであらう、ところが彼は久しい前から息子に腹を立ててゐた、でペテルブルグの賢人でそして洒落者を耻かしめる機會の來たのを喜んだ。騒動、叫喚、喧騒が持ち上つた、マラーニヤは穴藏へ押込められた、イワン・ペトロロウィチは父親の前に呼び出された。アンナ・パヴロヴナも騒ぎを聞いて駈つけた。彼女は夫を宥めようとかかつた、併しピョートル・アンドレイチはもう何も聞かなかつた。鳶のやうに彼は息子に襲ひかかつた、



彼は息子の不道徳、無信仰、偽善を責めつけた、序にクペンスカヤ公爵夫人に對する一切の焼けるやうな憤懣の情を彼の上に爆發させて、侮辱的な言葉を彼の上にぶち撒けた。初めのうちイワン・ペトロウイチは黙つて堪へてゐた、しかし父親が恥づべき刑罰で彼を嚇さうと思ひ付いた時、彼は我慢がしきれなくなつた。「狂信者デイドローがまた登場だ、」と彼は思つた、「よしそれなら本當に行動させてやるから、待つてゐるがいい、お前達みんなを吃驚させてくれるから。」そして直に、全身に内的な戦慄を感じながらも、しかし落着いたならかな聲で、イワン・ペトロウイチは父親に向つてかう宣言した、父は徒らに彼の不道徳を責めてゐるのである、彼は自分の罪を辯護しようとは思はない、それを償はうとしてゐる、そしてそれ以上に喜んで、自分を一切の偏見から超越してゐる者を感じてゐる——即ち——マラーニヤと結婚しようと思つてゐるのである。これ等の言葉を言ひ切つて、イワン・ペトロウイチは、疑ひもなく、自分の目的を達した、即ち彼はピョートル・アンドレイチを、眼を剝出して一瞬茫然とした程、驚かしたのである、が彼は直ぐと我れに返つた、そして丁度栗鼠の毛皮の上衣を着て、素足に靴を穿いてゐたが、いきなり拳を固めてイワン・ペトロウイチに飛びかゝつた。こちらは、まるで故意のやうに、その日 *à la Titus* 風に髪を梳つて、眞新しい英國風の青い色の燕尾服を着、總のついた長靴を穿き、洒落た鞞皮のズボンをキチンと穿いてゐた。アンナ・パヴロヴナが危機一髪のところまで叫んで、両手で顔を覆うた、が彼女の息子は家中を

駈抜けて、外庭へ飛び出した、そして菜園に飛び込み、庭に走り、庭から往來へ走り出た、そして逸散に、やがて自分の背後に重々しい父親の蹻音と荒々しい斷れ斷れの叫び聲とが聞こえなくなる迄、走り通した……。『待て騙り奴！』と彼は怒鳴つた、『待て、呪つてくれる！』——イワン・ペトロウイチは隣の一代貴族の家に隠れた、がピョートル・アンドレイチはすっかり疲れ切つて、汗だくなつて家に歸つた、辛うじて息をつきながら、息子から父親の祝福と遺産とを取上げると宣言した、彼の馬鹿げた書物は全部焚き棄てるやうに、そしてマラーニヤは早速遠くの村へ送るやうに命じた。善良な人達が居合せて、イワン・ペトロウイチを探し出して、何も彼も知らせてやつた。憤怒に驅られ、狂氣のやうになつた彼は父親に復讐すると誓つた、そしてその晩、マラーニヤを乗せた百姓の荷車を待伏せて、腕づくで彼女を奪つて、彼女と共に一番近くの町へ走つた、そしてそこで彼女と結婚した。金は隣人の、しよつちゆう酔拂つてゐる、善良な退職海軍士官が恵んで呉れた、この者は凡ゆる種類の、彼の言葉を藉りて言ふと、高尚な物語が恐ろしく好きだつた。翌日イワン・ペトロウイチは毒々しく冷淡なそして叮嚀な手紙をピョートル・アンドレイチ宛に書いた、それから彼の從兄弟のドミトリイ・ベストフが妹の、すでに諸君の馴染であるマルファ・チモフェーエヴナと一緒に暮してゐる村へ、出掛けて行つた。彼は一切を彼等に打明けた、ペテルブルグへ口を探しに行くつもりだと言つた、そして暫くの間でも妻を預かつてくれるやうに頼んだ。妻といふ言葉を口にした時、



——彼は激しく啜り上げた、そして彼の都會的な教養と哲學に拘らず、ひどく卑下して、可哀想に自分の親戚の足下にひれ伏して、そして床に額を摺りつけさへした。ベストフ兄妹は、同情心に富んだ善良な人々であつたから、喜んで彼の申出を引受けた、彼は彼等の所に、祕そかに父親からの返事を心待ち乍ら、三週間許り滞在した、併し返事は來なかつた、——來る筈もなかつた。ピョートル・アンドレイチは息子の結婚したのを知ると、病床に臥して、自分の前でイワン・ペトロウイチの名を口にすることを禁じて了つた、ただ母親が、夫に内緒で、本山の司祭から借りて五百ルーブルの紙幣を聖像と一緒に彼の妻の所へ送つて來た、母親は手紙を書くのを恐れて、瘦せぎすの、一晝夜に六十露里宛も歩く使ひの百姓男の口からイワン・ペトロウイチに、餘り心配をしないやうに、何も彼もよくなつて父親が憎しみを恵みに換へるやうになるかも知れないこと、それから彼女にも他の嫁の方が好ましくはあるが、神様にはこれがお氣に召したのであらうといふこと、で彼女はマラーニヤ・セルゲーエヴナに自分の親としての祝福を送るといふことを告げさせた。瘦せぎすの百姓男は一ルーブル貰つた、若奥様に、その若奥様の彼は教父だつたが、一と目お目にかゝる許しを乞うた、彼女の手を接吻して、そして走り歸つた。

イワン・ペトロウイチは安心してペテルブルグへ旅立つた。測り知れぬ未來が彼を待つてゐた、豫想される貧苦が彼を脅かした、併し彼は憎むべき農村の生活に別れを告げた、そして大事なことに

は——自分の師匠たちを裏切らなかつた、ルツソー、デイドローを、實際に「行動させ、」*la Declaracion des droits de l'homme* (註—民権論)を事實の上に立證した。果たされた義務、勝利の感情、矜持の感情が彼の心を一杯にした、それに妻との別離もさまでは彼を驚かさなかつた、しよつちゆう妻と一緒に暮さねばならない必要の方が寧ろ彼を當惑させたであらう。一事はなされた、他の事に取りかからねばならなかつた。ペテルブルグでは、彼の豫期に反して幸福が彼を訪れた、クベンスカヤ公爵夫人が——ムッシュュー・クルタンに棄てられはしたが、彼女はまだ死なずにゐた——何かで甥に對する自分の罪を償ひたいと思つて、彼を自分の知人達全部に紹介をし、そして彼に五千ルーブルと——それは殆ど彼女の最後の金であつた——それからキューピットの花綵の中に彼の頭字を彫つたレピコ型の時計を贈つてくれた。それから三月と経たないうちに、彼はもうロンドン駐割のロシア公使館に或る地位を得て、英國船で(當時はまだ蒸氣船といふものが無かつた)海へ乗り出した。數ヶ月たつて、彼はベストフから手紙を受取つた。善良な地主は、一八〇七年八月二十日にボクローフスコエ村で呱呱の聲をあげ、聖受難者フォードル・ストラチライトの記念にフォードルと名付けられた息子の誕生をイワン・ペトロウイチに祝つてよこした。大變衰弱してゐるとかでマラーニヤ・セルゲーエヴナはほんの五六行しか書き添へてゐなかつた、しかしこれらのほんの五六行がひどくイワン・ペトロウイチを驚かした、彼はマルファ・チモフェーエヴナが彼の妻に読み書きを教へてくれたのを



知らなかつた。とは言へ、イワン・ペトロウイチは長く親としての感情のこゝろよい胸騒ぎに身をまかせてはゐなかつた。彼は當時の有名なフリーンとかライスとか(當時はまだ古典的な名が盛んに用ゐられてゐた)の中の誰か一人の尻を追ひ廻してゐた、チルジツトの媾和條約が締結された許りで、すべてが享樂に急ぎ、すべてが一種の狂ほしい旋風の中に渦巻いてゐた、濃艶な美人の黒い眼が彼の頭をグラグラさせた。彼は非常に少ししか金を持たなかつた、併し彼は幸福にカルタを弄び、交際を求め、凡ゆる遊興に顔を出した、一と口に言つて、満帆に風を孕んで駛つてゐたのだつた。

## 九

ラヴレツキイ老人は長いこと息子の結婚を許すことが出来なかつた、若し、半年ほどして、イワン・ペトロウイチが罪の頭を垂れて彼のところに現れ、彼の足下に身を投げ出したならば、彼は、思ふに、先づこつぴどく叱りつけて置いて、そして嚇しに杖で打つてから、彼を許したことであらう、併しイワン・ペトロウイチは外國に住んでゐた、そして、明かに、洩もはじかなかつた。——「お黙り! 言つちやいかん!」とビョートル・アンドレイチは妻が彼の心を和げようとし始めるや否や言ふのだつた、「彼奴は、あの犬奴は、わしがあれを呪つてやららないことを、恩に着て永久に神様に

わしのことを祈るがいいのだ、死んだ親父だつたら自分の手で彼奴を、あの碌でなしを絞め殺しただらう、それでいいのだ。」アンナ・パヴロヅナはかうした恐ろしい言葉を聞くと唯もうそつと十字を切る許りだつた。イワン、ペトロウイチの妻に就ては、ビョートル・アンドレイチは初のうち何も聞くことも欲しなかつた、そして嫁のことを何かと書いて來たベストフの手紙に對する答へとして、彼はどんな自分のとかいふ嫁も知らないといふこと、逃亡農奴をかまづて置くことは法律によつて禁ぜられてゐる、彼はそのことを前以て警告するのを義務と考へるといふことを言つてやるやうに命じさへした、だがその後、孫が生れたのを知ると、心が和いで、序でに産婦の健康を尋ねてやるやうに命じて、その上彼女に、矢張り自分からではないやうにして、少しばかりの金を送つてやつた。アンナ・パヴロヅナが死病に罹つたのは、フェーヂャが生れてまだ一年と経たないうちだつた。息を引取る幾日か前に、もう床に就いた切りで、氣の弱い涙を光の失せた眼に泛べて、彼女は夫に懺悔憎の前で、嫁に會つて別れを告げ、孫を祝福したいと言つた。悲歡に暮れた老人は彼女を落着かせ、そして直ぐと嫁のために、初めて彼女をマラーニヤ・セルゲーエヅナと呼んで、自分自身の馬車を送つてやつた。彼女は孩子あかごとそれから、どんなことがあつても彼女を一人で行かせることを欲しなかつたところの、そして彼女を辱めることを許さなからうマルファ・チモフェーエヅナと一緒に到着した。恐怖のために生きた心地もなくマラーニヤ・セルゲーエヅナはビョートル・アンドレイチの書齋へ這



入つて行つた。乳母が彼女の後からフェーヂャを抱いていつた。ピョートル・アンドレイチは黙つて彼女の顔を見た、彼女は彼の手に近付いた、彼女の震える唇は辛うじて音のない接吻をその上に落した。

「いや、新米の夫人、」と彼は遂に言つた、「御機嫌よう、奥さんどこへ行きませう。」

彼は立ち上つて、そしてフェーヂャの方へ身をかがめた、赤ん坊はニコツと笑つて、そして彼の方へ自分の白い小さな手を伸ばした。老人は急に變つた。

「おゝ」と彼は言つた、「可愛想に！ 親父のためにお願ひするんかい、わしはお前を見棄てはせんよ、雛つ子さん。」

マラーニヤ・セルゲーエヴナは、アンナ・パヴロヴナの寢室に這入るや否や、扉のそばに跪いた。アンナ・パヴロヴナは彼女を寢臺の方へ引寄せた、彼女を抱いて、彼女の息子を祝福した、それからひどい病氣のためにやつれた顔を自分の夫の方に向けて、何か言はうとした……。

「解つてゐるよ、解つてゐるよ、お前がどうして貰ひたがつてゐるか、」とピョートル・アンドレイチは言つた、「泣きなざるな、この子は宅へ入れるよ、ワーニカもこれのために許してやる。」

54  
アンナ・パヴロヴナはやつとの思ひで夫の手を取つて、そしてそれに唇を押當てた。その晩彼女は息をひきとつた。

55  
ピョートル・アンドレイチは自分の約束を守つた。彼は息子に、母親の臨終のために、孫のフォードルのために、自分の祝福をふたたび與へるといふこと、そしてマラーニヤ・セルゲーエヴナを家に置くことにするといふことを報せてやつた。彼女には中二階に二た部屋あてがつて、彼は彼女を自分の最も大切なお客である片目の旅團長のスクレヒンとその妻に紹介した、二人の小女と走り使のユサツク服の少年を附けた。マルファ・チモフェーエヴナは彼女に別れを告げた、彼女はグラフィラを憎んでゐた、そして一日の中に三度も彼女と喧嘩をした。

最初のうち哀れな婦人は氣づまりで具合が悪かつた、しかしその後苦勞をしつくして、自分の舅にも慣れた。彼も矢張り彼女に慣れた、殆ど彼女とは口を利かなかつたとは言へ、彼女に對する彼の愛撫そのものには一種の無意識な投げやりが認められたとは言へ、彼は彼女を愛しさへもした。何よりもマラーニヤ・セルゲーエヴナは自分の小姑に苦勞した。グラフィラはまだ母親の生きてゐる時分から少しづつ一家を手に納めつゝあつた、皆、父親を初め、彼女に服従してゐた、彼女の許しが無くしては砂糖の一とかけすら渡されなかつた、彼女は他の主婦と權力を分けるよりも、寧ろ死ぬことに同意したであらう、——その上その主婦がまたどんな主婦だつたらう！ 弟の結婚は彼女を、ピョートル・アンドレイチ以上に怒らせた、彼女は成上り者を仕込みにかゝつた、そしてマラーニヤ・セルゲーエヴナは第一時間目から彼女の女奴隷になつて終つた。それに我儘で傲慢なグラフィラに口



答へも出来ないやうな、しよつちゆうわくわくして怯々してゐるやうな、からだの弱い彼女がどうして諍ふことが出来たであらう？ グラフィラが彼女の以前の身分を思ひ出させ、彼女がそれを忘れてゐないと言つて讃めないやうな日は一日も無かつた。マラーニヤ・セルゲーエヴナは喜んでこれらの厭味や稱讃を耐へ忍んだであらう、假令それがどんなに辛からうとも……ところがフェーヂヤを彼女は取上げられた、それが彼女を打碎いた。彼女が彼の養育に従ふ資格がないといふ口實で、彼女は殆ど彼のところへ近付けられなかつた、グラフィラがそれにかかり切つた、子供はまるで彼女の思ふままにされた。マラーニヤ・セルゲーエヴナは悲しさのあまりイロン・ペトローウィチに手紙を送つて、早く歸つて来て呉れるやうに願つた、ピョートル・アンドレイチ自身も息子の顔を見たがつた、併し彼は唯いつも返事を寄越すだけで、父親に妻の世話を感謝し、送つて呉れた金のお禮を述べ、間もなく歸ることを誓つたが、——歸つて來なかつた。十二年に彼は遂々外國から引上げなければならなかつた。六年も別れてゐた後で初めて會つて、父親は息子を抱擁した、そして以前の不和に就いては一言も語らなかつた、そんなことを言つてゐる時でなかつた、全ロシアが敵に向つて立つた、そして彼等は二人とも彼等の血管の中にロシアの血の流れてゐるのを感じた。ピョートル・アンドレイチはまる一聯隊を自費でもつて装備した。併し戦争は終つた、危機が去つた、イロン・ペトローウィチは再び退屈した、再び遠方へ、彼が育つたところへ家へ歸るやうな氣安さを感じてゐた。あの世界へ、彼の心は惹きつけられて行つた。マラーニヤ・セルゲーエヴナは彼を引止めることが出来なかつた、彼女は彼にあまりにも少く意味した。彼女の期待すらも裏切られた、彼女の夫も矢張り、グラフィラにフェーヂヤの養育をまかせるのが遙かに適當であるのを知つた。イロン・ペトローウィチの可哀想な妻はこの打撃に堪へられなかつた、二度目の別離に堪へ得なかつた、不平なく、數日間に彼女はまるで消えたやうになつて了つた。一生涯彼女は何事にも抗ひ得なかつた、そして彼女は障害と闘ふことをしなかつた。彼女は最早口を利くことが出来なかつた、早くも死の影が彼女の顔に現はれた、しかし彼女の容貌は、依然として、辛抱強い困惑の色と謙讓のいつものやさしさを現はしてゐた、その無言の従順さでもつて彼女はグラフィラを眺めたのであつた、そしてアンナ・パヴロヴナが死の床にピョートル・アンドレイチの手を接吻したと同じやうに、丁度そのやうに彼女もまたグラフィラの手に、彼女に、グラフィラに、自分の獨り息子をゆだねながら、身をすり寄せたのであつた。かうして自分の地上の生涯を靜かなそして善良な存在は終つた。何故に生みの大地から引き抜かれて、そして直ぐに、さながら白日の下に引き抜かれた若木のやうに、棄てられて了つたかは神さまが知つてをられる許りである、それは跡方もなく失せて了つたのだ、この存在は、そして何人もそれを悲しまなかつた。マラーニヤ・セルゲーエヴナのことを彼女の召使達が悲しんだ、それからまたピョートル・アンドレイチも。老人にとつては彼女の無言の存在がなくなつてしまつた。「許してくれ——さよなら、



わしの無口な娘よ！」と彼は最後に、教會の内で、彼女に向つてお辭儀をしながら、囁いた。彼は墓穴に一握りの土を投じながら泣いてゐた。

彼自身も間もなく、五年と経たないうちに彼女の後を追つた。一八一九年の冬に、彼は靜かに、グラフィラと孫を連れて移り住んだモスクワで、息を引取つた、そして自分をアンナ・パヴロヴナと、それから「マラーシャ」のそばに葬るやうに遺言した。イワン・ペトロウィチはその頃、自分の満足のために、巴里にゐた、彼は一八一五年後間もなく退職した。父親の死を知ると、彼はロシヤへ歸らうと決心した。領地の整理についても考へなければならなかつた、それにフェーヂャも、グラフィラの手紙によると、十二になつて、眞面目に教育にかゝらなければならぬ時になつてゐた。

10

イワン・ペトロウィチは英國崇拜者になつて歸つて來た。短く刈られた髪、糊の強いカラ、小さい襟の澤山ある裾の長い豌豆色のフロックコート、顔の澁い表情、何となく鋭い同時に冷やかな應對、齒にぶつつける發音、粗暴な出し抜けの哄笑、消え失せて了つたほゝ笑み、特に政治的な、經濟的な談話、血の滴るやうなロースト・ビーフとポルト・ワインに對する嗜好——彼の裡なるすべてが實に

大ブリテンの香にブンブンしてゐた、彼全體がその香に貫かれてゐるかのやうであつた。しかし——不思議なことには！英國崇拜者になつて歸つて來た後、イワン・ペトロウィチはそれと同時に愛國者になつた、少くとも彼は自分を愛國者と呼んでゐた、餘りよくロシヤを知らなかつたけれど、その上ロシヤの習慣を一つも守つてゐず、ロシヤ語で妙な言ひ廻しはするし、普通の對話に於ける彼の話振りは、精彩が無く不活潑で、絶えずフランス語法が挿入されてゐた、そして話が重要な點に觸れて來ると、イワン・ペトロウィチのところには直ぐと「熱心の新しい試みをなす」とか、「これは情勢の性質そのものに適應しません」とか、さう言つた種類の言ひ廻しが飛び出すのだつた。イワン・ペトロウィチは國家の組織及びその改革に關する若干の草案を携へて來た、彼は目撃したすべてに非常に不満足だつた、——就中システムの無いことが彼の憤懣を買つた。姉に會つて、彼は一と言目から彼女に、根本的な改革を施さうと思つてゐること、これからは何も彼もところにあつては新しいシステムに依つて運ばれて行くであらうといふことを説明した。グラフィラ・ペトロヴナはイワン・ペトロウィチに何も答へなかつた、齒を喰ひしばつて、そして「さうしたらわたしは一體どうなるのさ？」と思つただけだつた。——とは言へ、弟と甥と一緒に村へ來て見て、彼女は直ぐと安心した。家の内には、確に、或る種の改革がなされた、寄食者や厄介者達が早速お拂ひ箱になつた、その中には二人の老婆もゐた、一人は——盲目で、もう一人は痛風だつた、それからまだオチャコフ時代



の老ぼれの陸軍少佐もゐた、これは實際ひどい大食漢だといふ理由で、黒パンばかりと扁豆で養はれてゐた。同様に以前のお客達も上げないやうにといふ命令が出た、彼等のすべてに代つて遠い隣人の、或る灰白髪心髪の、非常に立派な教育を受けてしかも非常に愚な、瘰癧の男爵が現はれた。モスクワから新しい家具が届いた、啖壺やベルや手洗鉢が据ゑられた、朝飯は違つた風に出された、外國の酒がウオッカや果實酒を驅逐した、奴僕達のために新しい制服が縫はれた、家の紋章に *in rectorvitus* といふ文字が書き加へられた。が實際にはグラフィラの権力はすこしも減じなかつた、すべての支拂ひ、買入れが彼女次第だつた、外國から連れて來られたアルサス生れの従者が彼女と覇を争はうとした——そして主人が彼の肩を持つたにも拘らず、自分の地位を失つて了つた。家政や、領地の管理に就いて言へば(グラフィラ・ペトロローヅナはこの方面にも口を出した)イワン・ペトロローウイチによつて一度ならず言ひあらはされた意向に拘らず、この渾沌のうちに新生命を吹き込む事は——全く昔のまゝに残つて、唯小作料がどこか二三箇所であげられ、賦役勞働が一層辛くなり、それから百姓達が直接にイワン・ペトロローウイチに歎願することを禁じられただけだつた。イワン・ペトロローウイチのシステムは完全にフェーヂャにだけ適用された、彼の教育には實際「根本的な改革」が施された、父親は唯もうそれのみ掛り切つた。

イワン・ペトロローウイチが外國から歸るまで、フェーヂャは、前にも言つたやうに、全くグラフィラ・ペトロローヅナの手の中であつた。母親が亡つた時は、彼は八歳にもならなかつた、彼は毎日といふわけでなく母親に會つた、そして彼女を非常に愛してゐた、彼女の記憶、彼女の静かなそして蒼白い顔、彼女の憂鬱な眼差しと臆病氣な愛撫の記憶は永遠に彼の心に刻みつけられてゐた、しかし彼は彼女の家庭に於ける境遇を漠然としか知つてゐなかつた。彼は、彼と彼女との間に、彼女が破壊しようともしない、又しても出來ない障害のあることを感じてゐた。父親を彼は憚つた、それにイワン・ペトロローウイチ自身は決して彼を愛撫したりなぞしなかつた、お祖父さんは時々彼の頭を撫でて、手に接吻を許した、併し馬鹿と呼びもし、さう思つてもゐた。マラーニヤ・セルゲーエヅナの死後、伯母は完全に彼を自分の掌中に納めてしまつた。フェーヂャは彼女を恐れてゐた、彼女のキラキラ光る鋭い眼、甲高い聲を恐れてゐた、彼は彼女の前では口も利けなかつた、よくこんな事があつた、彼が椅子の上で一寸でも身を動かすや否や、もう彼女は嗚りつける、「どこへ行きますか? ちゃんと坐つていらつしやい。」日曜毎に、彌撒のあとで、彼は遊ぶことを許された、即ち、厚ぼつたい一冊の書物



が、マクシモキッチ・アムボヂクとかいふ人の書いた「象徴と寓意畫」といふ表題の、不思議な書物が、彼に與へられた。この書物には非常に不思議な繪が千位も、同じやうに奇妙な説明が五ヶ國語で附せられて入つてゐた。裸の肥つたキューピットがこれらの繪の中で大なる役割を演じてゐた。その中の「サフランと虹」と題するものには「その効果や大なり」といふ説明がしてあつた、もう一方の「堇の花を啣へて飛べる青鷺」を描いたのには「彼等はみな汝に知られたり」と表題がついてゐた。——「キューピットと己が仔熊を舐めつゝある熊」は「次第に」といふことであつた。フェーヂャはこれらの繪をつぎつぎに見ていつた、みんな彼には細かい點に至るまで馴染だつた、幾つかの、それもきまつていつも同じのが、彼を考へさせ、彼の想像を刺戟した、これより外の遊びを彼は知らなかつた。彼に語學と音楽を教へることになつた時、グラフィラ・ペトロウヰナは殆ど只みたいで兎のやうな眼をしたスウェデン生れの老嬢を雇つて來た、その者はどうにかかうにかフランス語とドイツ語を話し、どうにかかうにかピアノを弾き、それから尙その上に巧に胡瓜を鹽漬にした。この女教師と、伯母と、それから婆やと侍女のワシーリエヰナにとり巻かれてフェーヂャはまる四年を送つた。よくかういふことがあつた、部屋の一隅に自分の「寓意畫」を開いて彼が坐つてゐると——坐つてゐる……ぢつとかう坐つてゐる……天井の低い部屋のなかにはセラニウムが匂つてゐる、一本の脂蠟燭がボンヤリともつてゐる、蟋蟀が單調に、まるで退屈してゐるやうに、鳴いてゐる、小さな柱時計はせかせ

かと忙はしさうに時を刻んでゐる、鼠が時折壁紙の向ふでガサガサやつたり噛つたりしてゐる、が三人の女達は、まるで三人の女神のやうに、黙つてそして素早く編針を動かしてゐる、その手の蔭が或る時は走り、或る時は不思議に薄暗がりの中で震へる、そして不思議な、同じやうに薄暗い考へが子供の頭の中に群れて動く。誰もフェーヂャを面白い子供だといふ者はないであらう、彼は可成り蒼白かつた、しかし肥つて、ぎこちなくつて、無器用だつた、——グラフィラ・ペトロウヰナの言葉を藉りて言へば、掛値なしの百姓だつた、蒼白さは然し屢々戶外へ出したら直ぐ彼の顔から消えてしまふだらう。彼はよく、時々懶けはしたが、勉強した、彼は決して泣かなかつた、その代り時々手のつけられないやうな強情が彼に現はれた、さういふ時にはもう誰もどうすることも出来なかつた。フェーヂャは彼の周圍の誰をも愛さなかつた……。少年時代に愛を知らなかつた心は禍ひである！

丁度かういつたやうな彼をイロン・ペトロウヰチは見出したのである、そして時を移さず、自分のシステムを彼に當嵌めはじめた。——「わたしは是を何よりも先づ un homme (註—人間) にしたいと思ふのだ」と彼はグラフィラ・ペトロウヰナに言つた、「人間にだけでなく、スバルタ人にだ。」自分の意見を實現する第一着としてイロン・ペトロウヰチは息子をスコットランド風に装はせた。十二歳の少年は脛を剥き出しにして、折り疊み帽子に雄鶏の羽根をつけたものを被つて歩くことになつた、スウェデン女が體操を完全に研究したスイス人に換へられた、男子に不向きな課業として音楽



が永久に追放された、自然科学、國際法、數學、ジャン・ジャック・ルッソの忠告による木工、騎士的情操を養ふための紋章學、——これが未來の「人間」の學ばねばならない總てであつた、彼は朝の四時に起された、直ぐ冷水を浴びさせられて、高い柱の周圍を繩にとまつて走らされた、彼は一日に一回一と皿きりの食事をした、馬に乗り、弩を引き、凡ゆる機會に、父親の例に倣つて、意志を強固にする修練をした、そして毎晩特別の帳面にその日の報告と印象とを書いた、がイワン・ペトロウイチは、自分の方から、彼にフランス語で訓戒を書いて渡した、その中で彼は息子を *mon fils* (註—吾が兒よ)と呼び、そして *vous* (註—君)と書いてゐた。ロシア語でフェーヂャは父親に「汝」で話した、併し彼のゐる前では坐る事もしなかつた。「システム」は少年を面喰はした、彼の頭に混亂を起させ、それを壓迫した、併しその代り生活の新しい様式は彼の健康に好ましい効果を齎した、最初彼は熱を出した、併し直きに治つた、そして立派な若者になつた。父親は自慢した、そして彼を自分の奇妙な方言で「自然の息子、わたしの創造物」と呼んだ。フェーヂャが十六歳になつた時、イワン・ペトロウイチは彼の裡に女性に對する輕蔑を今のうちに植付けて置く事を義務と感じた、——そして若いスパルタ人は、靈に戰慄を感じ、唇に最初のムク毛を生やし、若さと力と血潮に充ちて、早くも無頓着に、冷淡に、粗暴に見えようと努めはじめた。

その間にも時は流れ流れて行つた。イワン・ペトロウイチは一年の大部分をラヴリキー(彼の主

なる世襲の領地はさう名付けられてゐた)で過ごした、が冬になると一人でモスクワへ出掛けて行つた、宿屋にとまつて、熱心にクラブを訪れた、演説をし、廣間でもつて自分の改革案を述べ立てた、そして何時よりも英國崇拜者然と構へ、不平家然と構へ、政治家然と構へてゐた。併し一八二五年が來た、それは多くの悲しみをもたらした。イワン・ペトロウイチの親しい知己朋友が苦しい試練を受けた。イワン・ペトロウイチは急いで村へ歸つて、そして自分の家に閉ぢ籠つた。尙一年經つた、とイワン・ペトロウイチは俄に病弱になり、弱々しくなり、消沈した、健康が彼を裏切つた。自由思想家が——教會に通ひ出した、そして祈禱を頼んだりするやうになつた、ヨーロッパ人が——蒸風呂で蒸され、二時に晝食をし、九時に床に就き、年をとつた執事のお喋りを聞きながら眠るやうになつた、政治家が——すべての自分の改革案を、すべての寫し物を焼いて了つて、縣知事の前で震え、署長の前でそはそはするやうになつた、鐵のやうな意志を持つた人が——腫物が出来たり、冷いスープの皿が出されたりすると、鼻を鳴らしたり、不平を言つたりした。グラフィラ・ペトロウナが再び一家を切り廻すやうになつた、再び裏口の階段から管理人や、村長や、平の百姓達が「悪たれ婆さん」——さう召使たちは彼女を呼んでゐた、のところへやつて來るやうになつた。イワン・ペトロウイチの變化は彼の息子を強く驚かした、彼はもう十九歳であつた、そして彼は考へ始め、彼を壓迫してゐる手から免れようとしてゐた。彼は以前にも父親の言行に、彼の廣い自由主義的な理論と固陋



な狭量な壓制主義との間に矛盾のあるのに氣付いてゐた、併し彼はこんな激しい變化があらうとは思ひがけなかつた。年を経たエゴイストが突然正體を現した。若いラヴレツキイはモスクワへ出て、大學へ入る準備をしようとしてゐた、——と思ひがけない、新しい不幸がイワン・ペトロウイチの頭上にふりかゝつた、彼は盲目になつた、全く、一日の中に盲目になつて了つた。

ロシアの醫師の技術を信用出来ないで、彼は外國へ赴く許可を得ようと奔走し始めた。拒絶された。そこで彼は息子を連れてまる三年の間もロシア全國を醫者から醫者へ、絶えず町から町へ移り行きながら、そして醫者達をも、息子をも、從者達をも自分の小心と氣短でもつて絶望させながら、渡り歩いた。全くの檻褸になつて、泣蟲の強情つ張りの子供になつて彼はラヴリキーへ歸つて來た。悲しい辛い日が續いた、皆が彼のために苦勞した。イワン・ペトロウイチは食事の間だけ溫和しかつた、これまで一度も彼はこんなガツガツしてそしてこんなに澤山喰べたことはなかつた、その他の時間は彼は自分にも、他人にも、休息を與へなかつた。彼は祈つた、運命を呪つた、自分を罵つた、政治を、自分のシステムを罵つた、自慢をしたり得意になつてゐたりしたことを全部、嘗て息子に模範として示したことを全部ののしつた、何物をも信じないと繰返し叫んだ、そして再び祈つた、一瞬間でも孤獨ではゐられなかつた、家の者達から、彼等がしよつちゆう、晝も夜も、彼の肱椅子のそばに坐つて、話をして彼を慰めるやうに要求した、その癖彼はいつもその話を遮つては、かう叫ぶので

あつた、「お前達は嘘ばかり言つてゐる、——何といふ嘘言だ！」

特にグラフィラ・ペトロウヅナは困らされた、彼は全く彼女なしには濟まなかつた——彼女は完全にどんな病人の氣まぐれでも協なへてやつた、尤も時には聲の響きに緊めつけるやうな憤怒を出さないやうに、直ぐとは返事をしかねてゐるやうなこともあつたが。かうして彼は尙二年間軋み通した、そして五月の初めに、露臺へ、日向へ出して貰つて、ポックリ死んだ。「グラシカ、グラシカ！肉汁だよ、肉汁だよ、老ぼれの馬……」と彼の硬張つた舌が纏れて言つた、そして、最後の言葉を言ひ終らないで、永遠に黙つて終つた。肉汁の匙を召使の手から取つた許りのグラフィラ・ペトロウヅナは、ハツとして、弟の顔を眺めた、靜かに、大きく十字を切つて、そして黙つて出て行つた、丁度そこに居合せた息子も何も言はなかつた、露臺の欄干に凭れて、一面に香ぐはしく綠色になつて、一面に金色の春の太陽の光線の中に輝いてゐる庭を、長いこと見下してゐた。彼は二十三歳であつた、どんなに恐ろしく、どんなに知らぬ間に早くこれらの二十三年は過ぎ去つたことだらう！……生活が彼の前に展けた。



父親を葬り、相變らずのグラフィラ・ペトロヴナに家政と管理人達の監督をまかせて、若いラヴレツキイは漠然とした暗い、しかしながら強い感情にひき摺られるやうにしてモスクワに出た。彼は自分の教育の不足を感じてゐた、そして出来れば失つたものを取戻さうと思つてゐた。最近五年間に彼は澤山讀んだ、また何かを見もした、多くの思想が彼の頭の中でゴタゴタしてゐた、或る教授は彼の知識を羨んだかも知れぬ、しかしそれと共に彼は、どんな中學生だつてよつぽど前に知つてゐるやうなことを澤山知らなかつた。ラヴレツキイは自分が何物かに捉はれてゐるのを知つてゐた、彼は密かに自分を變物だと感じてゐた。たちの悪い冗談を英國崇拜者は自分の息子にしたのだ、氣まぐれな教育がその悪い實を結んだ。長年の間彼は無自覺に自分の父親の言ひなり次第になつて來た、遂々彼がそれに氣附いた時には、もう仕事はなされて、習癖がすっかり根を下して終つてゐた。彼は人々と心安くすることが出来なかつた、生れて二十三年、抑へ難い湧しい愛慾を含蓄んだ心に抱いて、彼はまだ一人の女の眼をも覗き込むことが出来なかつた。彼の明哲なそして健全な、しかし乍ら幾らか重苦しい頭腦をもつてしては、強情と思辨と怠惰の性癖をもつてしては、早くから生活の渦卷の中に落ち込んで終ふべき筈なのに、それが人爲的な孤獨の中に閉ぢ込めて置かれて來たのである……そして今や魔術をかけられた圓は引裂かれた、が彼は依然として一つ所に、自分自身の裡に閉ぢ込め縮かまつて立ち續けてゐるのだ、彼の年齢になつて大學生の制服を着るのは滑稽だつた、しかし彼は嘲笑

を恐れなかつた、スパルタ式の教育は他人の言ふことなんか何とも思はぬくらゐの氣持ちを彼の裡に發達させるくらゐには役立つたのである、——で彼は、平氣で、大學の制服を着けた。彼は物理數學科へ入つた。健康な、血色のいい、もう鬚の生へた、無口な彼は自分の友達仲間不思議な印象を與へた、彼等はこの愛想つけの無い、二頭立ての大きな田舎くさい櫓に乗つて几帳面に講義を聴きながらやつて來る男のうちに、まるつきりの子供が隠れてゐるやうなぞとは思はなかつた。彼は彼等に一種不可解なベダンチストに見えた、彼等は彼を必要としなかつたし、彼を求めようとしなかつた、彼の方でもまた彼等を避けてゐた。大學で過ごされた最初の二年間に、彼はただラテン語を教へて貰つた一人の學生と親しくなつた許りだつた。この學生は、ミハレウィッチといつて、熱情家で、詩人で、眞實ラヴレツキイを愛してゐた、そして全く偶然に彼の運命に重大な變化を齎した當事者になつたのであつた。

或る日、劇場で（モチャイロフが當時評判の絶頂にあつた、そしてラヴレツキイは一つの上演も見逃さなかつた）彼は二階機敷に一人の少女を見かけた、——そして一人の女も嘗て彼の心を躍らせずに彼の沈鬱な姿の前を通り過ぎた事は無かつたとはいへ、これまで一度もこんなにも強く彼の心が動悸打つた事は無かつた。機敷の天鵝絨に肱を突いて、少女はちつと身動きもしなかつた、敏感な若い生命が彼女の淺黒い、圓味を帯びた、愛くるしい顔の各々の線に閃き輝いてゐた、輝しばかりの慧智



が細い眉の下から注意深くやさしく見やる眼の中に、表情に富んだ唇の素早い微笑の中に、彼女の頭、手、頸の輪郭そのもの、中に現はれてゐた、彼女は美しく着飾つてゐた。彼女のそばには皺の寄つた黄いろい顔の、四十五歳ばかりの婦人が、デコルテを着、黒い頭巾を被り、引き緊まつた心配げな空虚な顔に齒の無い薄笑ひを泛べながら坐つてゐた、が棧敷の奥の方には廣いフロックコートに高い襟飾りをした年配の男が見えてゐたが、小さい眼の中の強いて威厳を示さうとするやうな、同時に又何だか媚びるやうな胡散臭い表情と染められた口髭と頬髭、無意味な大きい額と皺の寄つた頬、何れの點から見てもそれは退職の將軍であつた。ラヴレッキイは彼の心を驚かした少女から眼を放さなかつた、突然棧敷の扉が開いて、ミハレウィッチが這入つて行つた。モスクワ中の殆ど唯一の彼の知己であるこの人物の出現は、——彼のすべての注意を奪つた唯一の少女の團欒への出現は、ラヴレッキイには意義深いことにも不思議なことにも思はれた。棧敷の方を見続けながら、彼は、そこに居合せたすべてのものが、まるで舊い友達かなんぞのやうに、ミハレウィッチに應對してゐるのを見た。舞臺の演技はラヴレッキイの興をひかなくなつた、モチャイロフ自身、その晩「調子」がよかつたにも拘らず、いつもの印象を彼に與へなかつた。或る非常にパセチックな所でラヴレッキイは思はず自分の美少女の方を見やつた、彼女はすつかり身體を前に乗り出してゐた、彼女の頬は燃え立つ許りだつた、と彼の執拗な眼差に押されて、舞臺の上に向けられてゐた彼女の眼が、靜かにふり向けられて、

彼の上にとまつた。……一と晩中この眼が彼の前にチラついた。遂に、巧に人工的に造りあげられた堤防が切れた、彼は震えもし、熱くもなつた、そしてその翌日彼は早速ミハレウィッチのところへ飛んで行つた。そして彼から、美少女がワルワローラ・パヴロヅナ・コロビイナといふのだといふことを知つた。彼女と一緒に棧敷に坐つてゐた老人と老婆は、彼女の両親で、そして彼ミハレウィッチ自身は一年前に某伯爵のところ自分で「家庭教師」をしてゐた時分に、知己になつたのだといふ。最大の稱讚をもつてこの熱情家はワルワローラ・パヴロヅナのことを噂した、「あれはね、君」と彼は持前の烈しい和音を聲に響かせながら叫んだ、「あの娘さんは——驚歎すべき天才で、眞の意味の藝術家なんだ、それは逆も善良なんだ。」ラヴレッキイの質問から、どんな印象をワルワローラ・パヴロヅナが彼に與へたかを見て取ると、彼は自分から、彼は彼等のところではまるで家にあるのと同然で、將軍は決して傲慢ではなく、母親は雑巾を吸はないばかりのお馬鹿さんだといふことを附け加へて、彼を彼女に紹介しようとして申出た。ラヴレッキイは赧くなつた、何か解らぬことを言つて、そして逃げ返つた。まる五日彼は自分の臆病と闘つた、六日目に若いスパルタ人は眞新しい制服を身につけ、よく知られてゐる所からちよつと髪を梳つただけのミハレウィッチの指圖にまかせて、——二人はコロビイナ家へと出掛けて行つた。



ワルワラ・パヴロヅナの父パーウエル・ペトロウイッチ・コロビンは退職陸軍少將で、生涯ペテルブルグで勤務に過ぎた、青年時代には巧な舞踏家としてまた戦列士官として鳴らしたもので、貧乏な爲めに二三の甚だ振はない將軍の副官をしてゐたが、その中の一人の娘と二萬五千ルーブルの持參金を獲て結婚した、詳細な點まで教練や閱兵の一切の知識に通じてゐた、苦勞に苦勞を重ねた、そして遂に、十二年ばかりして將官になり、一聯隊を授かつた。こゝで一息ついて、急がずに、後圖を策すべきだつた、彼もその積りだつた、ところが少し事を處するに慎重を缺いた、彼は官金を融通する新しい方法を工夫しようとした、——方法はよかつたのだが、折の悪い時に彼はケチをした、彼は密告された、不愉快以上の、醜惡な事件が起つた。どうにかかうにか將軍は事件の渦巻から脱れた、併し彼の經歷は滅茶苦茶になつた、彼は退職するやうに勸告された。二年ばかり尙彼はペテルブルグに、居心持のいい文官の口が轉がつて来るかも知れないことを期待して、ウロウロしてゐた、しかし口は轉がつて來なかつた、娘が専門學校を出た、失費は日増しに増大して行つた……彼は澁々生活費の安いのを當にしてモスクワに移らうと決心した。スターラヤ・カニエーシエンナヤ街に

小さな、低い、屋根に紋章のついた家を借りて、そして一年に二千七百五十ルーブルづつ費しながら、モスクワの退職陸軍將官として暮し始めた。モスクワは——愛想のいゝ都である、行きづりの者達を喜んで迎へる、況んや將軍をや、ドツシリとした、しかし軍人らしい舉措の抜け切らないパーウエル・ペトロウイッチの姿が間もなくモスクワの上流社會の客間に現れるやうになつた。染めた髪の毛のモジヤモジヤしてゐる、黒繻子のネクタイの上にアンナ勳章の脂じみたりボンの見えてゐる彼の露出しの後頭部が、舞踏の始まつてゐる時にカルタ臺の周圍をつまらなさに徘徊する退屈さうな蒼白い顔の青年達によく知られるやうになつた。パーウエル・ペトロウイッチは社交界に身を置くことが出來た、言葉すくなに話した、併し舊い習慣で、鼻へかけて、——勿論、自分よりも高い地位の人とではないが、注意深くカルタを取つた、家ではあまり澤山喰べなかつたが、お客に行くくと六人前も平げた。彼の妻については殆ど何も言ふことは無い、彼女はカリオツパ・カルロヅナといつた、彼女の左の眼からはいつも涙が流れてゐた、それでカリオツパ・カルロヅナは（その上彼女は獨逸生れであつた）自分を感情的な女だと思つてゐた、彼女はしよつちゆう何かしら怖れてゐた、まるで喰ひ足りないやうであつた、そして狭い天鵞絨の着物を着、頭巾を被り、貪しいガラン堂の腕輪を穿めてゐた。パーウエル・ペトロウイッチとカリオツパ・カルロヅナの獨り娘のワルワラ・パヴロヅナが、第一の美人ではないまでも、疑ひもなく第一の才媛で最も傑れた音樂家であると思はれ、優等のメダ



ルを貰つて××女子専門學校を卒業したのは、丁度彼女の十七歳の時であつた、ラヴレツキイが彼女を初めて見た時にも、彼女はまだ十九歳にはなつてゐなかつた。

一四

ミハレウィッチが彼をかなり拙い裝飾を施されたコロビイン家の客間に案内して、そして主人夫妻に紹介した時、スパルタ人の兩足は縮まるやうな氣がした。併し彼を捉へてゐた臆病の感情は直ぐに消失せた、將軍のロシア人に特有な人の好きが、幾らか不面目なことを仕出かした凡ての人々に附物である一種特別の愛想よさでもつて一層強くされてゐた、將軍夫人は何だか直きに影がうすくなつて了つた、ワルワラ・パヴロヅナについて言へば、どんな人でも彼女の前へ出ると直ぐと自分の家にあるやうな感じがしたほど、穩かでしんみりとして愛想よかつた、その上彼女の蠱惑的だからだ全體からは、微笑を湛へた眼、無邪氣に尖つた肩と蒼白い薔薇色の手、輕やかな同時に何だか疲れたやうな歩きづき、靜かな、甘い、聲そのものからは——細々とした微かな匂ひのやうに捉へ難い、忍びやかな美しさといつたやうな、やさしい、今のところまだ含羞んでゐる。魅惑とでもいつたやうな、何かかう言葉では盡し難い、感動させ充奮させる——それでゐて、勿論、臆病な氣持をみじんも起させ

ない或るものが感じられた。ラヴレツキイは話を劇場へ、昨日の芝居に向けた、彼女は直と自分からモチャーロフのことを言ひ出して、そして感歎と嘆息だけでなしに、彼の演技に對して女らしい的確な鋭い觀察をくだした。ミハレウィッチが音樂のことを言ひ出した、彼女は遠慮をせずに、ピアノの前に坐つた、そして當時はやり出した許りのシヨパンのマヅルカを二つ三つ美事に弾いてきかせた。晝食の時刻になつた、ラヴレツキイは辭去しようと思つた、併し引きとめられた、食卓につくと將軍は彼に、わざわざデプレーまで給仕人を取りにゆかせた上等の葡萄酒を振舞つた。夜晩くラヴレツキイは家に歸つた、そして長いこと、着物を脱がずに、片手で顔を覆うて、うつとりと魅惑の陶醉の中に坐つてゐた。彼は今初めて彼が何の爲めに生きる必要があるかを解つた様な氣がした、すべての彼の豫想、意向、すべてのこの愚にかぬものが一遍に消え失せて、彼の全精神は一つの感情に、一つの欲求に、幸福と領有と愛と甘い女性の愛の欲求に溶け込んだ。その日から彼は屢々コロビイン家に出入するやうになつた。半年後に、彼はワルワラ・ペトロヅナに自分の戀を打合けた、そして結婚の申込をした。彼の申込は承諾された、將軍はもうずつと前に、殆どラヴレツキイの最初の訪問を受けるか受けないに、ミハレウィッチに、ラヴレツキイがどのくらゐ農奴を持つてゐるかを訊いて置いた、ワルワラ・パヴロヅナにも、彼女は若い男の求婚の間中も、申込の瞬間でさへもいつもの心の平靜と明るさを保つてゐたが、そのワルワラ・パヴロヅナにも、彼女の求婚者が金持ちであるこ



とが解つてゐた、がカリオッパ・カルロヅナは *meine Tochter machteine schöne Partie* (註一  
娘はいゝ配偶を手に入れた) と思つた、——そして自分のために婦人帽を新調した。

一五

かうして彼の申込みは承諾された、しかしそれには條件がついてゐた。第一に、ラヴレツキイは早速大學を止めなければならぬ、誰が大學生と結婚なんかしよう、それに金持ちが、地主が、二十六にもなつて、小學生のやうに勉強するなんて——何といふ不思議な考へだらう？ 第二に、ワルワラ・パヴロヅナが嫁入道具を買つたり註文をしたり、花婿の贈り物さへも選擇することを引受ける。彼女には多くの實際的な才能、多くの趣味と非常に多くの安樂を愛する心、この安樂を自分のものにする多くの才能があつた。この才能は特に——結婚後直ぐ、彼が妻と二人で乗り心地のいい、彼女によつて求められた馬車に乗つて、ラヴリキーへ出發した時に——ラヴレツキイを驚かした。如何に彼を取巻く總てのものがワルワラ・パヴロヅナによつて考へられ、慮られ、注意されてゐたであらう！如何に美しい旅行用の道具が、如何に惚々するやうな化粧箱や珈琲入れが工合よくいろいろな隅々に置かれ、如何に手際よくワルワラ・パヴロヅナ自身が毎朝珈琲を入れて呉れたであらう！ とは言

へ、當時のラヴレツキイには觀察どころではなかつた、彼は幸福だつた、幸福に酔つてゐた、彼は子供のやうにそれに身をまかせ切つてゐた……彼は、この若いアルギビヤデスは、子供のやうに無邪氣でもあつた。彼の若い妻の全存在から異常な美しさが感じられたのも偶然でなかつた、彼の感情に測り知れぬ悅樂の祕密の饗宴を約束したのも偶然でなかつた、約束したといふよりも、むしろ控へてゐた。夏の盛りに、ラヴリキーへ來て見て、家が汚くつて暗いのを、召使が舊式で滑稽なのを見出した、併しそのことを夫に暗示することすら彼女は必要がないと思つた。若し彼女がラヴリキーに留まる意りだつたら、彼女は何も彼も、勿論、家屋敷から始めて、改めて了つたであらう、しかしこの曠原の端しくれに落着いてゐるやうなどといふ考へは一瞬間も彼女の頭には浮ばなかつた、彼女はその中に、天幕の中にもあるやうに、溫和しく、一切の不便を忍んで、そして面白さうにそれらのものを冷かしながら、暮してゐた。マルファ・チモフェーエヅナが自分の養ひ子に會ひに來た、彼女は非常にワルワラ・パヴロヅナの氣に入つた、併し彼女にはワルワラ・パヴロヅナが氣に入らなかつた。グラフィラ・ペトロローヅナとも新しい主婦は反りが合はなかつた、彼女は抛棄つて置いてもよかつた、併しコロビン老人が婿の仕事に手を出すことを欲した、こんなにも近い親戚の領地を管理するのは、と彼は言つた、將軍にとつても耻づかしいことではない。パーウエル・ペトロウイチは赤の他人の領地を管理することも辭さなかつたらうと思はなくちやならない。ワルワラ・パヴロヅナは非常



に巧妙に自分の攻撃の手を進めた、すこしも出しや張らずに、打ち見たところ蜜月の幸福に、農村の静かな生活に、音楽と讀書に、すっかり浸り切つてゐるやうに見せかけながら、彼女はすこしづつグラフィラを、遂にその者が或る朝、狂氣のやうになつて、ラヴレツキイの書齋に飛び込んで来て、鎗束をテーブルの上に投げ出して、これ以上家政を取ることとは出来ないし、村に留まつてゐたくもないと言ひ切るまでにしてつた。前以て丸めこまれてゐたラヴレツキイは即座に彼女の出發に同意を表明した。——そんなことにならうとはグラフィラ・ペトロヴィチは全く豫想しなかつた。「結構だよ、」と彼女は言つた、そして彼女の眼は曇つた、「わたしはここでは餘計者だつてことをちやんと知つてゐます！ 誰がわたしをここから、わたしの生れた巢から追出さうとしてゐるか知つてます。ただお前さんだけはわたしの言葉を憶えてお置がいいよ、お前さんはどこへ行つたつて巢なんか出来やしないし、一生ウロつき廻ることだらうよ。これがわたしの遺言さ。」その日の中に彼女は自分の持村へ立去つて終つた、が一週間たつとコロビン將軍が到着した、そして、氣持ちのいい哀愁を眼つきと舉動に見せながら、全部の領地の管理を自分の手の中に納めて終つた。

九月にワルワラ・パヴロヅナは夫をベテルブルグへ連れ出した。二た冬を彼女はベテルブルグ(夏には彼等はツァールスコエ・セロへ移つた)の美麗な、明るい、きらびやかに諸道具を飾り付けた住居で過ごした、彼等は中流及び上流の社會に知己を求めて、屢々お客に行つたりお客をしたりした、

素晴らしい音樂會や舞踏の夜會を開いた。ワルワラ・パヴロヅナはまるで火に慕ひ寄る蛾のやうにお客達を惹きつけた。フォードル・イワイヌイチには必ずしもかうした浮はつた生活が氣に入つてゐたわけではなかつた。妻は彼に勤務につくやうに勧めた、彼は、父親の古い記憶から、また自分自身身の考へから、勤めることを欲しなかつた、ただワルワラ・パヴロヅナの氣を兼ねてベテルブルグにだけは止まつてゐた。とは言へ、彼は直ぐに誰も彼に孤獨になることを邪魔しないといふこと、ベテルブルグで最も落着いた居心地のいい書齋が彼にあることが偶然でないといふこと、何くれと世話を焼いて呉れる妻が彼に一人で落着いてゐられるやうに助けようとさへしてゐるといふことを悟つた、——そしてその時からすべてがよくなつた。彼は再び自分自身の、彼の意見によるとまだ終つてゐない、教育にとりかかつた、再び讀み始めた、英語の研究にまでかかつた。しよつちゆう机の上にかがみ込んでゐる彼の強壯な、肩幅の廣い姿と、辭書やノートの上に半分覆はれた彼の肥つた、毛深い、血色のいい顔を見るのは不思議だつた。午前中彼は仕事をした、晝には食が進んだ(ワルワラ・パヴロヅナは天晴れの主婦だつた)、そして晩には悉く若い愉快な人々に充たされた、魅するやうな、香はしい、光りに充ちた世界に這入つて行つた、——そしてこの世界の中心は矢張りお世話好きの主婦の彼の妻であつた。彼女は彼のために男の子を産んだ、しかし哀れな子供は長く生きてゐなかつた、子供は春に死んで終つた、が夏には、醫師の忠告に従つて、ラヴレツキイは妻を、外國へ、温泉地へ



連れて行つた。氣を紛らすことが彼女にはあつた不幸の後に必要であつた、それに彼女の健康には  
 溫暖な氣候が必要だ。夏と秋を彼等は獨逸と瑞西で送つた、が冬には、型の如く、巴里に赴いた。巴  
 里ではワルワラ・パヴロヅナは薔薇の花のやうに華やいだ、そしてペテルブルグの時と同じやうに、  
 速かにそして巧に、自分の小さい巢を造ることが出来た。小綺麗な住居を彼女は巴里の静かなしかし  
 流行の街の一つに見付けた、夫には誰もまだ縫はせたことが無いやうな寢巻を縫つてやつた、お洒落  
 の小間使、素敵な料理女、輕快な給仕人を雇つた、素敵もない馬車、立派なピアノを手に入れた。一  
 週間もしないうちに、彼女は早くも生粹の巴里女と寸分違はず街を横切り、ショールを掛け、日傘を  
 開き、手袋を嵌めた。そして直きに彼女には知己が出来た。初めのうち彼女のところへはロシア人だ  
 けが訪れた、それから間もなく優美な作法と響きのいい姓を持つた、極めて愛想のいい、禮儀正しい、  
 獨身のフランス人たちがやつて来るやうになつた、彼等は皆早口に澤山喋つた、打ち解けてお辭儀を  
 した、氣持ちよく眼を細めた、誰のところでも薔薇色の唇の蔭に白い齒並が光つてゐた、——そして  
 どんなに彼等は微笑し得たであらう！ 銘々が自分の友達を連れて來た、そして *la belle madame*  
*de Lavretski* (註—美しきラヴレツキ夫人) は直きに *Chaussée d'Antin* か *Rue de Lille* まじ  
 知れ渡つた。當時(それは一八三六年のことであつたが)はまだ、掘り返された小さい丘の蟻のやう  
 に今日到る所にウヨウヨしてゐる小品欄記者とか雜報記者とかいふ種類のものが幅をきかせてゐな

つたが、しかし早くもその時ワルワラ・パヴロヅナの客間へは *M-r Jules* (註—ジュール氏) とか  
 いふ、人相のよくない、評判の悪い、すべての決闘者や擲られた人間のやうに不作法な賤しい男が姿  
 を現した。この *M-r Jules* をワルワラ・パヴロヅナは非常に嫌つた、併し彼女は彼を拒まなかつ  
 た、といふのは彼がいろいろな新聞に彼女のことを、或る時は彼女を *M-me de L……tzki* (註—L  
 夫人) 或る、時は *M-me de \* \* \**, *cette grande dame russe si distinguée, qui demeure rue de*  
*P……* (註—P街に住んでゐるしとやかな美しい露西亞婦人なる \* \* \* 夫人) と名付けながら、書  
 き立てて、全世界に、即ち、*M-me de L……tzki* には何のかかはりもない數百人の購讀者に、此の  
 貴婦人が、その頭腦に於て眞のフランス婦人 (*une vraie Française par l'esprit*) であるこの貴婦人  
 ——これ以上の讚辭をフランス人は持たないが如何にやさしくつて愛想がいいか、如何なる彼女は音  
 樂家であるか、そして如何に彼女は驚歎すべくワルツを踊るか (ワルワラ・パヴロヅナは、實際、  
 自分の軽いヒラヒラする着物の裾で總ての心を奪ひ去つた程、ワルツを巧に踊つた) といったやうな  
 ことを……一と口に言つて、彼女の噂を世界中に撒き散らしてゐたからで、——そしてそれは、何と言  
 はうとも——氣持ちのいいことではないか。マルス嬢はもうその頃は舞臺を退いてゐた、ガラシエル  
 嬢はまだ出てゐなかつた、それでもワルワラ・パヴロヅナは勤勉に劇場へ通つた。彼女はイタリー  
 音樂に有頂天になつた、オドリーの廢址を鼻で笑つた、コメディ・フランセー座で恰好よく欠伸をし、



ウルトラ浪漫派のメロドラマのドルワル夫人の演技に泣いた、そして大事なことは、リストが彼女の家で二度演奏した、そしてそれは非常に美しく、非常に純真で——素敵だった！ かうした愉快な思ひ出のうちに冬が過ぎた、その終り近くにはワルワラ・パヴロヅナは宮中へ召されさへした。フヨードル・イワーマイチの方でも退屈はしなかつた、生活が、時として、彼の肩に重苦しく感じられることもあつたが、——重苦しいのは、空虚だからである。彼は新聞を讀んだり、Sorbonne の Collège de France で講義を聴いたり、講堂の討論に耳を傾けたり、灌漑に關する或る有名な學者の著述の翻譯をしたりしてゐた。「俺は時間を空費してはゐない」と彼は思つた、「すべてこれは有益なことだ、併し冬までにはどうしてもロシヤへ歸つて、仕事にとり掛らなければならぬ。」この仕事が實際どういふものかをはつきり意識してゐたかどうかは疑はしい、また彼が冬までにロシヤへ歸れるかどうかは、神のみが知る、——今彼は妻を連れてバーデン・バーデンへ出掛けようとしてゐるのだ……思ひ掛けない事件が一切の彼の計畫を滅茶苦茶にした。

## 一六

或る日ワルワラ・パヴロヅナの留守に彼女の書齋に這入つて行くと、床の上に小さな、叮嚀に折

り疊んだ紙きれが落ちてゐるのがラヴレツキイの目にとまつた。彼は機械的にそれを取上げた、機械的に展げて、そしてフランス語で書かれた次のやうな文句を讀んだ。

「可愛いわたしのベツシイ！ (わたしはどうしても貴女を Barbe ともワルワラ——Varvara とも呼ぶ氣になれません)。わたしは徒らに並木道の隅のところ待つてゐました、明日の一時半に宅へいらしつてください。貴女の人のいい肥大漢さん (ton gros bonhomme de mari) はこの時刻にはいつも自分の本に身を埋めてゐるから、私達はまたあのわたしたちの詩人プーシキン (de Votre poe te Pouskine) の小唄を、貴女がわたしに教へて呉れた、「老たる良人よ、怖ろしの良人よ」を歌ひませう！ 貴女の小さいお手とお足とに千のキスを押します。わたしは貴女を待つてゐます。

エルネスト」

ラヴレツキイは何を讀んだのか直ぐには解らなかつた、もう一度讀み返した——と彼の頭はクラクラとなつた、床は動揺を受けた時の船の甲板のやうに、足の下に沈んで行つた。彼は同時に叫びもし、歎息もし、泣きもした。

彼は氣が遠くなつた。彼はそれほど盲目的に妻を信じてゐた、欺いたり裏切つたりすることが出来るなどとは夢にも思ひ及ばなかつた。このエルネストは、この彼の妻の情人は、灰白色の髪の毛、小鼻の高い、チョコビ髭の、彼女の知己のうちでも恐らくは最もくだらない、二十三歳許りになる紅顔の



美少年だった。數分経つた、半時間経つた、ラブレッキイは依然として致命的な手紙を手に握り緊め乍ら、ちつと無意味に床を見詰めて立つてゐた、朦朧とした渦巻の中に蒼白い顔がチラ付いた、耐へ難く心臓が喘いだ、彼には、彼が深く、深く、落込んで行き……どこまで行つても果てしがないやうに思はれた。聞き馴れた軽い衣摺れの音が彼を我れに返した、ワルワラ・パヴロヅナが、帽子を被り肩掛を掛けて、急いで散歩から歸つて來た。ラブレッキイはブルブルと全身を震はした、そしてパツと部屋を飛び出した、彼はこの瞬間に自分が彼女をズタズタに引裂き、彼女を半殺しになる迄打ちすゑ、百姓のやうに、彼女を自分の手で絞め殺し兼ねない状態にあるのを感じた。吃驚させられたワルワラ・パヴロヅナは彼を呼び止めようとした。彼はただベツシイと呟くことが出來ただけだった、——そして家を飛び出した。

ラブレッキイは馬車を雇つた、そして自分を郊外に連れて行くやうに命じた。その日の残りとその晩一と晩中を朝まで、彼は絶えず立ちどまつては手を打ちながら、ウロつき廻つた、彼は或る時は狂氣のやうになつた、或る時は何だか滑稽に、何だか愉快にさへなつた。朝彼はすっかり凍えて、郊外のやくざな宿屋に這入つた、部屋を借りて、そして窓際の椅子に坐つた。痙攣的な生欠伸が彼を苦しめた。彼は殆ど立つてゐられなかつた、彼の身體は疲れ切つてゐた、——が彼は疲労を感じさへしなかつた、——その代り疲労が一切を征服した、彼は坐つて、眺めて見た、そして何物も理解しなかつ

た、何が彼に起つたのか、何故彼は一人で、硬張つた手足をして、口の中には苦みを持ち、胸の上には石を持つて、ガランとした、見知らぬ部屋の中にあるのか解らなかつた、何が彼女を、ワリーヤをあのフランス人に身をまかせるやうにさせたのか、そしてどうして彼女が、自分が不貞な妻であること知りながら、依然として穩かに、依然として彼に對して愛想よく忠實であり得たのか解らなかつた！「まるで解らない！」と彼の燥いた唇が呟いた。「誰が俺に保證出來るだらう、ペテルブルグでは……」そして、彼は質問を終らずに、再び欠伸をした、震え乍ら、そして全身を縮かめながら。明るい追憶も暗い思ひ出も等しく彼を悩ました、彼はふと二三日前に彼女が彼とエルネストのゐる所でピアノの前に坐つて、「老いたる夫よ、怖ろしの夫よ」を歌つたのを思ひ出した。彼は彼女の顔の表情を、不思議な眼の輝きと頬の紅潮とを思ひ出した——、彼は椅子から立上つた、そして彼等に「お前達はわたしをいい加減馬鹿にしてゐると思つたら違ふぞ、わたしの曾祖父は百姓達の肋を吊上げたのだ、がわたしの祖父は自身百姓だったのだ」と言つて——そして彼等を並べて置いて殺してやり度くなつた。それからまた不圖、今彼に起つてゐることが、何も彼も夢で、いや夢でさへもなくつて、身體をゆすつて、うしろを向きさへすればいいやうな何かかう、くだらないことのやうに思はれた……彼はうしろを振り返つた、と、鳶が捉へた小鳥のからだに爪を立てるやうに、深く深く苦悶が彼の心に喰ひ込んで來た。かてて加へて、ラブレッキイは、數ヶ月後に、父親にならうとしてゐた……過去も、



未來も、全生涯が毒されてしまった。彼は遂に巴里へ歸つた、旅館について、ワルワラ・パヴロヅナに次のやうな手紙と一緒にエルネストの手紙を送り届けた。

「同封の紙片が貴女にすべてを説明するでせう。序にいつもあのやうに几帳面な貴女がこのやうな重要な書類を落すやうなことがあらうとは考へられなかつたことを申して置きます。(この句を哀れなラヴレツキイは數時間も頭の中でひねくり返してゐた)。わたしはもう貴女にお會ひ出来ません、貴女もわたしに面會を望まれぬことと信じます。貴女には年に一萬五千フラン送ることにします、それ以上は差上げられません。貴女の住所を村の事務所にお送りなさい。好きなことをし、好きな所にお暮しなさい。貴女の幸福を望みます。返事は無用です。」

ラヴレツキイは妻に、返事を要しないと書いた……併し彼は返事を待つてゐた、この譯の解らぬ、不可解な事件の説明を待ちこがれてゐた。ワルワラ・パヴロヅナはその目の中に長いフランス語の手紙を彼に書き送つた。それは彼を絶望の淵に突き落した、最後の彼の若しやが消えて終つた、——そして彼はかうなつてもまだ若しやといふ氣持ちが残つてゐたのが耻づかしかつた。ワルワラ・パヴロヅナは辯解しなかつた、彼女はただ彼に會ふ事だけを望んだ、取り返しのつかないやうに彼女を責めてくれないやうに頼んだ。手紙はどこか二三箇所に涙の跡が見えたとは言へ、冷やかでそして緊張してゐた。ラヴレツキイは悲しく苦笑した、そして使ひの者の口を通して、何も彼も非常に結構

だと言はせた。三日後には、彼はもう巴里にゐなかつた、併し彼はロシアへは歸らなかつた、イタリヤへ行つた。彼自身、なぜ彼がイタリヤを擇んだか解らなかつた、彼には實を言ふと、どこへ行かうと同じだつた、——家へさへ歸るのでなければ。彼は自身の執事に妻の扶助料に關する命令書を送つた、それと共に即刻コロビン將軍の手から領地に關する一切の仕事を取上げ、計算の引渡しを待たずに閣下にラヴリキヤから出發して貰ふやうに取りはかることを命じた、まざまざと彼は將軍の當惑と、追拂はれて行く將軍の空虚な威嚴を想像した、そして、悲嘆の中にも、彼は一種の意地悪い満足を感じた。同時に彼はまた手紙を送つてグラフィラ・ペトロヴナにラヴリキヤへ返つてくれるやうに頼んで、彼女あてに委任状を送つた、グラフィラ・ペトロヴナはラヴリキヤへ戻らなかつた、そして自分から新聞に全く餘計な委任状の破棄を廣告した。イタリヤの小都會に隠れて、ラヴレツキイは尙長い間妻を監視しないではゐられなかつた。新聞によつて彼は彼女が、豫定通りに、巴里を立つて、バーデン・バーデンへ赴いたことを知つた、彼女の名は間もなく例のジュール氏によつて署名された文章に現れた。この文章には、例のふざけた調子のなかに、一種の友情的な同情が浮んでゐた、この文章を読んでフォードル・イワーヌイチはひどく氣持ちが悪くなつた。間もなく彼は自分に女の子が生れたのを知つた、二た月ばかり経つて彼は執事から、ワルワラ・パヴロヅナが彼女の手當の三分の一を請求して來たといふ知らせを受取つた。間もなく益々よくない噂が傳はり始めた。遂には、



彼の妻がその中でいまはしい役割を演じてゐる悲喜劇的な物語が騒がしく各種の雑誌に掲載されるまでになつた。すべてが終つた、ワルワラ・バヴロヅナは「名物女」になつてしまつた。

ラヴレツキイは彼女を監視することをやめた、併し直ぐには自分をなだめることが出来なかつた。時々彼は、再び彼女のやさしい聲が聞かれるなら、再び彼女の手を自分の手の中に感じられるなら、どんなものを出してもいい、彼女を許してもいいとさへ思はれたほど、激しい哀愁に襲はれた。とは言へ時は徒らに過ぎなかつた。彼は苦行者には生れついてゐなかつた、彼の健康な天性が回復した。多くのことが明かになつた、彼を震撼した打撃そのものも彼にはより多く不測のものとは思はれなかつた、彼は自分の妻を理解した、——心に近い人間はただ別れて見る時にのみ完全に理解することが出来る。彼は再び仕事をし、最早以前のやうな熱心を持つてではないとしても、働くことが出来た、人生の経験によつて、教育によつて、育て上げられたスケプチズムが完全に彼の靈に喰ひ入つて終つたからで。彼は何事にも甚だしく冷淡になつた。四年ほど経つた、そして彼は故郷へ歸つて、身内の者に會ひたい力にひき摺られてゐる自分を感じた。ペテルブルグにも、モスクワにも留まらずに、彼はO市へ着いた、ここで私は彼と別れたのである、でそこへ私はいま好意ある讀者に私と一緒に歸つて頂くことを願ひするのである。

先きに述べた日の、翌朝の九時過ぎに、ラヴレツキイはカーチン家の階段を登つて行つた。出會ひ頭にリーザが、帽子を被り手袋をはめて出て來た。

「どちらへ？」と彼は彼女に訊いた。

「彌撒に参りますの。今日は日曜日でございますわ。」

「貴女は彌撒に通つていらつしやるのですか？」

リーザは黙つて、驚いたやうに、彼を眺めた。

「許してください、どうぞ、」とラヴレツキイは口早に言つた、「わたしは……わたしはさう言ふつもりでなく、わたしは貴女にお別れに上つたのです、わたしは一時間ばかりして村へ参ります。」

「でもここからはさう遠くないんぢやございません？」とリーザが訊いた。

「二十五露里ばかりです。」

闕の上へレーノチカが召使に伴はれて現れた。

「どうぞ、わたくし達を忘れないでくださいましな、」とリーザが言つた、そして階段を降りた。



「貴女もわたしをお忘れなさないやうに。さう、それから」と彼は附け加へて言つた、「貴女は教會へいらつしやるのですね、序にわたしのことも祈つてください。」

リーザは立ちどまつて、彼の方をふり返つた。

「よろしいわ」と彼女は、正面まへに彼の顔を見ながら、言つた、「わたくし貴方のこともお祈りしますわ。参りませう、レーノチカ。」

客間でラヴレツキイはマリヤ・ドミトリエヴナが一人であるのに會つた。彼女からはオーデコロンと和蘭薄荷の匂ひがした。彼女は頭痛がするのだと言つた、昨夜よく寝れなかつた。彼女は彼をいつもの物憂いやうな愛想よさでもつて迎へた、そして少しづつ話し出した。

「さうぢやありません？」と彼女は彼に訊いた、「本當にヴラヂミル・ニコライチは愉快な青年ですわ！」

「ヴラヂミル・ニコライチつてどなたですか？」

「パーンシンさんですよ、昨日ここにいらした。貴方はあの方に大變氣に入りましたよ、内緒で申しますが、mon cher cousin. あの方はもう宅のリーザに夢中なんです。それが何でせう？ あの方は家柄もよろしいし、立派に勤めてもおいでなさる、お伶俐で、それに、侍従でいらつしやる、ですからそれが神さまのお心に協つたことでしたら……わたしとしては、母として、非常に嬉しく思ひます。」

「ますの。責任は、勿論、大きいですわ、子供の幸福は親達に依るものですものね、でも言つて見れば、今日まで、いいにしろ悪いにしろ、みんなわたしが、何も彼もわたし一人でやつて参つたのですもの、子供たちを育てたのも、あれ達を仕込んだのも、みんなわたしなんでせう……今もわたしはポリュース夫人の手から家庭教師を送つてくれるやうに頼んでやりましたの……」

マリヤ・ドミトリエヴナは自分の心配や、骨折や、自分の母としての感情やらを述べた。ラヴレツキイは黙つて彼女の言葉を聞いてゐた、そして手の中で帽子をくるくる廻してゐた。彼の冷やかな、重苦しい眼差は無駄口を叩いてゐる夫人を困惑させた。

「リーザをどうお思ひになります？」と彼女が訊いた。

「リザヴェータ・ミハイロヴナは立派なお嬢さんですよ」とラヴレツキイは押しつけるやうに言つた、立上つて、お辭儀をした、そしてマルファ・チモフェーエヴナのところへ出掛けた。マリヤ・ドミトリエヴナは不満げに彼の後姿を見送つて、そして思つた、「何といふ禮儀知らずな百姓だらう！ ええ、今こそわたしには解る氣がする、何故あの人の妻があの人に貞節をつくしてゐられなかつたかつてことが。」

マルファ・チモフェーエヴナは自分の部屋に、自分の部下にとり巻かれて坐つてゐた。それは殆どどれも一樣に彼女の心に近い五つのものから成つてゐた、囀つたり水を運んだりするのをやめて了つ



たので好きになつた咽喉のふとい物識りの鶯と、小さな、非常に臆病なそして溫和しい狎のロースカと、怒りつばい牡猫のマトロースと、九つばかりの色の黒いちよこまかする小娘の、大きな眼と尖つた鼻を持つた、シュエーロチカと呼ばれてゐるのと、——それから五十五歳ばかりに見える老婆の、白い頭巾を被つて黒つばい着物の上に茶褐色の短い上衣を着てゐるナスターシャ・カルボヅナ・オガルコワ。シュエーロチカは町人の娘で、全くの孤兒であつた。マルファ・チモフェーエヅナは彼女を、ロースカと同じやうに、可哀想に思つて引取つたのであつた、小犬をも小娘をも彼女は通りで見付けたので、何れも瘦せて飢えてゐた、秋の雨がどちらをもビシヨビシヨにしてゐた、ロースカの後を追つて来るものは誰もなかつた、がシュエーロチカの方は彼女の伯父の、飲んだくれの靴屋が、寧ろ喜んでマルファ・チモフェーエヅナに譲つたので、彼は自分でも腹一杯喰べられなかつたし、無論姪には何も喰べさせないで、棒で頭を叩いてばかりゐたのだつた。ナスターシャ・カルボヅナとはマルファ・チモフェーエヅナは禮拜の時に、修道院で知己になつたので、自分の方から食堂で彼女に近付いてゆき（彼女はマルファ・チモフェーエヅナに、彼女の言葉によると、非常に上手にお祈りをしてゐたので氣に入つたのであつた）、自分の方から彼女に話しかけて、そして彼女を自分のところへお茶に招待したのだつた。その時以來彼女は彼女から離れなかつた。ナスターシャ・カルボヅナは非常に快活なそして優しい性質の女で、貧乏な貴族の出の、子供の一人もない寡婦であつた、圓い白髪の頭と、柔

かい白い手と、大まかな人の好きさうな輪郭の、少し滑稽な獅子つ鼻のふくよかな顔をしてゐた、彼女はマルファ・チモフェーエヅナを尊敬してゐた、こちらも彼女を非常に愛してゐた、尤もよく彼女のしほらしい心を冷かしはしたが、彼女はあらゆる若い男に對して心の弱さを感じた、そして最も罪のない冗談にも思はず小娘のやうに赧くなつた。彼女の全財産は千二百ルーブルの紙幣から成つてゐた、彼女はマルファ・チモフェーエヅナの費用で暮してゐたが、併し彼女とは對等だつた、マルファ・チモフェーエヅナが卑下されるのを我慢できなかつたからである。

「あ！ フェーチャ！」と彼女は彼を見かけると直ぐ始めた、「昨晚お前はわたしの家族に會はなんだね、よく御覽よ。わたし達はみんなお茶に集まつたんだよ。今日は宅の二度目のお祝ひのお茶でね。みんな可愛がつてやれるよ、シュエーロチカだけは駄目だがね、それから猫はひつかくよ。お前さん今日お立ちかい？」

「今日です。」ラヴレツキイは低い小さな椅子に腰かけた。「わたしはもうマリヤ・ドミトリエヅナにお別れをして來ました。わたしはリザウエータ・ミハイロヅナにも會ひました。」

「リーザつてお言ひよ、お前、あれがお前にどんなミハイロヅナだつて言ふのさ！ まあ、おとなしく坐つておいで、でないとシュエーロチカの椅子を壊して了ふ。」

「彌撒にいらしたのです」とラヴレツキイは續けた、「あの女はそんなに信心深いんですか？」



「さうだよ、フェーヂャ、大變にね。わたしやお前さんよりもね、フェーヂャ。」  
 「ぢや貴女は信心深くないのですか？」と呟くやうに、ナスターシヤ・カルボヅナが言った。「今日だつても、朝の彌撒にはいかれなかつたけれど、でも晩のにはいらつしやるでせう」  
 「いゝえ、——お前さん一人でおいで、わたしはすっかり懶けちやつたんだもの」とマルファ・チモフェーエヅナが言った、「そしてお茶ばかり飲んであるんだよ。」彼女はナスターシヤ・カルボヅナに、對等であつながら、「お前」で話した——彼女がベストワであるのは偶然でなかつた、イワン雷帝の名簿にベストワ家の者が三人迄も記されてあつた、マルファ・チモフェーエヅナはそれを知つてゐた。  
 「お話しくださいませんか。」と再びラヴレツキイが始めた、「マリヤ・ドミトリエヅナがわたしに今申したのですが、あの……なんていひましたつけ？……パインシンとかいふ。あれはどんな人なんです？」

「まア、何といふあの女はお喋りなんだらう！」とマルファ・チモフェーエヅナが叫ぶやうに言つた、「多分、内緒でお前さんに知らしたんだらう、こんな、つまり、花婿があるんだつてことを。坊主の子と話してゐれば、それでよささうなものなのに、いゝえ、きつと、それだけぢや足りないのです。それにまだ何でもないんぢやないか、有難いことには！ それだのあの女はもう喋べくつてゐる。」  
 「なぜ有難いことにはなんです？」とラヴレツキイが訊いた。

「それはあの若者がわたしの氣に喰はないからさ、それに何を悦ぶことがあるだらう？」  
 「お嫌ひなんですか？」

「さうだよ、誰も彼もあの男のとりこになると思つたら間違ひだよ。このナスターシヤ・カルボヅナが惚れてゐるだけで澤山だよ。」  
 哀れな寡婦はすっかり面喰つた。

「どうして貴女はそんな、マルファ・チモフェーエヅナ、貴女は神さまを恐れなさいませぬのね！」と彼女は叫んだ、そして急に顔も頸も眞赤になつた。

「だつて知つてゐるぢやないか、あの騙りは、」とマルファ・チモフェーエヅナが彼女を遮つた、「何で釣らうかつてことを、ちやんと知つてゐるんだよ、嗅煙草箱を呉れたんだよ。フェーヂャ、この女に煙草を嗅がしておもらひ、そりや美事な煙草箱だよ、蓋の上に騎馬の驃騎兵が刻んであつてさ。もうお前さん辯解なんかおしでない。」

ナスターシヤ・カルボヅナは手を振るだけだつた。

「それで、リーザは」とラヴレツキイが訊いた、「心が動いてゐるのですか？」

「どうも、あの男が氣に入つてゐるらしいがね、——でも、そんなこと解るだらうか？ 人間の心つてものは、お前、暗い林のやうなもので、まして若い娘の心はね。現にシェーロチカの心だつて——」



解るものぢやないよ！ お前がこゝへ来てから、なぜあの子は隠れてゐて、部屋から出て行かないか？」

シューロチカはクスクス忍び笑ひをして、部屋から飛び出した、がラヴレツキイは自分の席から立上つた。

「さうです」彼は間を置いて呟くやうに言つた、「娘の心は解るものぢやありません。」

彼は別れを告げ始めた。

「ぢや？ 直きまた會へるね？」とマルファ・チモフェーエヅナが訊いた。

「えゝ、伯母さん、近いんですから。」

「さう、お前はワシリーエフスコエへいくんだつたね。お前はラヴリキイには住みたくないのだね、——まア、それもいゝさ、ただ行つてね、お前の母さんのお墓にお参りおしよ、それから序にお祖母さんのお墓にもね。お前さんはあちらで、外國で、いろいろな學問をしておいでだが、でも多分、あの人達は自分のお墓の内、お前さんの訪ねて來たのを感じるかも知れないからね。それからお忘れでないよ、フェーヂャ、グラフィラ・ペトロローヅナの供養も矢つ張りしておやり、さア、お前さんに一ルーヴル銀貨をあげる。取つてお置き、是はわたしがあの女へお勤めしたいのだからね。わたしはあの女が生きてゐるうちは嫌ひだつたが、それはもう確かりした女だつたよ。伶俐な女だつた、それ

にお前を馬鹿にしなかつた。ぢや氣を付けておいで、惡どめはしないから。」

さう言つてマルファ・チモフェーエヅナは甥を抱擁した。

「リーザはパンシオンなんかのところへ嫁きやしないよ、心配おしでない、あの子にはあんな良人おや向かないやね。」

「わたしはちつとも心配なんかしやしません。」とラヴレツキイが應へた、そして部屋を出た。

## 一八

四時間後に、彼は出發した。彼の旅行馬車は勢ひよく軟かい村道を駛つていつた。もう二週間も早天が続いてゐた、薄い靄が牛乳のやうに空氣中に流れてゐて、遠くのエを包んでゐた、焦げくさい臭がそれからしてゐた。輪郭のはつきりしない暗色の雲が蒼ざめた碧色の空の表面に動いてゐた、かなり強い風が、乾いた絶え間の流れをなして暑苦しく吹いてゐた。頭をクツシヨンに當て、兩手を胸の上に十字に組んで、ラヴレツキイは扇形をして走り去る野の畝や、靜かにチラチラするえにしだや、鈍いいぶかしさを持つて駛り過ぎる馬車を横から眺めてゐる愚かしげな大鴉や白嘴鳥を、よもぎや苦蓬や野生のナナカマドの生繁つた長い畦を眺め入つた、彼は眺めた……と、この新鮮な、曠野の、



肥沃な土壤と草木の繁茂した土地とが、この緑色が、これらの蜿蜒たる丘陵、丈の短い櫛の密生した、<sup>狭</sup>、灰色の小村、疎らな白樺——すべてこの、長いこと彼によつて見られなかつたところのロシアの景色が、それと彼の心に甘い、同時に殆ど物悲しい感情を吹き込み、一種のこゝろよい壓迫を胸に加へた。彼の想念は静かにのろのろと動き、その輪郭はあれらの高い、同様に静かにのろのろと動いてゐるやうに見える雲の輪郭のやうに暗くぼんやりしてゐた。彼は自分の少年時代を、自分の母親を思ひ出した、どんな風に彼女が死んで行つたか、どんな風に彼が彼女のところへ連れて行かれたか、そして彼女が彼の頭を自分の胸に押付けて、何か彼に囁かうとし、ふとグラフィラ・ペトロヴナを見て——黙つて了つたのを思ひ出した。彼は、最初は快活な、何事にも満足しない、銅のやうな聲を持つた、——次には盲目の、涙脆い、汚らしい白毛の顎髭を持つた父親を思ひ出した、彼がある時食事の時に、餘計な盃を乾して、そしてナフキンにソースをこぼして、突然、何も見えない眼を屢叩きながら、まつ赤になつて、自分の苦行を話し出したのを思ひ出した、ワルワラ・パヴロヴナを思ひ出した、——そして思はず、瞬間的な心の痛みに人が顔をしかめるやうに、顔を顰めて、頭を振つた。それから彼の考へはリーザの上に飛んだ。

「さうだ、」と彼は思つた、「新しい一つの存在が正に生活に入らうとしてゐる。素晴らしい娘だ、彼女はどんなになるだらう？　彼女は美しくもある。蒼白い、活々した顔、眼と唇が非常に眞面目で、そ

れに眼差が無邪氣で誠實だ。たゞすこしはしやぎ過ぎるやうに見えるのが残念だ。背もすらりとしてゐるし、非常に軽い歩きつきだし、聲も静かだ。彼女が急に立ちどまつて、注意深く、微笑せずに、ぢつと耳を傾けて、それから考へ込んでそして髪をうしろへ投げかけるやうにするのが、わたしには非常に好ましい。確に、わたしにも解る、パーンシンは彼女に値しない。とは言へ、彼はどこが悪いか？　だが、何をわたしは空想してゐるのだらう？　彼女も矢張りすべてのものが走るその同じ道を走るのだ。それよりもわたしは眠らう。」ラヴレツキイは眼を閉ぢた。

彼は眠れなかつた、しかし眠いやうな旅の沈黙に沈んだ。過去の物象が、相變らずゆつくり急がずに起き上つて来て、他の物象と混り合ひ纏れ合ひながら、彼の心に泛びあがつて来た。ラヴレツキイは、何故か解らないが、ロベスピールのことを……佛蘭西の歴史を……若し彼が將軍だつたら、どんな風に戦ふだらうといふことを考へ始めた、彼は大砲の響きや叫び聲が聞こえる氣がした……頭が脇の方へ迂り落ちた、彼は眼をあげた……同じやうな野原、同じやうな曠野の景色である、側馬の磨きたてられた蹄鐵が交互に波のやうな砂塵の中にきらめき、赤い腋あてのついた黄ろい馭者の襦袢が風にふくらんでゐる……「歸つて来てよかつた」とラヴレツキイの頭の中に閃いた、そして彼は叫んだ、「やれッ！」外套の裾を重ねて、ぐつと羽根蒲團に身を押しつけた。旅行馬車は疾驅した、ラヴレツキイは身體を眞直にした、そして大きく眼をあげた。前方の丘の上に小さい村が展けて見えた、少し



右よりに鎧戸を卸した曲つた階段のついてゐる古びた邸宅が見えた、庭には門のところから緑の、生茂つた麻のやうな、イラクサが一面に生へてゐて、そこにはまた櫨の木造りの、まだ岩壘な穀倉が立つてゐた。それがワシリーエフスコエであつた。

馭者は門の方へ馬車を廻して、馬をとめた、ラヴレツキイの従者は馭者臺の上に腰を浮かして、そして飛降りさうな恰好をしながら「オーイ！」と叫んだ。噎枯れた犬の吠え聲がそれに應へた、そして、暫くすると、廣庭へ、どこからか、南京木綿の長上衣を着た、雪のやうに眞白い頭髪をした男が飛び出して來た、彼は眼の上に手傘をして、旅行馬車を眺めたが、急に両手で腿をパンとたゝいて、初めちよつとまごまごしてゐたが、間もなく門を開けに飛んで來た。旅行馬車はイラクサの上に車輪をさらさら言はせながら、廣庭に這入つて來て、階段の前にとまつた。白髪しらがの男は、見たところ非常にすばしつこいらしく、挽索をぐつと上へあげて、前車をはづして終ふともう階段の下に、廣く足をねじ曲げて立つてゐた、そして主人が下へ降りるのを助けながら、その手に接吻した。

「御機嫌よう、御機嫌よう、兄弟」とラヴレツキイは呟いた、「お前は、たしか、アントンといつたね？ お前まだ達者だつたかい？」

老人は黙つてお辭儀をした、そして鍵を取りに駈出した。彼が駈けてゐる間、馭者は両手を脇にかつて締つてゐる戸の方を眺めながら動かずにゐた、がラヴレツキイの従者はヒラリと飛び降りると、

馭者臺に片手をかけて、繪に描いたやうなポーズをとつた。老人は鍵を持つて來た、そして要もないのに蛇のやうに身を曲げ、高く肘を持ち上げて、戸を開けた、脇へどいて、そして再び帯のあたり迄頭をさげしてお辭儀をした。

「わたしは家へ歸つて來たのだ、戻つて來たのだ」とラヴレツキイは、小さな玄關へ這入つてゆきながら、心に思つた、するうちに鎧戸がガタガタイふ音と軋み音をたてて順々に開かれて行つた、そして白晝の光りが人氣のなかつた部屋々々に流れ込んだ。

## 一九

ラヴレツキイの着いた、そしてそこで二年前にグラフィラ・ペトロローヅナの亡つた小さな邸は、前世紀に建てられたもので、丈夫な松材で出來てゐた、それは外見は古びてゐたが、しかしこれからまだ五十年、それ以上もちさうであつた。ラヴレツキイは全部の部屋を歩き廻つた、そして、年をとつた、のろまな、背中に白いほこりを被つた、鴨居の下にぢつととまつてゐる蠅どもがひどく不安に思つたことには、どこもかしこもすつかり窓を開け放つやうに命じた、グラフィラ・ペトロローヅナが死んだその日から誰もそれを開けたものは無かつた。家の内のものは凡てもと通りであつた、光澤の



ある灰色の緞子で張られた、擦れて薄くなつた客間の細脚の白い長椅子は、まざまざとエカテリナ時代を思ひ起こさせた、その客間に女主人の愛用の肘椅子も置いてあつた、それは高い眞直な倚木を持つてゐたが、彼女は年をとつてもそれへ寄らうともしなかつたのだつた。正面の壁にはフォードルの曾祖父の、アンドレイ・ラヴレツキイの古い肖像が懸かつてゐた、暗い膽汁質な顔が辛うじて黒ずんで反りかへつた地から浮き出してゐた、小さな、意地悪い眼が氣難かしげに腫れぼつたい眼瞼の下から覗いてゐる、髪粉をふりかけない黒い髪が刷子みたやうに沈鬱な皺のよつた額の上に高まつてゐた。肖像の隅には塵垢だらけになつた造花の花環が下つてゐた。「グラフィラ・ペトロヴナさま御自身でお編みなされたので御座います。」とアントンが告げた。寢室には古い、非常に質のいい、縞織の帷の下に、狭い寢臺が高まつてゐた、色の腿せた枕と薄い綿の入つた蒲團が寢臺の上に横はつてゐた、そして枕頭には、未婚の老婦人が、一人で皆のものから忘れられて死んでゆきながら、最後にすでに冷くなりつつある唇を押し當た、その聖母マリヤの畫像が懸かつてゐた。銅の板金と歪んだ鏡を持つた黒くなつた金鍍金のしてある寄木細工の化粧臺が窓際に立つてゐた。寢臺と並んで聖像部屋があつた、それは壁紙の張られてゐない壁と隅のところ、重さうな聖籠の懸かつてゐる小さな部屋で、床には擦り切れて蠟で汚れた毛氈が敷いてあつた、グラフィラ・ペトロヴナがその上に跪いて禮拜をしたのである。アントンはラヴレツキイの従者と一緒に厩と納屋を開けに行つた、彼の代りに、殆ど彼と同

年ぐらゐの眉のあたりまでプラトツクにくるまつた老婆が現れた、彼女の頭はこまかく顫へてゐた、そして眼はボンヤリ見開かれてゐた、しかしそれは熱心と、溫和しく仕へる長い間の習慣と、それからそれと同時に——一種の敬虔ないつくしみを現してゐた。彼女はラヴレツキイの手に近付いた、それから命令を待つものゝやうに戸口のところに立つた。彼は彼女が何といふ名であつたか、まるで記憶がなかつた、彼女を見た事があるかどうかさへも憶えなかつた、彼女はアプラクセヤといつて、四十年ほど前に、例のグラフィラ・ペトロヴナが邸から追ひ出して鳥番にしたのだといふことが解つた、とは言へ、彼女は餘り口を利かなかつた、——まるで耄碌でもしたやうで——ただへりくだつて眺めるだけだつた。この二人の老人と、それからアントンの曾孫の、長いルバーシカを着た三人の太鼓腹の子供の他に、まだ一人邸には片手の小作にも出られない百姓が住んでゐた、彼は蝦夷山鳥のやうにブツブツ言つた、そして何の役にも立たなかつた、ラヴレツキイの歸りを吠え聲で迎へた老ぼれ犬の方がまだ少しはましだつた、この犬はもう九年の餘もグラフィラ・ペトロヴナの言ひつけで買はれた重い鎖につながれて坐つてゐた、そして殆ど動いたり自分の重荷を曳摺つたりすることの出来ない状態にあつた。家を見て廻つてから、ラヴレツキイは庭へ出た、そしてすつかり満足した。そこに一面にブリヤン草や、山牛蒡や、すぐりや、木苺が生茂つてゐた、しかしそこにはまた澤山の蔭があり、その大きさと不思議な枝ぶりで人目を驚かす澤山の古い菩提樹があつた、それは餘りこんで植



ゑられてゐるので、何時か——百年ばかり前に——刈込まれたのであつた。庭は赤味がかつた丈の高  
い蘆で縁をとられたあまり大きくない明るい池で終つてゐた。人間の生活の跡は非常に早く消えて了  
ふものである、グラフィラ・ペトロヴナの屋敷はまだ荒れはてゝはゐないのだが、それでももう人  
間のあわただしい交渉のない所に於てのみ、地上の一切のものが假睡眠、その静かな假睡のなかに沈  
んでゐるやうに見えた。フォードル・イローヌイチは村も歩いて見た、女達は小屋の闕から、頬に手  
を當てて彼を眺めた、百姓達は遠くからお辭儀をした、子供達はバラバラ遁げ出した、犬どもは平氣  
で吠えた。彼は、遂に、空腹を感じた、しかし夕方にしか自分の召使と料理人が着かないのを知つて  
ゐた、食料品を積んだ荷車がまだラヴリキから來なかつた、——アントンに頼まなければならなかつた。  
アントンは早速仕度をした、老鶏をつかまへて、咽喉を切つて、そして毛を筆つた、アブラク  
セヤが長いことそれをこすつたり洗つたりした、鍋へ入れる前に、まるで肌着のやうに、それを洗濯  
した、そして彼女が、遂に、煮あげた時、アントンが食卓を覆うて、食器を並べ、そしてその前に銀  
鍍金の黒くなつた鹽皿と圓いガラスの栓のついた首の細い磨き上げられた壺を据えた、それからラヴ  
レツキイに歌ふやうな聲で、食事の用意が出來た事を告げた、——そして自分は彼の椅子のうしろに  
右の拳をナプキンで巻き、何か強い、絲杉の香ひに似た古めかしい匂を漂はしながら、立つた。ラヴ  
レツキイはスープを味はつてから牝鶏に手をつけた、皮は一面に大粒の膿胞に覆はれてゐて、太い筋

がどちらの足にも通つてゐた、肉は木質と灰汁を噛むやうな味がした。食事を終つて、ラヴレツキイ  
はお茶を貰ひたいと言つた、若し……。「直ぐ差上げますで」と老人は彼を遮つた、——そして自分の  
約束を守つた。赤い紙片に包まれたお茶の粉末が探し出された、小さな、しかし大變沸きの早い騒が  
しいサモワールが探し出された、非常に小さな、まるで溶けたやうな角砂糖も探し出された。ラヴレ  
ツキイは大きな茶碗で何杯もお茶を飲んだ、彼はまだ子供の時分からこの茶碗を憶えてゐる、骨牌の  
札がそれに描かれてゐる、それではただお客だけが飲んだのであつた、——そして彼は丁度お客のや  
うにそれで飲んだ。夕方に召使が着いた、ラヴレツキイは伯母の寢臺で寝たくなかつた、彼は食堂へ  
床を取るやうに言ひつけた。蠟燭を消してから、彼は長いこと周囲を見廻してゐた、そして佗びしい  
思ひに驅られた、彼は長い間住まはれなかつた所に初めて泊つた人が誰でも味ふ感情を経験した、彼  
には、彼の周囲をひしひしと取り巻いてゐる闇が新しい住み手に慣れ得ないでゐる、家の壁までが胡散  
臭い顔付をしてゐるやうに思はれた。遂に彼は溜息をついて、蒲團を被つた、そして眠りに落ちた。  
アントンが誰よりも長く起きてゐた、彼は長いことアブラクセヤと囁き合つてゐた、そつと嘆息をし  
て、二度ばかり十字を切つた、彼等は二人とも主人が、すぐそばに非常に立派な邸宅のある美事な領  
地があるのに、彼等のところへ、ワシーリエフスコエへ住むやうにならうとは豫期しなかつた、彼等  
はその邸宅そのものがラヴレツキイには堪らないのだなんて夢にも知らなかつた、重苦しい思ひ出を



呼びさすなんて。氣の濟むまで囁き合つた後に、アントンは棒をとつて、穀倉のそばに吊されて久しく沈黙を守つてゐた夜番の板を叩いて、そしてそのまま廣庭の上に、自分の白い頭に何も被らずに、突伏して終つた。五月の夜は静かでやさしかつた——で氣持ちよく老人は眠ることが出来た。

二〇

翌る日ラヴレッキイは可成り早く起きた、村長と話をした、納屋へ行つて見た、番犬の鎖を解いてやるやうに言ひつけた、が犬はすこし吠えただけで、自分の小屋から離れようとしなかつた、——そして、家へ歸つて來ると、一種の穩かなうつとりした心の状態に沈み込んで、終日それから脱しなかつた。「今こそわたしは河の底についたのだ、」と彼は一度ならず自分に言つた。彼は窓際に坐つて、ぢつと動かずに、さながら彼を取り巻いてゐる静かな生活の流れに、静かな農村の稀な響きに耳を澄ましてゐるかのやうであつた。現にあそこのイラクサの蔭で誰かが細い細い聲で歌つてゐる、蚊がそれに調子を合はせてゐるやうである。今彼は歌ひやめた、しかし蚊は矢張り唸つてゐる、一緒に、小うるさく哀れつぽい蠅のブンブンいふ中に、絶えず頭を天井に打突けてゐる肥つた山蜂の唸り聲が聞こえる、牡鶏が通りで、嘎枯れ聲で最後の調子を高く引張りながら叫んだ、荷車がゴトゴトと音を

立てた、村で門の軋る音がする。「何え？」と突然女の聲がする。「ホウ、ええ子ぢや」とアントンが、抱へてゐる二歳の女の子に言つてゐる。「穀酒ケツネもつてこよう」とさつきの女の聲が繰返す、——そして突然死のやうな静けさにかへる、何の音もしない、ぢいつとしてゐる、風も木の葉をゆすらない、燕が聲も立てずに順々地上をに飛んでゆく、そしてその黙つて飛んでゆくの心が哀愁を誘ふ。「今こそわたしは河の底にある、」と再びラヴレッキイは思ふ。「そして何時も、常にここでは生活が静かで悠悠としてゐるのだ」と彼は思ふ。「この圈内に入る者は——従はなくてはならない、ここでは心を亂すこともいらないければ、何物をも苦しめることがいけない、ここでは自分の道を急がずに、農夫が鋤で畝を作つて行くやうに拓いてゆく者にだけ成功がある。そして何といふ力が周圍にあるであらう、何といふ健康がこの無活動の靜寂の中にあるであらう！ 現にこの窓際に、生茂つた雑草の中から山牛蒡が覗いてゐる、その上には獨活が汁多い莖を擡げてゐる、處女涙草はそれよりもまだ高くそのぼら色の捲蔓を投げかけてゐる、がかしこ遠くの野面では、裸麥が光り、燕麥がもう管になつた、そして一本々々の木、一本々々の草が擴がれるだけ廣く一つ一つの葉を開いてゐる。「女性との愛にわたしの青年時代は過ぎて終つた、」とラヴレッキイは考へ續ける、「ここで退屈がわたしを正氣にかへらせ、わたしを落着かせ、わたしも急がずに仕事をすることが出来るやうにして呉れるだらう。」そして彼は再び靜けさに耳を澄まし始める、何物をも期待せずに——しかもそれと同時に絶えず何物かを



期待しながら、静けさが四方八方から彼をとりまく、太陽が静かに穏かな青空を渡る、そして雲が静かに流れる、それは恰もどこへ何の爲めに流れて行くかを知つてゐるかのやうである。丁度この瞬間に、地上の他の場所では、生活が沸騰し、急ぎ、喘いでゐるのだ、がここではその同じ生活が沼の水草の上を渡る水のやうに、音もなく流れてゐるのである、そして四圍あたりが暗くなるまでラヴレッキイはこの過ぎゆく流れゆく生活の觀照から身を退くことが出来なかつた、過去を悼む悲しみは彼の心のうちに春の雪のやうに解けていった、——そして不思議なことには！——彼はこれまで一度もこんなにも深く強く故郷といふものを感じたことはなかつた。

二二

二週間かかつてフォードル・イワーヌイチはグラフィラ・ペトロヴナの家を整理し、廣庭や庭園を清めた、ラヴリキーから具合のいい家具が持ち込まれ、町からは酒だの、書物だの、雑誌だのが届けられた、既には馬が見られるやうになつた、一口に言つて、フォードル・イワーヌイチは全部必要なものを取り揃へて——地主ともつかず、隠遁者ともつかず、暮し始めたのである。彼の一日一日は單調に過ぎて行つた。そして彼は、誰にも會はなかつたけれども、退屈しなかつた、彼は熱心にそし

て注意深く家政を執つた、馬で附近を乗り廻した、書物を讀んだ。しかし、彼はすこししか讀まなかつた、彼には老人のアントンの話を聞く方が愉快だつた。大抵ラヴレッキイはパイプと冷たいお茶のコップを持つて窓に近く坐つた、アントンは戸口のとこに、手をうしろに組んで、立つて——そして裸麥や燕麥が榊でなく、大きな袋で、一袋ニコペックかニコペックで賣買ひされた時分の、到るところ町の直ぐ近くまでも暗い林や、足を踏み入れられない曠野が擴がつてゐた時分の、古い昔の、お伽噺のやうな時代についての自分のポツリポツリと急がぬ話を始めるのだつた。「だけど今ぢやア。」ともう八十以上にもなる老人が不服を言つた、「すつかり拓りひらかれて、通る所も無えほど開墾されました。」それから又アントンは自分の御主人の、グラフィラ・ペトロヴナのことも澤山話した、どんなに彼女は考へ深くつて節儉家しんけんだつたかといふことや、或る紳士の、若い隣人が彼女の御機嫌を取らうとして、しよつちゆう遣つて來たことや、——そして彼女が彼の爲めにくすんだ褪紅色のリボンの附いたよそ行きの帽子を被り、レワンチン織の黄いろつぼい着物を着たといふことや、だが其後間もなく、「如何です、奥さま、お溜りになりましたらう？」といふ不躰な質問にすつかりこの隣人に腹を立てて、訊ねて見えてもお拒りするやうに言ひつけられたことや、それから又その時に、彼女の死んだ後で、何も彼も、どんな詰まらない物でもフォードル・イワーヌイチにお目にかけるやうに言ひ置かれたことや。そして實際、ラヴレッキイは伯母の身のまはりのものが一切、くすんだ褪紅



色のリボンの附いたよそ行きの帽子もレワンチン織の黄いろつぼい着物も、そつくりしてゐるのを見出した。ラヴレッキイの當にしてゐた古い書類や珍らしい證書類は、一冊の古ぼけた帳面の外には、何も見當らなかつた。それには彼の祖父のピョートル・アンドレイチの手蹟で「公爵アレクサンドル・アレクサンドロウイチ・プロゾロフスキイ閣下によりトルコ國との間に締結されたる平和條約のサインクト・ペテルブルグ市に於ける祝典」とか「この箴言は三位一體教會の長老フォードル・アウクセンチエウイチよりプラスチックコーフィヤ・フォードロヅナ・サルツイコワ將軍夫人に與へられたるものなり」といふ注意書のしてある肺病の煎藥の處方や、「虎のフランス人どもの嚙消えたり」といつた種類の政治上の珍聞や、——それから直ぐそれに並んで、「陸軍少將ミハイル・ペトロウイチ・コルイチエフ死去の趣きモスクワ報知に見ゆ。ピョートル・ワシーリエウイチ・コルイチエフの息子に非ざるか?」といふやうなことが書き込まれてあつた。ラヴレッキイはまた幾つかの古いカレンダーや夢占ひの本やアムボヂク氏の奇妙な著述を見付け出した、長いこと忘れられてゐた、しかし馴染深い「象徴と寓意畫」が多くの思ひ出を呼びよせました。グラフィラ・ペトロヅナの化粧臺の中からはラヴレッキイは黒いリボンで結ばれ、黒い封蠟で封じられ、抽出の一番奥のところへ突込まれてある小さな紙包を見出した。紙包の中には額の上に垂れかかつてゐる軽い捲毛の髪と、細い切れ長の眼と、半ば開かれた口とを持つた青年時代の彼の父親のパステル畫の肖像と——それから殆ど擦れてしまつ

てゐる、白い着物を着、白薔薇を手にした蒼白い顔の婦人の——彼の母親の肖像が、向ひ合はせにしてあつた。自分ではグラフィラ・ペトロヅナは決して肖像を描かせることをしなかつた。「わしは、旦那さま、フォードル・イワノイチ」とアントンがラヴレッキイに言つた、「その時分お屋敷に住んどりませなんだが、しかし曾祖父様の、アンドレイ・アフナーシエウイチ様を憶えてをりますだよ——わしらあのお方さまがお亡くなりの方は十八でしたな。一度お庭でお目にかかりましたつすが、——わしや股の筋がブルブル震へやしたよ、尤も、あの方さまは何でもねえ、ただなんて呼ぶだつてお聞きなせえまして、——御自分のお部屋へハンケチを取りにやらされただけで御座いました。本當の旦那様でがしたよ、——御自分よりも上のもんを御存知ねえでした。それは貴方さまの曾祖父さまのところで大層功德のある香爐が御座いましたからで、アフオンの御本山から坊さまがあのお方さまにお上げなすつたので御座います。そしてこの坊さまがあのお方に申しますには、あなたのお親切のために、旦那さま、差上げます、持つておいでなされ——すれば審きを恐れんでよろしい。それにまア、その頃の時勢がどんなだつたかは、旦那さま、解りきつたことぢや御座いませんか、旦那さまはかうと思ひなすつたことは、何でもなされたがす。誰かよその旦那方でも、旦那さまに逆らはうなんて考へると、ただぢつとかうそいつの方を見るだけで、そしてかう仰有る、「下手な眞似をすな」——これがあのお方さまのお氣に入りの文句でがした。それであのお方さまは、貴方の曾祖



父さまは、小さな木造の御屋敷に住んで御座つたのだが、財産をえらく残しやして、銀ばかりか、ありと凡ゆるもんが、——どの倉にも一杯に詰まつとりました！ 主人で御座いました。貴方さまがお讚めになりましたあの塚も——あのお方さまので、あれにウオッカを入れてお上りになつたので御座います。ところが貴方さまの祖父さまの、ピョートル・アンドレイチさまは、お屋敷も石で拵へましたのだが、財産は殖えねえで、からよくねえでがした、親御様より悪い暮しをなされて、満足な目にもちつともお會ひなさいませなんだ、——お金をすつかり失くして、あのお方を思ひ出させるやうなものは何も、銀の匙も残つちやるましねえ、——それでも有難いことには、グラフィラ・ペトロヴナさまが氣をつけてくださいまして。」

「本當かね」とラヴレツキイは彼を遮つた、「あの女の<sup>ひよ</sup>ことを老ぼれのやかましやつて言つてゐたのは？」

「言つた者もありますだ！」と不満げにアントンが言つた。

「それで何で御座いますか、旦那さま」と或る日老人は思ひ切つて訊ねた、「奥さまはどうなされましたで、どちらにお住居で御座いますかね？」

「わたしは妻と別れたのだ。」とラヴレツキイは苦しげに言つた、「どうぞ、あれのことは訊かないでくれ。」

「畏まりました。」と悲しげに老人は答へた。

三週間して、ラヴレツキイは馬に乗つて、O市のカリーチン家を訪ねた、そして彼等のところで夜を過ごした。レンムがそこに居合はせた、彼はひどくラヴレツキイの氣に入つた。父親のお蔭で、彼はどんな樂器も手にしたことは無かつたけれど、しかし非常に音樂が、正しい音樂が、古典音樂が好きだつた。パーンシンはその晩カリーチン家にはゐなかつた。知事が彼をどこか地方へ派遣したのだつた。リーザが一人で、そして非常に美事に弾いた、レンムは元氣づいた、夢中になつて、紙を管のやうに巻いて指揮をしたりした。マリヤ・ドミトリエヴナは初めのうち、彼の様子を見て笑つてゐた、それから寢に行つた、彼女の言葉によると、ベートオベンがあまりにも彼女の神經を苛立たせたからで。夜更けにラヴレツキイはレンムを家まで送つて行つて、そして彼のところに三時まで坐つてゐた。レンムは多く話した、彼の猫脊は眞直になり、眼は廣く見開かれて、キラキラと輝いた、髪の毛までが額の上で震へた。もう長いこと誰一人彼にかかづらふ者がなかつた、だのにラヴレツキイは、明かに、彼に興味を持つて、いろいろと注意深く訊ねるのだつた。それが老人を感動させた、彼は到頭客に自分の曲を見せたり、弾いて聞かせたり、力のない聲で自分の作品の中の抜粹を、それからシルレルのフリドリッンに作曲したのを全部歌つて聞かせさせた。ラヴレツキイは彼を褒めた、二三のものを繰返させた、そして、歸りしなに、二三日自分の所へ客に來るやうに招待した。通りまで彼を送つ



て出たレンムは、直ぐ同意して、そして固く彼の手を握り緊めた、しかし、明けはなれたばかりの黎明の色を仰いで、新鮮な濕氣を帯びた大氣中に一人あとに取り残されると、うしろを振り返つて、眼を細め、からだを縮かめて、まるで悪いことでもしたやうに、そろそろと自分の部屋の方へ引返して行つた、「Ich bin wohl nicht klug」（わしは正氣でない）——と彼は、自分の硬い小さい寢臺に横はりながら、呟いた。彼は、數日経つて、ラヴレッキイが馬車で彼を迎へに來た時、病氣であるやうに見せかけようと努めた、しかしフォードル・イワノイチは彼の部屋に這入つて來て、彼を説きふせた。ラヴレッキイが特に彼の爲めに自分の村へピアノを町から取り寄せたといふことが最も強くレンムを動かした。彼等は二人でカリーチン家を訪れた、そしてそこで夜を過ごした、しかしそれはさうこの前ほど愉快でなかつた。パーンシンがそこにゐて、自分の旅行の話をいろいろして、非常に面白く自分の見て來た地主達を冷かしたり御披露に及んだりした、ラヴレッキイは笑つた、併しレンムは自分の隅から出ないで、むつつりして、蜘蛛のやうに、靜かに全身を震はし乍ら、氣難しさうにボンヤリ眺めてゐた、そしてラヴレッキイが別れを告げはじめた時に、やつと元氣づいた。馬車に乗つてからも、老人は人見知りをしてちつと身體を縮かめ續けてゐた、しかし靜かな、温かい空氣、そよ風、輕さうな物の影、草や白樺の芽の香、月の無い星空の穩かな耀き、よくそろつた馬の蹄の音と鼻息、道や春や夜の一切の魅惑が——哀れなドイツ人の心に沁みこんで來た、そして彼は自分の方から

ラヴレッキイに話しかけた。

彼は音樂のことを、リーザのことを、それからまた音樂のことを話した。彼がリーザのことを話す時には、何だか言葉をゆつくり發音するやうに見えた。ラヴレッキイは話を彼の作曲に向けた、そして半ば冗談らしく、彼のためにリブレットを書いて呉れるやうに頼んだ。

「ふむ、リブレット！」とレンムが押返すやうに言つた、「いや、それはわたしの柄ぢやありません、わたしにはもうオペラに必要なあの精彩も想像の華やかさもなくなつてゐます、わたしはもう今ぢや自分の力を失つてしまひました……。しかし若しわたしにまだ何かすることが出来るとしたら——、わたしはロマンスで満足します、無論、わたしは美しい言葉を望みます……」

彼は黙つた、そして長いことちつと動かずに、眼を空へ向けて、坐つてゐた。

「例へば」と遂に彼は言つた、「何かかういつつた種類のです、なんぢ、星よ、おお、なんぢら、清き星よ……」

ラヴレッキイはわづかに彼の方に顔を向けた、そして彼を眺めた。



「なんぢら、星よ、清き星よ。」とレンムは繰返した。……「なんぢらは正しきにも正しからざるにも隔てなし、……さあれ心の無垢なるもののみ。」まアさういつた風の……「なんぢらを解す」つまり、いや、——なんぢらを愛す、です。わたしは詩人ぢやありません、——どうしてわたしなぞ！ 併し何かさういつた種類の、何か高い。」

レンムは帽子を後頭部へ押しやつた、明るい夜のうす闇の中に彼の顔はいつもよりか蒼白く、若やいで見えた。

「してなんぢらもまた、」と彼はますます静まり行く聲で續けた、「愛する者を、愛し得る者をなんぢらは知れり、なんぢらは清くして、なんぢのみ慰め得べければなり……。いや、全然違ひます！ わたしは詩人ぢやありません。」と彼は呟いた、「しかし何かかういつた風の……」

「わたしも詩人でないのが残念です、」とラヴレツキイが言つた。

「つまらぬ空想です！」とレンムは押戻すやうに言つた、そして馬車の隅に身を埋めた。彼は眠らうとするもののやうに眼を閉じた。

暫くたつた……。ラヴレツキイは耳を澄ました……。「星よ、清き星よ、愛よ、」と老人は呟いた。

「愛よ。」とラヴレツキイも自分で繰返して見た、ぢつと考へに沈んだ、心が重苦しくなつて来た。

「貴方はフリドリンの美しい曲をお書きになりました、フリストフォル・フォードルイチ、」と彼は

大きな聲で言つた、「しかし貴方はどう思ひます、あのフリドリンは、伯爵が彼を妻のところへ連れて行くとき直ぐに彼女の戀人になつて終つたぢやありませんか——ね？」

「貴方がさういふ風にお考へになるのは、」とレンムが言つた、「それは、多分、経験が……」彼はプツリと黙り込んだ、そして困惑して横を向いた。ラヴレツキイは強いられたやうに笑つた、同じやうに横を向いて、道の上を眺めはじめた。

馬車がワシーリエフスコエの小邸宅の階段のところに着いた時には、星はもう蒼白みはじめて、空は灰色になつてゐた。ラヴレツキイは自分のお客を當てがはれた部屋に案内して行つた、それから書齋に引きかへして、その窓際に坐つた。庭では夜啼鶯が最後の夜明け前の歌を歌つてゐた。ラヴレツキイはカリーチン家の庭でも夜啼鶯が啼いてゐたのを思ひ出した、彼はまたその最初の啼き聲が聞こえて来た時に、暗い窓の方にふり向けられたリーザの眼の静かな動きを思ひ出した。彼は彼女のことを考へ始めた、と彼の心は穩かになつた。「清き乙女よ、」と彼は口へ出して言つて見た、「清き星よ。」と微笑をもつて彼は付け加へた、そして安らかに眠りに就いた。

が、レンムは長いこと自分の寢臺の上に樂譜帳を膝の上のせて坐つてゐた。異常な、秀れた旋律が彼を訪れて來さうに思はれた、彼は早くも熱してドキドキした、彼は早くもうつとりとした疲労とをこれの近づいて來る心よさを感じた……。しかし彼はそれを待ち終ほせなかつた。



「詩人でもなければ音楽家でもない！」と彼は遂に呟いた……。  
そして彼の疲れた頭は枕の上に落ちた。

二三

翌る朝主人と客とは庭の古い菩提樹の蔭で茶を飲んでゐた。

「名人！」と先づラヴレッキイが言つた、「貴方は直きに奉祝のカンタータを書かなければなりませんよ。」

「どんな機會にですか？」

「パーンシン君とリーザの婚禮の機會にです。貴方は彼が昨日あれの御機嫌を取つてゐたのを見られなかつたですか？ 多分、すっかりもう甘くいつてゐるらしいですね。」

「そんなことにはなりません！」とレンムが叫んだ。

「何故ですか？」

「何故つてそれは不可能だからです。尤も、」と彼はすこし間を置いて付け加へた。「この世では何でもあり得ます。特にここでは、貴方方のロシアでは。」

「ロシアは暫らく問題外にしませう、併しそれならばどういふ悪いところを貴方はこの結婚に見出しをられるのですか？」

「みんな悪いのです、みんなです。リザウエータ・ミハイロヅナは眞實な、眞面目な、高潔な感情を持たれた娘さんです、——ところが彼は……彼はデレツタントです、一と口に言つて。」

「でもあれはあの男を愛してゐるぢやないですか？」

レンムはベンチから立上つた。

「いいえ、あの女は彼を愛してはゐません、といふのは、あの女は非常に心が美しいのです、ですから自分で、愛するといふことが何を意味するか知らないのです。カリーチン夫人があの女に、彼は立派な青年だつて仰有るのです、するとあの女はカリーチン夫人のいふことをきくのです、それはあの女がまだ、十九でこそありますが、全くの子供だからです、朝お祈りをして、晩お祈りをします、——そしてそれは非常に稱讚すべきことです、併しあの女は彼を愛してゐません。あの女は唯だ美しいもののみ愛することが出来ず、ところが彼は美しくありません、といふのは詰まり、彼の心が美しくないので。」

レンムはすべてこれらの言葉を一と息に、熱をもつて、小さい足どりで茶卓のまへを前に後に歩きながら、そして地上に眼を走らせながら、言ひ終つた。



「愛する名人！」と突然ラヴレツキイが叫んだ、「わたしには貴方自身がわたしの従妹に戀していらつしやるやうに思へます。」

レンムは急に立ちどまつた。

「どうぞ、」と彼は不確な聲で言つた、「わたしをそんな風にかかはないでください。わたしは狂人ぢやありません、わたしはばら色の未來ではなくつて、暗い墓場を眺めてゐるのです。」

ラヴレツキイは老人が可哀想になつた、彼は許しを乞うた。レンムはお茶の後に自分のカンタータを弾いて聞かせた、が晝食の時に、ラヴレツキイ自身に引出されて、再びリーザのことを話し出した。ラヴレツキイは注意深さと好奇心を持つて彼の言葉に聴き入つた。

「どう思ひますか、フリストフォル・フォードルイチ、」と彼は遂に言つた、「わたし達のところは今、何も彼もすつかり片附いてゐるらしいし、庭も花で一杯ぢやありませんか……あの女をここへ、あの女の母親とそれからわたしの伯母と一緒に、招待しようぢやありませんか、——どうです？　それは貴方にとつても愉快でせう？」

レンムは頭を皿の上に傾けた。

「招待なさいまし、」と彼は殆ど聞きとれないくらの聲で言つた。

「しかしパーンシンは必要ないでせう？」

「必要ありません。」と殆ど子供らしい微笑を泛べて老人は言つた。

二日経つて、フォードル・イワーヌイチは市街へ、カリーチン家へ出掛けて行つた。

## 二四

彼は皆が家にゐる所へ行き合せて、しかし彼は直ぐには自分の目的を説明することをしなかつた、彼はまづリーザと二人きりで話をしたく思つた。機會が彼を助けた、彼等は差向ひで客間に残つた。彼等は話した、彼女はもう彼に馴れてゐた、——それに彼女はいつたい人見知りをしない方だつた。彼は彼女の話を傾けた、彼女の顔を眺めた、そして心の中でレンムの言葉を繰返した、彼の意見に同意した。二人の知り合つてゐる、しかしまだお互にさう親しくない人間が、急に思ひがけなくわづかの間に打ち解けて、——そしてこの打ち解け合つた感情が直ぐに二人の眼差のうちに、二人の親しげな靜かな微笑の中に、彼等の動作そのものの中に現されることが間々あるものである。丁度それがラヴレツキイとリーザの間に起つた。「この人はかういふ方だ、」と愛想よく彼を眺め乍ら、彼女は思つた、「貴女はかういふ女だ」と彼も思つた。それゆゑ彼は彼女が、それでもすこし口ごもりながら、久しい前から彼に話したいと思つてゐることがあるのだけれど、しかし彼を怒らせはしないかと



恐れてゐると言ひ出されても、さう酷くは驚くことをしなかつた。

「大丈夫です、お話しなさい、」と彼は言つた、そして彼女の前に立ちどまつた。

リーザは自分の明るい眼を上げて彼を見た。

「貴方は大變いい方ですわ、」と彼女は始めた、そして同時に「さうだ、この人は本當にいい方だ……」と思つた。「お許し遊ばせね、わたくしこんなことを貴方に申し上げちゃいけないかも知りませんけど……でもどうして貴方はお出来になりましたの……何故貴方は奥さまとお別れになりましたの？」

ラヴレツキイはびくりと震へた、ぢつとリーザを見詰めた、そして彼女のそばに坐つた。

「吾が子よ、」と彼は言つた、「どうぞ、この傷に觸らないでください、貴女のお手は柔かですけれど、でも矢張りわたしには痛いですから。」

「わたくし存じてをりますわ、」とリーザは彼の言葉が聞こえなかつたかのやうに續けた、「あの方は貴方に罪がありますわ、わたくしあの方を辯護しようとは思ひません、でも神さまがお結びになつたものを離すことが出来るでせうか？」

「我々の信念はこの點について餘りにかけ離れ過ぎてゐます、リザウェータ・ミハイロヴナ、」とラヴレツキイは可成り鋭く言つた、「わたし達はお互に理解し得ないでせう。」

リーザは蒼くなつた、彼女の全身はかすかに戰いた、しかし彼女は黙らなかつた。

「貴方はお許しにならなければなりません、」と靜かに彼女は言つた、「貴方も許して頂けるやうに。」  
「許す！」とひつたくるやうにラヴレツキイが言つた。「貴女は先づ知らなくちやいけません、誰のために貴女は頼んでられるのか？ あの方を許すなんて、あれをまた家へ入れるなんて、あれを、あの空虚な、良心のない人間を！ いったい誰が貴女に申したのです、あれがわたしのところへ歸りたがつてゐるなんて？ いいえ、あれは自分の境遇にすつかり満足してゐます……ですからこの場合何を言ふことがありませう！ あれの名前は貴女に呼ばれてはなりません。貴女は餘りに純潔です、貴女はあんな人間を理解することすら出来ません。」

「何故そんなに悪く仰有いますの？」とリーザはやつとの思ひで言つた。彼女の手の震へは目に見えらるまでになつた。「貴方御自身があの方をお棄てになつたのです、フョードル・イワーヌイチ。」

「しかしわたしは貴女に言ひますが、」と堪まらなくなつてラヴレツキイが言つた、「貴女はあれがどういふ女かつてことを知らないのです！」

「それでしたら何故貴方は結婚なさいましたの？」とリーザが小聲で言つた、そして眼を伏せた。

「何故わたしが結婚したかつて仰有るんですか？ わたしはあの時分若くつて無經驗だつたのです、わたしは欺かれたのです、わたしは美しい外見に迷はされたのです。わたしは女といふものを知らなかつたのです。わたしは何も知らなかつたのです。貴女には神さまが幸福な結婚をさせて下さるやう



に祈ります！　しかし決して受合ふことは出来ないつてことを知らなければなりません。」  
 「わたくしも矢張り不幸になるか知れませんか。」とリーザが言った（彼女の聲はと絶え勝ちになつた）、「でもその時は従はなければならぬと思ひます、わたくし言へませんが、でもわたくし達が従はないとすれば……」

ラヴレッキイは両手を握り緊めて足踏みした。

「怒らないで下さいましね、お許し遊ばせね。」と慌ててリーザが言った。

丁度その瞬間にマリヤ・ドミトリエヴナが這入つて来た。リーザは立ち上がつてあちらへ行かうとした。

「お待ちください」と急に彼女の後からラヴレッキイが叫んだ。「わたし貴女のお母さんと貴女にお願ひがあるんです、わたしの新しい住居を訪ねて頂きたいのです。實はわたしピアノを取寄せたのです、レンムさんがお客に来てゐますし、ライラックが今盛りなのです、貴女は田舎の空気を吸はれてそしてその日の中にお歸りになることが出来ます、——御承諾くださいますか？」

リーザは母親の方をチラと見やつた、がマリヤ・ドミトリエヴナは困惑したやうな様子をした、然しラヴレッキイは彼女に口を開かせないで、いきなり彼女の両手に接吻した。マリヤ・ドミトリエヴナは、いつも愛撫に對して敏感であるところへ、もう全くの「無作法者」からこんなお愛想を受けよ

うとは思ひもよらなかつたので、すつかり感激してしまつて、同意を表した。彼女が何時にしようかと考へてゐる間に、ラヴレッキイはリーザのところへ近づいて、そしてまだ昂奮したままで、そつと彼女に囁いた、「有難う、あなたはいい方です、失禮しました。」彼女の蒼白い顔は樂しげなそして恥づかしさうな微笑で赧くなつた、彼女の眼も矢張り頬笑んでゐた、——彼女はその瞬間まで、彼を怒らしてしまつたのぢやないかと恐れてゐたのだつた。

「ヴラヂミル・ニコライチも一緒に參ることが出来まして？」とマリヤ・ドミトリエヴナが訊いた。

「結構ですとも、」とラヴレッキイが應へた、「ですが身内だけの方がよくはないでせうか？」

「だつて、何だと思ひますが……」とマリヤ・ドミトリエヴナは始めようとした。「しかし、お好きなやうに、」と付け加へた。

レーノチカとシュエーロチカを連れて行くことに決まつた。マルファ・チモフェーエヴナは行くのことにわつた。

「わたしや苦しくつてね、お前」と彼女は言った、「年寄りだからね、それにお前のところには、多分、泊るところが無いだらう、その上わたしは違つたベッドぢや寢られないから。若いものはおいでがいい。」

ラヴレッキイは最早リーザと二人きりになることがなかつた、しかし彼は、彼女が愉快にも、すこ



し恥づかしくも、また彼が哀れにもなつたほど、ちつと彼女を眺めてゐた。彼女に別れを告げながら、彼は彼女の手を強く握り緊めた、彼女は一人になつてからちつと考へ込んだ。

二五

ラヴレツキイが家へ歸つた時、彼は客間の戸口で背の高い瘦せぎすの、着古された青い色のフロックコートを着た、皺のよつた、しかし活々とした顔をし、生へ伸びた白毛しろが交りの頬鬚と長い眞直な鼻と小さな充血した眼を持つた男に迎へられた。それは昔の大學の同窓のミハレウイッチであつた。ラヴレツキイは最初彼が解らなかつた、しかし相手が自分の名を名乗るや否や、彼等は烈しく抱擁した。彼等はモスクワ以來會ふ機會がなかつたのだつた。感歎の言葉が、質問が振撒かれた、久しい以前に忘れてしまつた思ひ出がこの世に浮び出て來た。忙しく煙草を吸ひながら、ぐいぐいお茶を飲みながら、そして長い手を振り廻しながら、ミハレウイッチはラヴレツキイに自分の話をして聞かせた、その中には何も愉快なことが無く、自分の仕事の成功も彼は誇ることが出来なかつた、——しかし彼はひつ切りなしに噎れた神経質な哄聲で笑つた。一ヶ月前に彼は〇市から三百露里ばかり離れた或る金持の商人の事務所に口を得て、そして、ラヴレツキイが外國から歸つて來たのを知つて、舊友に會ひ

に途中から立寄つたのであつた。ミハレウイッチは青年時代と同じやうに激越な調子で話した、以前のやうに熱くなり、喧騒した。ラヴレツキイは自分の事情を説明しようとした、しかしミハレウイッチは彼を遮つて、慌ててかう言つた、「聞いたよ、——兄弟、聞いたよ、——誰がそれを豫期するところが出來たらう？」——そして直ぐと話を一般的な問題の方へ持つて行つた。

「僕はね、君」と彼は言つた、「明日立たなくちやならんだ、今日はひとつ、僕等はもう、君許してくれ給へよ、晩く寝ることにしようぢやないか。僕は是非知りたんだよ、君はどうしてゐるか、どういふ意見、信念を持つてゐるか、君はどんなになつたか、何を君に生活は教へたか？（ミハレウイッチはまだ三十年代の語法を使つてゐた）、僕のことを言へば、僕は随分變つたよ、君、生活の波が僕の胸に落ちかかつたのだ、——はて誰が言つたか知らん？——尤も重要な、本質的な點では、僕は變らなかつたが、僕は今でも善を、眞理を信じてゐる、しかし僕は信じてゐるだけぢやない、——僕は今信じてゐるよ、さうだ——僕は信じてゐる、信じてゐる。いいかね、君は知つてゐるが、僕は詩を書いてゐる、その中には詩はないよ、しかし眞實がある。僕は君に僕の最近の作を讀んで聞かせよう、その中に僕は僕の最も偽らない信念を表現したんだ、聞き給へ、」ミハレウイッチは自分の詩作を朗讀し始めた、それは可成長かつた、そして次ぎのやうな句で終つてゐた。



新しき感情に全身を打ち任せたり、  
我は心小兒の如くなれり、  
して我れは崇めしもの凡てを焼けり、  
焼きしもの凡てを崇めたり。

128

最後の二句を朗讀する時、ミハレウィッチは殆ど泣き出さないばかりだった、軽い痙攣——激しい感情の徴候である——が彼の廣い唇の上を走り通つた、彼の醜い顔は晴々となつた、ラヴレツキイはぢつと聞いてゐた、聞いてゐた……反對の氣持ちが彼の中に動いてゐた、常に準備された、常に沸騰してゐるモスクワの大學生の感激が彼を苛立たした。十五分もたたないうちに、彼等の間には早くもただロシア人にだけ可能である果てしない議論が燃え上つた。二つの違つた世界で過ごされた永年の別離のあとで、性急に、相手のは勿論のこと、自分自身の思想すらもはつきり理解せずに、言葉尻を捉へたりただ言葉だけで反駁したりしながら、彼等は最も抽象的な題目について論争した、——そしてまるでそれが二人の生死に關してでもあるかのやうに争つた、家中のものが吃驚するほど喚いたり怒鳴つたりした、哀れなレンムは、ミハレウィッチが着くと一緒に自分の部屋に閉ぢ籠もつて了つ

てゐたが、ひどく不安になつて、漠然と何かを恐れ始めさへした。

「さうしたらいつたい君は何者だと思ふ？ 厭世家ぢやないか？」とミハレウィッチが夜の二時近くに叫んだ。

「こんな厭世家があるだらうか？」とラヴレツキイが言ひ返した、「そいつ等はみんな蒼白くつて病氣なんだが——よかつたら、僕は君を片手で差上げてもいい？」

「ぢや、厭世家でなければ、懷疑家だ、それはもつと悪い（ミハレウィッチの言葉には彼の故郷の、小露西亞の訛があつた）。君はどんな権利をもつて懷疑家になんかになれるんだ？ 君は人生に於て幸福でなかつた、としよう、それは君の罪ではなかつた、君は熱烈な、愛する心を持つて生れた、それを君は無理に女性から遠ざけられてゐた、最初にぶつかつた女が君を欺くのは當然の話だ」

「あの女は君をも欺いたのだ、」と氣難かしげにラヴレツキイが言つた。

「よろしい、さうして置かう、僕はあの場合運命の道具だつたのだ、——したが、何を僕は嘘を言つてゐるのだ、——あの場合運命なんてありはしない、古い習慣で正確に言ひ現せないんだよ。ところで一體それは何を證明してゐると思ふ？」

「それは僕が子供の時分から骨抜きにされてゐることを證明してゐる。」

「それならば君は自分で骨を取りかへし給へ！——それでこそ君は人間なんだ、男なんだ、エネルギー



ギーに君はことを缺かぬ！——しかしそれはどちらにしても、果して可能だらうか、果して許されることだらうか——個人的な、言はば事實を一般的な法則に、不變の法則に還元することが？」

「どんな法則なんだ？」とラヴレツキが遮つた、「僕は認めないよ……」

「いや、それは君の法則なんだ、法則なんだ」と今度はミハレウィッチが遮つた。

「君はエゴイストだ、さうだよ！」と彼は一時間後に叫んだ、「君は自己快樂を望んだ、君は人生に於て幸福を望んだんだ、君は自分の爲めにだけ生きることが欲したんだ……」

「自己快樂つて何だい？」

「しかも凡てが君を欺いたのだ、凡てが君の足の下で崩れて了つたのだ。」

「自己快樂つて何さ、——僕は君に訊いてゐるんだよ？」

「そしてそれは崩れて了ふのが當然だつたのだ。何故なら君は支柱を、それを發見し得ない所に求めてゐたからだ、何故なら君は自分の家をサクサクの砂の上に建てたからだ……」

「もつとはつきり、比喻なんかでなしに話し給へ、僕は君の言ふことが解らん。」

「何故なら、——よろしい、笑ひ給へ、——何故なら君には信仰がないからだ、心の温か味がないからだ、知識だ、ただもうつまらぬ知識だけだ、——君は、何のことはない、可哀想な、時代遅れのポルテール主義者だ——さうだよ、君は！」

「誰が、僕がポルテール主義者だつて？」

「さうだよ、丁度君の父親おとうさんと同じやうな、しかも自分ではそれを夢にも知らないでゐるのだ。」

「さう言はれると、」とラヴレツキが叫んだ、「僕は君を狂信者だと言はなければならぬ！」

「哀しい哉！」と嗟嘆してミハレウィッチが押返した、「僕は、不幸にして、まださういふ高尚な名稱を頂戴するやうなことを何一つしてゐないよ……」

「僕は今こそ君を何と呼んだらいいか解つたよ、」とその同じミハレウィッチが夜の三時近くに叫んだ、「君は懷疑家ぢやない、厭世家ぢやない、ポルテール主義者ぢやない、君は——怠惰者だ、その上君は意地の悪い怠惰者なんだ、意識をもつた怠惰者なんだ、無邪氣でない怠惰者なんだ。無邪氣な怠惰者はちやんと煖爐の上に横はつて、何もしない、それは何もすることが出来ないからだ、彼等は何事も考へない、ところが君は考へる人間だ——それでゐて寢そべつてゐるのだ、君は何かすれば出来るのだ、——それなのに何もしない、腹のくちい腹を上に向けて寢ころんで、そして言つてゐるのだ、かうしてゐるに限る、寢ころんでゐるに限る、何故なら、人間のすることは何も——彼もすべてくだらなくつて、何の役にも立たない謔言だから。」

「いつたいどういふ所から君は僕が寢ころんでゐるといふのだ？」とラヴレツキが訊いた、「どういふわけで君はさういふ思想を僕がもつてゐると考へるのだ？」



「その上君等はみな、君等の仲間は、」と倦むことを知らないミハレウィッチが續けた、「教養のある怠惰者なまけものなのだ、君等はどつちの足で獨逸人が跛を引くか知つてゐる、英國人や佛蘭西人がどういふ缺點を持つてゐるか知つてゐる、——そして君等にはその君等の哀れな知識が役に立つて、君等の恥づべき怠惰を、君等の忌まはしい無活動を辯護するのだ。或る者は、俺は、賢いのだ、——だから寝ころんでゐるのだ、があいつ等は、馬鹿だから、齷齪してゐるのだと言つて誇つてさへもゐる。さうだ！——でなければ我が國にはかういふ諸君もゐる——と言つても、僕は君に當てつけて言ふんぢやないよ、——彼等は自分の一生を倦怠の無感覺の中に過ごして、それに馴れつこになつてしまつて、その中に坐つて、まるで……まるでクリームの中の蕈みたいに、」とミハレウィッチはきめつけて、そして自分でも自分の比喩に笑ひ出した。「おゝ、倦怠のこの無感覺こそは——露西亞人の滅亡だ！ 全世紀を擧げて働かうとしてゐるのに、然るに憎むべき怠惰者なまけものは……」

「だが、いつたい何を君は憤慨してゐるのだ？」と今度はラヴレッキイが呶鳴つた。「働くつて……仕事をするつて……何をするのか言つたらどうだ、憤慨ばかりしてゐないでさ、ポルタワ生れのデモステネス君！」

「これは驚いた！ それは僕は君に言へないよ、それは各人がめいめいに知つてゐなければならぬのだ、」と皮肉にデモステネスがやり返した。「地主で、貴族で、——それで何を爲すべきかを知らない

なんて！ 信仰が無いからだ、でなければ知つてゐる筈だ、信仰が無いのだ、——だから叡智が無いのだ。」

「まア、息だけでもつかせて呉れ、畜生、休ませて呉れ、」とラヴレッキイが頼んだ。

「一分だつて、一秒だつて！」ミハレウィッチが命令するやうな手つきをしてやり返した。「一秒だつて！——死は待つてゐない、生だつても待つてゐる筈はないのだ。」

「それにしても何時、何處で人間は怠けることを思ひ付いたのだら？」と彼は朝の四時に叫んだ、併しもうその聲はいくらか嘎れてゐた、「我が國に於てだ！ 現代に於てだ！ ロシヤに於てだ！ 各個々人の上に神に對し、國民に對し、自分自身に對して、義務と偉大なる責任とがある時に！ われわれは睡つてゐる、が時は過ぎゆく、われわれは睡つてゐる……」

「君に注意するが、」とラヴレッキイが言つた、「僕等はちつとも今睡つてやしない、寧ろ他人の安眠を妨害してゐるのだ。僕等は、まるで雞のやうに、呷鳴り散らしてゐるのだ。聞き給へ、ホラもう三番雞の聲らしいぜ。」

この冗談がミハレウィッチを笑はせ、落着かせた。また明日、と彼は微笑みをもつて言つた——そしてパイプを煙草入の中へしまつた。「また明日、」とラヴレッキイも繰返した。併し親友達はそれから尙一時間のその餘も話し込んでゐた……とは言へ、彼等の聲は最早それ以上高くはならなかつた、



そして彼等の話は静かな、悲しい、善良な話であつた。

ミハレウィッチは翌日、どんなにラヴレツキイが留めても、立つて了つた。フョードル・イワーヌイ  
チは彼を引留ることに成功しなかつた、しかし彼は心ゆくまで彼と語り合つた。ミハレウィッチが一  
文無しだといふことが解つた。ラヴレツキイは早くも前の晩に憐愍をもつて彼の中に永年の貧困の兆  
候と習慣とを見て取つた、彼の長靴は破れてゐた、フロックコートの背には釦が一つ足りなかつた、  
彼の手は手袋を知らなかつた、髪にはこは毛が突立つてゐた、着いてからも、彼は手を洗はして貰は  
うとも思はなかつた、それでゐて夕食には、まるで鮫のやうに、肉を両手で裂き乍ら、パシ／＼音を  
させて自分の丈夫な黒い歯で骨を噛みながら、喰べた。同様に、彼は勤務の方がうまく行かなくて、  
自分の事務所に「教育のある人間」を置きたいといふ單にそれだけで彼を雇ひ入れた請負人に一切の  
希望を懸けてゐることも分つた。それにも拘らず、ミハレウィッチはしよげなかつた、相變らず皮肉  
屋で、理想家で、詩人で、眞面目に人類の運命について、自分自身の使命について心配をしたり悲し  
んだりしながら、そして殆どもう餓死しないばかりであることについてはすこしも心配をせずに、暮  
してゐた。ミハレウィッチは結婚をしなかつた、併し無數に戀をして、そしてすべての自分の戀人の  
詩を書いてゐた、特に彼は熱烈にある不思議な、黒い縮れ髪のポーランド女を歌つた……實を言ふと、  
このポーランド女は、多くの騎兵士官達によく知られてゐる平凡な猶太女であるといふ噂であつた。

……併しどう思つたところで、これはどつちみち同じことではないか？

レンムとミハレウィッチはそりが合はなかつた、獨逸人を、馴れない所から、彼の騒がしい話が、  
彼の烈しい動作が吃驚さしてしまつた……不幸な者は遠くから直ぐと他の不幸な者を感じるのであ  
るが、しかし年をとつてはお互にびつたりすることは稀である、——ところでこれは少しも不思議は  
ない、彼等には何一つ——希望すらも、お互に分ち合ふものがなかつたのだ。

立つ前にミハレウィッチは尙長いことラヴレツキイと語り合つた、若し彼が目醒まさないなら、  
彼は破滅すると預言した、眞面目に自分の百姓達の生活を心配してやるやうに彼にすすめた、彼は不  
幸の熔鑪で清められたのだと言ひながら、自分を例に引いた、——そしてその場で幾度か自分を幸  
福な人間だと言つて、自分を空の鳥、谷の百合に比較した……。

「何れにしても、黒百合だね、」とラヴレツキイが言つた。

「へえ、君、貴族振るな、」と人が好ささうにミハレウィッチが言つた、「それよりも君の血管にも名  
譽ある平民の血が流れてゐることを神に感謝するがい。併し僕は思ふよ、君には今その無感激な状  
態から君を救ひ出して呉れる何か清い、地上ならぬものが必要なのだ。」

「有難う、兄弟、」とラヴレツキイは言つた、「僕はそんな地上ならぬものなんか澤山だよ。」

「黙れ、ツイヌイク！」とミハレウィッチが叫んだ。



「シニツクだよ」とラヴレツキイが訂正した。  
 「全くツイヌイクだ」と平気で、ミハレウィッチが繰返した。  
 旅行馬車の内へ坐つてからも、そこへ彼の平べつたい、黄いろい、可笑しい程軽い旅行鞆も運び入れられたのであるが、彼はまだ喋べつてゐた、赤茶けた襟と扣の代りに獅子の蹠のついた一種のイスパニヤ風のマントにくるまつて、彼はまだロシアの運命に關する自分の意見を叙べ立て、未來の幸福の種子を撒きでもするかのやうに、淺黒い手を空に振つた。馬車はついに動き出した……。「僕の最後の三つの言葉を記憶したまへ」と彼は、全身を旅行馬車から突き出して、そして釣り合ひをとりながら、叫んだ、「宗教、進歩、人類……さよなら！」眼の上まで帽子をすつぽりと被つた彼の頭が消えた。ラヴレツキイは一人階段の上に残つた、——そして旅行馬車が見えなくなつてしまふまで、ちつと遠く道の上を眺めてゐた。「だが彼は、恐らく、正しいのぢやないか」と彼は家へ這入りながら思つた、「さうだ、俺は怠惰者なまけものなのだ。」ミハレウィッチの多くの言葉が、彼は争ひこそしたれ、同意こそしなかつたれ、打ち消し難く彼の心に銘じた。人は善良でさへあれば——何人もこれを排ぞけ得ないのだ。

二日ほどして、マリヤ・ドミトリエヅナが、約束に従つて、自分の子供達を連れて、ワシリーエフスコエ村へ到着した。娘達は早速庭へ走り出た、がマリヤ・ドミトリエヅナは物憂げに部屋々々を見て廻つて、そして物憂げにすべてを讚めた。自分のラヴレツキイへの訪問を彼女は大きな謙遜のしるし、殆ど善良な行爲とまで思つてゐた。彼女はアントンとアブラクセヤが、古風な召使の習慣に従つて、彼女の手へ近づいた時、愛想よく微笑した、——そして弱々しい聲で、鼻へかけて、お茶を飲ませて呉れるやうに頼んだ。白い編んだ手袋をはめたアントンのひどく癩に觸つたことは、お着きになつた奥さまにお茶を出したのは彼ではなくて、老人の言葉によると、何一つ禮儀を知らないラヴレツキイの雇ひ執事だつたことであつた。その代りアントンは食事の時に自分の望みを果した、彼は生へたやうにマリヤ・ドミトリエヅナの肱椅子のうしろに立つた——そしてもう誰にも自分の場所を譲らなかつた。永い間絶えてなかつたワシリーエフスコエの來客が老人を昂奮させもし喜ばせもした、彼は彼の主人と立派な人達が知り合ひであるのを見るのが愉快だつた。尤もこの日胸を躍らしてゐたのは彼のみではなかつた、レンムも亢奮してゐた。彼は煙草色の尾の尖つた短い燕尾服を着、ぎゆうつと自分



の首巻を締めて、絶えず咳拂ひをしてゐた、そして愉快さうな愛想よい様子をして脇へ寄つてゐた。ラヴレツキイは満足を以て自分とリーザとの間に隔てのない親しさが續いてゐるのを認めた、彼女は、這入つて來ると直ぐ親しげに彼の方へ手を差しのべた。食事の後にレンムは燕尾服のうしろの隠しから、そこへ彼はしよつちゆう手を突込んでゐたのだが、楽譜用紙の小さく巻いたのを取り出して、そして唇を締めつけたまま、黙つて、ピアノの上にそれを載せた。それは彼によつて前の晩に獨逸語の古語で書かれた、星のことを叙べたロマンスであつた。リーザは直とピアノの前に坐つた、そしてロマンスを弾き出した……。哀しい哉！音楽はこんがらかつてそして不愉快なほど緊張したものになつてゐた、明かに、作曲家は何か激しい、深刻なものを現さうと焦慮つてゐるのだが、しかし何も出て來なかつた、努力が單に努力に終つてゐた。ラヴレツキイもリーザも二人ともそれを感じた、——そしてレンムはそれを理解した、一言もいはずに、彼は自分のロマンスを元の隠しへ藏ひ込んだ、そしてもう一度弾いて見ようといふリーザの申出に對して、頭だけを振つて、意味ありげに言つた、「今は——お仕舞！」——背をこゞめ、身體を縮かめて、側を離れた。

夕方に皆は魚釣りに出掛けた。庭園の向ふの池には鮒や鱒が澤山繁殖してゐた。マリヤ・ドミトリエヅナを岸近くの蔭に据ゑた舷椅子に坐らせた、彼女の足の下に毛氈を敷いて、一番上等の釣り竿を持たせた、アントンは、老練な釣り手として、お世話を申上げた。彼は熱心に蟲をつけて、それを手

のひらで叩いて、それに唾液を吐きかけて、そして見事に全身を前の方に突き出して、自分で絲を投げさへした。マリヤ・ドミトリエヅナはその日彼のことをフォードル・イワーヌイチに女子専門學校式のフランス語で次ぎのやうに言ひ現した、「il n'y a plus maintenant de ces gens comme ça commente-t-ils。」（註——こんな昔風の人なんてめつたにありませんわ）。レンムは二人の少女達と遠く堰の方まで出掛けて行つた、ラヴレツキイはリーザのそばに場所を占めた。魚は絶え間なく引いた、釣り上げられる鮒がひつきりなしに或る時は金色の、或る時は銀色の横腹を空中に閃めかした、少女達の喜ばしさうな叫び聲が絶えなかつた、マリヤ・ドミトリエヅナも弱々しく二度ばかり叫び聲を上げた。ラヴレツキイとリーザのところでは誰のところよりも一番釣れなかつた、それは彼等が他の人達よりも少ししか釣ることに注意を向けないで、浮子が岸近く吹き寄せられるまゝにして置いたからであつた。赤味がかつた丈の高い蘆が靜かに彼等の周圍で戦いでゐた、前方には靜かにちつと動かぬ水が輝いてゐた、そして彼等のところでは靜かな會話が取り交されてゐた。リーザは小さな筏の上に立つてゐた、ラヴレツキイは柳の木の前傾いた幹の上に坐つてゐた、リーザは帶の圍りを幅廣い、着物と同じ色の白いリボンで結ばれた着物を着てゐた、麥藁帽子を一方の手にさげて、もう一方の手に幾らか努力をして弓なりに曲つた釣り竿を支へてゐた。ラヴレツキイは彼女の清らかな、いくらかいかつい横顔や、耳の後に投げかけられた髪や、子供のやうに火照つてゐる柔かい頬を眺めた、——そ



して「お、どんなに可愛らしくお前はわたしの池の上に立つてゐることだらう！」と思つた。リーザは彼の方を振り返らなかつた、ちつと水を眺めてゐた——そして目を細くしてゐるでもなく、さればといつて頬笑んでゐるでもなかつた。近くの菩提樹の蔭が二人の上に落ちかゝつてゐた。

「あれから、」とラヴレツキイが始めた、「わたしはこの間の貴女との話について随分考へました、そして貴女が非常にいゝ人だといふ結論に達しました。」

「わたくし少しもそんな意り……」とリーザは言はうとして——含羞んだ。

「貴女は好い人です、」とラヴレツキイは繰返した。「わたしは粗野な人間ですが、併し誰でも貴女を愛さなければならぬと感ずます。あの、レンムにしても、あの人は唯もう貴女に戀してゐるのです。」

リーザの眉は——ひそめられずに、ピクリと震へた、それは何時も彼女が不愉快なことを聞いた時に起こるのだつた。

「わたしはあの人が今日非常に可愛想でした、」とラヴレツキイは續けた、「自分のロマンスが成功しなかつたのでね。若くつて出来ないのなら——それは辛抱が出来ます、併し年をとつて力のないのは——悲惨です。だつて力のなくなつて行くのを感じないのは恥かしいことぢやありませんか。老人はあゝいふ打撃を堪へることは困難です！……ごらんない、喰つてゐますよ……人から聞いたのです

が、」とラヴレツキイは少し黙つた後で附け加へた、「ヴラヂミル・ニコライチが大變美しいロマンスを書いたさうですね。」

「はア、」とリーザが答へた、「大したものではありませんけれど、でも悪くはありませんわ。」

「それでどう思ひます、」とラヴレツキイは訊いた、「あの人はいゝ音楽家ですか？」

「あの方は、わたくし、大變音楽の才能をお持ちのやうに思ひますけど、でもあの方はこれまで必要なやうにそれをなすつていらつしやらなかつたのですわ。」

「さう。それでいゝ人ですか？」

リーザは笑ひ出した、そして素早くフョードル・イワノイチを見上げた。

「なんて可笑しい質問でせう！」と彼女は頬笑んだ、糸を上げて、そして再びそれを遠くへ投げた。

「どうして可笑しいんです？——わたしはあの人のことを貴女に、つい近頃こゝへ來た人間として、親戚としてお訊きするのです。」

「親戚として？」

「さうです。わたしは、何でも、貴女の伯父に當つてゐるぢやないですか？」

「ヴラヂミル・ニコライチは善良な心をお持ちですわ、」とリーザが言つた、「あの方は賢いですわ、maman (註—お母さま) があの方を大變愛してゐますの。」



「それで貴女はあの人を愛してゐますか？」

「あの方はいゝ人ですわ、どうしてわたくしがあの方を愛してはならないでせう？」

「あゝ！」とラヴレツキイは言つた、そして黙り込んだ。半ば悲しげな、半ばおどけたやうな表情が彼の顔に現れた。執拗な彼の眼差がリーザを困惑させた、併し彼女は頬笑み續けた。「では、彼に幸福あれ！」と彼は、遂に、獨言のやうに呟いた、そして頭を反らした。

リーザは赧くなつた。

「貴女は間違つていらつしやいますわ、フォードル・イワーヌイチ、」と彼女が言つた、「貴方は考へ違ひをなすつていらつしやいますのよ……。それとも貴方はヴラヂミル・ニコライチがお嫌ひなの？」と不意に彼女が訊いた。

「好きません。」

「何故ですか？」

「わたしにはあの方が心といふものを持つてゐないやうな気がします。」

微笑が彼女の顔から消えた。

「貴女は人を厳しく判断しつけていらつしやるのですわ、」と彼女は長い沈黙の後に言つた。

「わたしはさう思ひません。わたしが他人を厳しく判断するどんな権利を持つてゐますか、失禮だが、

わたし自身が寛大を必要としてゐるのに？ それとも貴女は怠惰者<sup>なまけもの</sup>だけがわたしを嘲つてゐるのですか？

「お約束をお守りになりましたか？」

「どんなお約束？」

「わたしの爲めにお祈りくださいましたか？」

「えゝ、わたくしお祈りしました、そして毎日お祈りしてゐますわ。ですけれど貴方、どうぞ、そのことを軽々しく仰有らないでくださいまし。」

ラヴレツキイはそんなことは決して思つてもゐないこと、彼は一切の信仰を深く尊敬してゐることをリーザに誓ひ始めた、それから彼は宗教について、人類の歴史に於けるその意義について、キリスト教の意義について議論をすゝめた……。

「キリスト教徒であることが必要ですわ、」とリーザが多少の努力をもつて言つた、「天上のものを……かしこの……地上のものを認識するためではなく、人は誰でも死ななければならぬ爲めにです。」

ラヴレツキイは思ひがけない驚きにリーザの上に眼を上げた、そして彼女の眼差しとぶつかつた。

「貴女は何といふ言葉を仰有るのです！」と彼は言つた。

「これはわたくしの言葉ぢや御座いませぬの、」と彼女が答へた。



「貴女でない……。しかし何故貴女は死のことを言ひ出したんですか？」  
 「存じませんわ。わたくしよくそのことを考へますの。」  
 「よく？」  
 「え。」

「今貴女を見てみると、連もそんな風には見えないですよ、貴女は今非常に愉快さうな明るい顔をしております、貴女は微笑つていらつしやる……」

「え、わたくし今非常に愉快ですわ」と無邪氣にリーザが應へた。

ラヴレツキイは彼女の両手を執つて、しつかりとそれを握り緊めたかつた……。

「リーザ、リーザ！」とマリヤ・ドミトリエヅナが叫んだ、「ここへ来て、御覽よ、どんな鮎をわたしは捉へたものだらう。」

「只今、maman」とリーザが答へた、そして彼女の方へ行つた、がラヴレツキイは自分の幹の上に残つた。「俺はまるで老いぼれた人間のやうでなく彼女と話をしてゐる、」と彼は思つた。あちらへ行きがけに、リーザは自分の帽子を枝に懸けていつた、不思議な殆どやさしい感激をもつてラヴレツキイはこの帽子を、その長い、少し皺になつたりボンに眺め入つた。リーザは直ぐに彼のところへ戻つて來た、そして再び筏の上に立つた。

「どうしてヴラヂミル・ニコライチに心が無いとお思ひになりますの？」と彼女が、暫らくして、訊いた。

「わたしはもう貴女に、わたしが間違つてゐるかも知れないつて申しましたよ、しかし時が何も彼も示してくれるでせう。」

リーザはぢつと考へ込んだ。ラヴレツキイはワシーリエフスコエ村の自分の生活や、ミハレウィツチヤ、アントンのことを話し始めた、彼はリーザと話をし、何も彼もすべて彼の心に起つたことを傳へたい要求に驅られた、彼女は非常にやさしく、非常に注意深く彼の言葉に耳を傾けた、彼女のごく稀な返事や反對は彼には非常に單純で賢いものに思はれた。彼はそれを彼女に言ひさへした。

リーザは吃驚した。

「本當ですこと？」と彼女は言つた、「わたくし宅の小間使のナースチャのやうに、自分の言葉を持つてゐないのだと思つてゐましたのに。彼の女は自分のお婿さんに或る時かう言つたのですわ、貴方はわたしと一緒にゐると、きつと、退屈なさるわ、貴方はわたしに何でも大變いことを仰言つて呉れるけれど、でもわたしには自分の言葉がないんだからつて。」

「有難いことには！」とラヴレツキイは思つた。



するうちに夕方になつた、でマリヤ・ドミトリエヅナは家へ歸りたい旨を述べた。少女達をやつたのことで池から引離して、仕度をさせた。ラヴレツキイは途中までお客達を送つてゆく旨を告げて、馬に鞍を置くやうに命じた。マリヤ・ドミトリエヅナを馬車に坐らせるとき、彼はレンムに氣が附いた、しかし老人はどこにも見當らなかつた。彼は釣りが終ると直ぐ、姿を消して終つたのだつた。アントンが、彼の年にしては珍らしい力で、馬車の戸をボタンと閉ぢて、嚴かに、「やつてくれ！」と叫んだ。馬車は走り出した。後の席にはマリヤ・ドミトリエヅナとリーザが坐つた、前の方は——少女達と召使達だつた。温かい静かな晩になつた、それで窓は兩側とも開け放された。ラヴレツキイは速歩で馬車のそばをリーザの坐つてゐる側を、窓へ片手をかけて、乗つて行つた、——彼はなだらかに走つてゐる馬の頸に手綱を投げかけた——そして時折り若い娘と二た言三言言葉をつがへた。夕焼が消えた、夜になつた、が空氣は一層温かくさへなつた。マリヤ・ドミトリエヅナは直きにウトウトし始めた、少女達も召使も同じやうに睡りに落ちた。早くそしてなだらかに馬車は進んだ、リーザは前方へ身を傾げてゐた、空に登つたばかりの月が彼女の顔に照つてゐた、夜の香はしい微風が彼女の

眼にも頬にも戯れた。彼女は氣持ちがよかつた。彼女の手は馬車の窓わくにラヴレツキイの手と並んでかかつてゐた。そして彼は氣持ちがよかつた、彼は穩かな夜の温か味の中を、善良なうら若い顔から眼を放さずに、何でもない當り前な、善良なことを話してゐる若々しい、囁き聲でもはつきりと響く聲に聞入りながら、駛つてゐた、彼は道の半分を疾うに過ぎたのも氣附かなかつた。彼はマリヤ・ドミトリエヅナを起こしたくなかつた、軽くリーザの手を握つて、そして言つた、「わたし達はもう親友ぢやありませんか、さうでせう？」彼女は諾いた、彼は馬をとどめた。馬車は前へ、靜かに揺れながら、沈みながら、進んで行つた、ラヴレツキイは並足で家の方へ引き返した。夏の夜の蠱惑が彼を擱んだ、周圍の萬物が非常に思ひがけなく不思議で、それでゐて非常に久しい前から、そして非常に懐しい馴染でももあるやうに見えた、近くも遠くも、——眼は大部分見たものを識別する事が出来なかつたとは言へ、遠くが見はるかされた、——すつかり静まりかへつてゐた、若い咲きほこつた生命がこの静けさそのものの中に現れてゐた。ラヴレツキイの馬は、規則正しく左右に揺れながら、元氣よく歩いて行つた、大きな黒い影がそれと並んで歩いた、何か不思議な氣持よいものが馬の蹄の音に、何か樂しげな美妙なものが鶉の甲高い叫び聲の中にあつた。星屑は一脈の明るい煙の中に消えてゐた、満月はしつとりとした光りに輝いてゐた、その光りは青白い流れになつて空一面に擴がり、煙つたやうな金色の班點になつてすぐ側を通つてゆく雲の上にふりかかつた、空氣の新鮮さが眼に輕



い潤ひを滲ませ、やさしく全身を包み、自由な流れになつて胸の中へ流れ込んだ。ラヴレツキイは氣持ちよかつた、そして自分の氣持ちよさを楽しんだ。「さア、わたし達はもつと生きよう、」と彼は思つた、「まだすつかりむしばまれてはゐないのだ……。」彼は誰が、何にか、といふところまでは考へなかつた……。それから彼はリーザのことを、恐らく彼女はパーンシンを愛してはゐないのだといふこと、若し彼が他の状態で彼女に會つたら——その結果はどうなるか解つたものでないといふこと、彼女のところには「自分の」言葉が無いとは言へ、彼女はレンムを理解してゐるといふことを考へ始めた。それだつても本當ではないのだ、彼女は自分の言葉を持つてゐる……。」「そのことを輕々しく仰有らないでくださいまし、」といつた言葉がラヴレツキイに思ひ出された。彼は長いこと頭を垂れて乗つて行つた、それから眞直になつて、靜かに口吟んだ。

して我れは崇めたるもの凡てを焼けり、

焼けるもの凡てを崇めたり……。

が直ぐと馬に鞭を當てて、一と息に家まで駛り返つた。

馬から降りながら、彼はもう一度最後に、思はず善良な微笑を泛べて後を振り返つた。夜、押し黙

つた、愛想よい夜が丘の上にも谷間にも横はつてゐた、遠くから、夜の香はしい深みから、——夜空からか、それとも大地からか、解らないが、——靜かな柔かい温か味が流れて來た。ラヴレツキイは最後の辭儀をリーザに贈つて、階段を駈登つた。

次ぎの日は可成り物憂く暮れた。朝から雨が降つてゐた、レンムは額越しにジロジロ見廻して、増強く唇をひき締めた、まるで彼はどんなことをしてもそれを開かないといふ誓ひでも立てたやうであつた。床に就くとき、ラヴレツキイは一束の佛蘭西の新聞を寢床へ持ち込んだ、それはもう二週間以上も封を切らずに卓子の上に横はつてゐたのだつた。彼は氣が無ささうに包紙を切つては新聞の見出しに眼を走らせたが、そこには、しかし、何も變つたことは無かつた。彼はもうそれを放り出したく思つてゐた——と突然刺されたやうに寢臺から飛び上つた。一つの新聞の小品欄に、既に私達に知られてゐるシニール氏が自分の讀者に「悲しむべき報知」を傳へてゐた、美しい、魅力あるモスクワ婦人、と彼は書いてゐた、——流行の女王の一人、巴里のサロンの裝飾、Madame de Lavretzki (註—ラヴレツキイ夫人) 突然死去す、——而してこの報知は、悲しい哉、餘りにも信すべきものにして、只今彼、シニール氏の許に達したるものなり。彼は——とかう彼は續けてゐた、——故人の知友なりし、と言ひ得べきか……。

ラヴレツキイは着物を着て、庭へ出た、そして朝まで同じ並木道を前に後に歩いてゐた。



次ぎの日の朝、お茶の時に、レンムはラヴレツキイに市街へ歸るために馬車を仕立てて呉れるやうに頼んだ。「わたしは仕事にかからなければなりません、詰まり、課業にです、」と老人が言った、「でないとわたしはここで無駄に時間を空費してゐるに過ぎません。」ラヴレツキイは直ぐとは彼に返事をしなかつた、彼はボンヤリしてゐたらしかつた。「よろしい、」と彼は遂に言った、「わたしも一緒に市街へ行きませう。」——下男の助けを藉らずに、咳拂ひをしながらそして腹を立てながら、レンムは小さな自分の旅行鞆を仕末して、樂譜帳の幾頁かを破つたり焼いたりした。馬車が廻された。書齋から出がけに、ラヴレツキイは昨日の新聞を隠しへ突込んだ。道々、レンムも、ラヴレツキイも、餘り喋らなかつた、どちらも思ひ思ひの考へに耽つてゐた、そしてどちらも相手が自分に邪魔しないのを喜んでゐた。そして彼等はかなり素つけなく、それは、しかし、ロシヤでは屢々友人の間に起こることなのであるが、別れた。ラヴレツキイは老人を家まで送り届けた、當の相手は馬車を降りて、自分の旅行鞆を取上げ、そして自分の友に手を差出さずに、（彼は旅行鞆を兩方の手で胸の前に抱へてゐた）、彼の顔さへも見ないで、——ロシヤ語で、さようなら！——と言つた。「左様なら、」とラヴレ

ツキイも繰返した、そして馭者に自分の借りてゐる住居へ連れて行くやうに命じた。彼は、どういふことがないとも限らないので、〇市に一つの住居を借りてゐたのだつた。手紙を五六通書いて、急いで食事を済ましてから、ラヴレツキイはカリイチン家へ出掛けて行つた。彼はそこでパーンシンが一人客間にゐるのに會つた、相手は彼にマリヤ・ドミトリエヅナが程なく見えるだらうと告げて、そして早速最も悦ばしげな愛想よさを持つて彼と話し始めた。この日までパーンシンはラヴレツキイに——勿體振るどころか、叮嚀に應對してゐた、併しリーザが、パーンシンに自分の昨日の小旅行を話して聞かせながら、ラヴレツキイのことを、立派なそして賢い人として噂した、それだけで充分だつた、この「立派な」人を物にしなければならなかつた。パーンシンはラヴレツキイへのお世辭から、彼の言葉によるとマリヤ・ドミトリエヅナの一家中がワシーリエフスコエの評判をした時の非常な喜びの話から始めた、そしてそれから、いつもの癖で、巧に自分自身の方へ話を持つていつて、自分の仕事に就いて、人生に對する、社交界に對する、勤務に對する自分の見解を語り始めた、——ロシヤの未來について、如何に知事達を監督しなければならぬかといふことについてすこし話した、そこでちよつと自分自身を冷かして、そして、それでも彼は「ベテルブルグで *de populariser l'idie du cadastre*」（註—測地の思想を普及すること）を委任されたのだと附け加へた。投げやりな思ひ上つた態度で凡ゆる難問に解決を與へながら、手品師が球を扱ふやうに、最も重要な行政上や政治上の問題



を弄びながら、彼は可成り長いこと話した。「若しわたしが當局者だったら、斯うしたでせう。」「貴方は、賢い人として、直ぐにわたしに賛成されるでせう、」といったやうな言葉が——彼の舌を離れなかつた。ラヴレツキイは冷やかにパーンシンの饒舌を聞いてゐた、彼にはこの美しい、伶俐な、そしてどこことなく粹な、明るい微笑と、やさしい聲とそれから活々とした眼とをもつた男が氣に入らなかつた。パーンシンは直ぐに、持前の他人の氣持ちを見て取る素早さでもつて、自分の相手に特別の満足と與へてゐないのを悟つた、それで心の中に、ラヴレツキイは、成る程、立派な人かも知れないが、冷淡な、「aigri」(註—氣難し)、「en somme」(註—要するに)すこし滑稽な男だと決めて、いい口實を見つけて逃げ出した。——マリヤ・ドミトリエヅナがゲデオノフスキイを従へて出て來た、それからマルファ・チモフェーエヅナがリーザと連れ立つて來た、その後から残りの家族が現はれた、音楽好きのベレニーツイナといふ、殆ど子供らしい、疲れたやうな美しい顔の、サラサラいふ黒い絹の着物を着て、花模様の扇子を持ち、太い金の腕環をはめた、小柄な、瘦せぎすの婦人も來た、それから彼女の夫の、大きな手足と、白い睫毛とそれから厚ぼつたい唇の上に動かない微笑をもつた、頬の赤い、肥つた男もやつて來た、お客に來ると妻は決して彼と話をしなかつた、が家では、機嫌がいい時には、彼を自分の可愛い仔豚と呼んでゐた、パーンシンも戻つて來た、部屋の中は非常な多人數で、賑やかだつた。ラヴレツキイはかうした多人數があまり氣持ちよくなかつた、殊にしよつちゆう彼の

方へ柄附眼鏡を向けるベレニーツイナ夫人が彼を怒らした。彼はリーザがゐなかつたら、直ぐにも席を蹴つて歸つて了つたであらう、彼は彼女と二人切りですこし話したかつた、しかし彼は長いこといい機會を捉へる事が出来なかつた、で祕かな喜悅をもつて彼女を眼で追ふことだけで満足した、これまで一度も彼女の顔はこんなにも氣高く美しく見えたことはなかつた。彼女がベレニーツイナ夫人の近くにゐるので一層引き立つて見えた。夫人は絶えず椅子の上で身體を動かしたり、自分の狭い肩をすぼめて見たり、嫌らしく笑つたり、さうかと思ふと眼を細くして、それから不意に大きく眼を開けたりした。リーザは溫和しく坐つてゐた、まつすぐ前を見て少しも笑はなかつた。女主人はマルファ・チモフェーエヅナと、ベレニーツイン夫妻と、それからゲデオノフスキイとカルタを始めた、彼は非常にゆつくり札を出して、しよつちゆう間違へては、眼を屢叩いたり、ハンケチでもつてやけに顔を拭いたりした。パーンシンは憂鬱な様子をしてゐた、短く、意味深く、悲しげに話した、——認められない藝術家をつくりだつた、——でも、ひどく彼に取り入らうとしてゐるベレニーツイナ夫人の願ひに拘らず、どうしても自分のロマンスを歌はうとはしなかつた、ラヴレツキイが邪魔になつた。フォードル・イワーヌイチもあまり喋らなかつた、彼の顔の特殊の表情が、部屋へ入つてくると直ぐ、リーザを驚かした、彼女は直ぐに彼が何か彼女に傳へることを持つてゐるに相違ないのを感じた、併し、自分でも何故か解らず、彼に訊くことを恐れた。遂に、茶を入りに廣間の方に行かうとして、彼



女は思はず彼の方へ頭をふり向けた。彼はつと立つて彼女の後に蹤いていつた。

「どう遊ばして？」と彼女は、急須をサモワールの上に置きながら、言つた。

「ぢや貴女は何か氣附かれたのですか？」と彼は言つた。

「貴方は今日、これまでわたくしが知つてゐた貴方とは違ひますわ。」

ラヴレツキイは卓子の上に身をこごめた。

「わたしは、」と彼は始めた、「貴女に或る知らせをお傳へしたかつたのです、しかし今日は出来ませぬ。——ですが、これを、この小品の鉛筆で印をつけた所を読んで下さい、」と彼は持つて来た新聞を渡しながら、附け加へて言つた。「内緒にして置いてください、わたしは明朝お寄りします。」

リーザは吃驚した。パーンシンが戸口のところに現れた、彼女は新聞を自分の隠しに納めた。

「貴女はオーベルマンをお讀みになりましたか、リザウエータ・ミハイロヴナ？」と考へ深くパーンシンが彼女に訊いた。

リーザはいい加減な返事をした、そして廣間から二階へ上つて行つた。ラヴレツキイは客間へ戻つた、そしてカルタ臺に近付いた。マルファ・チモフェーエヴナが、頭巾のリボンをすつかり解いて、顔を眞赤にして、自分のパートナアのゲデオノフスキイが、彼女の言葉によると、取りやうを知らぬのを彼に訴へ始めた。

「どうもカルタをするのは、」と彼女が言つた、「ありもしない事を喋るのとは違ふと見えるよ。」相手は眼を屢叩き、顔を擦り續けた。リーザが客間へ這入つて来て、隅のところに坐つた、ラヴレツキイは彼女の顔を見た、彼女も彼の顔を見た、——そして二人とも殆ど恐ろしくなつた。彼は彼女の顔に疑ひと一種のひそかな譴責とを讀んだ。彼女と口を利くことは、どんなに彼が望んでも、出来なかつた、彼女と一つ部屋に、他の客達の間に客として留まることは——苦しかつた、彼は歸らうと決心した。彼女に別れを告げながら、彼はそれでも明日お訪ねする旨を繰返すことが出来た、そして附け加へて、彼女の友情に期待してゐると言つた。

「お訪ねくださいませ、」と同じやうな疑惑の色を顔に泛べて彼女は言つた。

パーンシンはラヴレツキイが立去ると活氣づいた、彼はゲデオノフスキイに助言を與へ始めた、面白さうにベレニーツイナ夫人に愛嬌を振撒いて、そして到頭、自分のロマンスを歌つて聞かせた。しかしリーザとは彼は前のやうに話をし、前のやうに彼女を眺めた、意味ありげに、幾らか悲しげに。しかし、ラヴレツキイは再び一晚中眠らなかつた。彼は悲しくはなかつた、彼は亢奮してゐなかつた、彼は落着き切つてゐた、けれども彼は眠れなかつた。彼は過ぎ去つた時代を思ひ出しさへしなかつた、彼は單に自分の生活を見詰めてゐた、彼の心臓は重々しくなだらかに鼓動してゐた。時は飛ぶやうに過ぎて行つた、併しかれば睡眠を考へることもしなかつた。時々彼の頭に、「さうだ、これは眞實で



ない、すべてこれはくだらぬことだ、」といった思想が浮んで来るだけであつた、——それから彼は立ちどまつて、頂垂れて、そして再び自分の生活に眺め入つた。

## 二九

マリヤ・ドミトリエヴナはラヴレツキイを、彼が彼女のところへ次ぎの日曜日に顔を見せた時、あまり愛想よくは迎へなかつた。「厚かましいねえ、」と彼女は思つた。彼自身が彼女にはあまり氣に入られてゐなかつた、それに彼女を掌の中に丸め込んでゐるパーンシンが、ひどく嘘らしくその場限りに彼を前の晩に讚めたので、彼女は彼をお客とは考へてゐず、殆ど家の人のやうな親戚を別にもてなす必要もないと思つてゐた、で半時間も過ぎないうちに、彼はもうリーザと庭園の並木道を歩いてゐた。レーノチカとシュエロチカが彼等と二三歩離れて花壇の中を走り廻つてゐた。

リーザはいつものやうに落着いてゐた、しかし何時もよりも蒼ざめてゐた。彼女は隠しから出してラヴレツキイに細かく折疊んだ新聞を差出した。

「恐ろしいことですわ！」

ラヴレツキイは何とも答へなかつた。

「でもこれはまだ本當ではないかも知れません、」とリーザは附け加へた。

「ですからわたしは誰にもこのことを話さないやうに願ひしたのです。」

「リーザは暫く歩いた。」

「ねえ、」と彼女は始めた、「貴方は悲しんではいらつしやいませんの？　ちつとも？」

「わたしは自分でもわたしが何を感じてゐるのか解らないのです、」とラヴレツキイは答へた。

「でも貴方は以前にあの方を愛してゐらつたのではありませんか？」

「愛してゐました。」

「非常に？」

「非常に。」

「それであの方が亡くなつても悲しんではいらつしやらないのですの？」

「彼の女がわたしに取つて死んで了つたのは今ではありません。」

「いけません、貴方は何を仰有るのです……。御免あそばせ。貴方はわたくしを自分の親友だつてお呼びになりましたわ、親友は何でも言ふことが出来ますわ。わたくし、本當に、恐ろしい氣がいたします……。昨日貴方は非常によくない顔をなすつていらつしやいました……。この間、貴方があの方のことを悪く仰有つたのを、憶えていらつしやいます？——ところがあの方は、あの時分もう、この



世にゐられなかつたのかも知れません。それは恐ろしいことですわ。きつとそれは貴方へ罰として遣はされたのです。」

ラヴレツキイは痛ましく苦笑した。

「貴女はさう思ひますか？　少くとも、わたしはいま自由です。」

リーザは微かに震へた。

「およし遊ばせ、そんなに仰有るものではありません。貴方の自由が貴方に何になりました？　貴方が今お考へにならなければならぬことはそのことではありませんわ、許しですわ……」

「わたしはずつと前に彼女を許しまし、」とラヴレツキイは遮つた、そして手を振つた。

「いいえ、さうぢやありませんの、」とリーザは押戻した、そして赧くなつた。「貴方はわたくしの申した意味がお解りにならなかつたのですわ。貴方は貴方が許されるやうになさなければなりませんわ……」

「誰がわたしを許すのです？」

「誰つて？——神さまですわ。神さまのほか誰が貴方を許すことが出来ませう？」

ラヴレツキイは彼女の手を執つた。

「ああ、リザウェータ・ミハイロヴナ、わたしを信じてください。」と彼は叫んだ、「わたしはこれだ

けでも充分罰せられたのです。わたしはもうすべてを償ひました、信じてください。」

「それを貴方は知ること出来ませんわ、」と彼女は低い聲で言つた、「貴女はお忘れになりました、

——ついこの間、貴方がわたくしにお話なすつた時、——貴方はあの方を許さうとはなさいませんでしたわ……」

二人は黙つて並木道を通りぬけた。

「それで貴方のお子さんはどう遊ばして？」と不意にリーザが訊いた、そして立ちどまつた。

ラヴレツキイは震へた。

「おお、御心配くださるな！　わたしはもうすつかりそれぞれの所へ手紙をやりました。わたしの娘の未来は、貴女があれを……貴女の仰有る……心配ありません。御安心ください。」

リーザは悲しげに微笑した。

「しかし貴女は正しいのです、」とラヴレツキイは續けた、「わたしはわたしの自由をどうすることが出来ます？　それがわたしに何になりますか？」

「何時この新聞をお受取りになりましたか？」とリーザが、彼の問ひには答へないで、言つた。

「貴女がお訪ねくだすつた日の翌日です。」

「そして……貴方はお泣きにもなりませんでしたか？」



「いいえ。わたしは驚かされました、併しどうして涙なぞ出るでせう？ 過ぎて了つたものを嘆く、——しかもそれはわたしのところでは跡方もなく燃えつきて了つてゐるではありませんか……。彼女あねの行爲そのものはわたしの幸福を破壊しませんでした、全然そんなものがなかつたことをわたしに證明して呉れたに過ぎません。その場合何を泣けるでせう？ しかし、誰が知るでせう？——わたしは、多分、もつと悲しんだでせう、若しこの報知をわたしが二週間前に受取つたら……」

「二週間前に？」とリーザは押戻すやうに言つた。「何がこの二週間のうちに起こりまして？」

ラヴレツキイは何とも答へなかつた、がリーザは突然前よりも尙一層赧くなつた。

「さうです、さうです、貴女はお解りになつたのです、」と不意にラヴレツキイが言ひ出した、「この二週間にわたしは純潔な女の心が何を意味するかを知つたのです、そしてわたしの過去が一層わたしから遠のいたのです。」

リーザはどぎまぎした、そつと花壇の方へレーノチカとシューロチカの方へ歩み寄つた。

「しかしわたしは貴方にこの新聞をお見せしただけで充分です、」とラヴレツキイは彼女の後から歩みながら言つた、「わたしはもう何も貴女に隠し立てをしないことに馴れました、で貴女も同じやうにわたしを信じてくださることを望みます。」

「さう思召す？」とリーザが言つた、そして歩みをとめた。「さうでしたらわたくしもさうしなければ

ば……アラ、いけませんわ！ それは出来ませんわ。」

「何ですか？ 仰有つてください、仰有つてください。」

「本當に、わたくし、いけないと思ふんですけれど……。でも、しかし、」とリーザは付け加へて言つた、そして微笑を泛べてラヴレツキイの方をふり返つた、「半分打明けるなんて何ていふ事でせう？ ねえ？ わたくし今日手紙を貰ひましたの。」

「パーンシンから？」

「ええ、さうですの……。どうして御存知？」

「結婚の申込みでせう？」

「ええ、」とリーザが言つた、そしてちつと眞面目にラヴレツキイの眼を見詰めた。

ラヴレツキイも、眞面目にリーザの顔を見かへした。

「それで、どう返事をなすつたのです？」と彼は遂に言つた。

「わたくし何とお返事したらいいか解らないんですの、」とリーザが言つた、そして組合せた手をほどいた。

「どうして？ 貴女はあの人を愛してゐるぢやありませんか？」

「ええ、わたくしあの方が好きで御座いますわ、あの方は、多分、いい方ですわ……」



「貴女はそれと同じことを同じ言葉で三日前にわたしに仰有つたですよ。わたしは貴女が強い、激しい、わたし達が戀と呼び馴れてゐる感情を持つて愛してゐられるかどうかを知りたいのです。」

「貴方の仰有るやうな意味では、——さうぢやありませんわ。」

「貴女はあの人を戀してはゐないのですか？」

「ええ、でもそれは必要でせうか？」

「どうしてです！」

「お母さまはあの方を好いてゐますの。」とリーザは續けた、「あの方はいい方です、わたくしあの方に何も不足はありません。」

「でも、貴女は迷つていらつしやる？」

「ええ……それから、多分、——貴方が、貴方の仰有つたことが原因になつてゐるかも知れませんわ。——昨日仰有つたことを憶えてゐらつしやる？　でも弱いからですわ……」

「おお、吾が子よ！」と突然ラヴレツキイは叫んだ、——そして彼の聲は震へた、「詭辯を弄してはなりません、愛なしに身を任せることを欲しない貴女の心の叫びを弱さと名付けてはいけません。貴女が愛してをらない、而もその人のものとならうとしてゐる人に對して、そんな恐ろしい責任を引受けてはなりません……」

「わたくしお言葉に従ひます、わたくし何も自分に引受けません、」とリーザは言はうとした……

「貴女のお心におききなさい、そのみが貴女に眞實を語るでせう、」とラヴレツキイは彼女を遮つた……。「経験、判断——すべてそれは無です、空です！　自分から最もいい、唯一の地上の幸福を奪つてはなりません。」

「貴方がそれを仰有るのですか、フォードル・イワーヌイチ？　貴方御自身が愛の結婚をなすつたのです——そして貴方は、貴方は幸福で御座いましたこと？」

ラヴレツキイはパンと兩手を打つた。

「ああ、わたしのことは言はないでください！　貴女は若い、無經驗な、醜惡な教育を受けた男がどんなものを愛と思ひ込むことが出来たか理解することさへ出来ません！……それに、最後に、何の爲めに自分を誣ひることがありますう？　今貴女に、わたしは幸福を知らなかつたと言ひました……いいえ！　わたしは幸福でした！」

「わたくし思ひますの、フォードル・イワーヌイチ、」と聲を低めて、リーザが言つた（彼女は自分の話相手と一致しない時には何時も聲を落した、その上彼女は大きな心の動搖を感じてゐた）。「地上の幸福はあたし達によるものではないと……」

「わたし達によるのです、わたし達によるのです、わたしを信じて下さい（彼は彼女の兩手を執つた、



リーザは眞青になつた、そして殆ど驚愕をもつて、しかし注意深く彼の顔を見据ゑた、——わたし達が自分でもつて自分の生活を破壊しきへしななければ。或る人々にとつては愛の結婚は不幸であり得ます、併し決して貴女の穩かな性情、貴女その明るい心を持つてゐる貴女にとつてではありません！ 貴女に願ひします、愛なしに、義務とか、犠牲とかいふやうな感情で結婚なさるな。わたしを信じなさい、——わたしは貴女にそれを言ふ権利があります、わたしはその権利の爲に高い値を拂ひました。ですから若し貴女の神が……」

丁度この瞬間にラヴレツキイは、レーノチカとシュエーロチカがリーザの傍に立つて、無言の驚愕をもつて彼を見守つてゐるのに氣づいた。彼はリーザの手を放した、急いで言つた、わたしを許してください、どうぞ、——さう言つて家の方へ引きかへした。

「只一つわたしは貴女に願ひして置きます、」と彼はリーザの方へ戻つて言つた、「直ぐに決めて了はないで、わたしが貴女に申したことをお考へください。若し貴女がわたしを信じてくださらないでも、若し貴女が打算による結婚を決心されても、——その場合にも貴女はパーンシン君のところへ嫁ぐべきではありません、あの人は貴女の良人たることは出来ません……。よろしい、貴女はわたしに急がないことを約束なさいませぬ？」

リーザはラヴレツキイに返事をしようと思つた、しかし一言も言へなかつた、——それは彼女が

「急ぐ」ことを決心したからではなくつて、彼女の心臓があまりにも激しく鼓動して、恐怖に似た感情が息をつかせなかつたからであつた。

### 三〇

カリイチン家からの歸りがけに、ラヴレツキイはパーンシンに會つた、彼等は冷やかに頭をさげ合つた。ラヴレツキイは自分の住居へ戻つた、そして一室に閉ぢこもつた。彼は恐らく一度も経験したことが無かつたと思はれる氣持ちを感じてゐた。彼が「穩かな忘我」の状態にあつたのはずっと昔のことだつたらうか？ 自分自身を、彼が言ひ現したやうに、河の底にあるものと感じたのはずっと昔のことだつたらうか？ 何が彼の状態を變へさせたのであるか？ 何が彼を外へ、表面へ押出したのであるか？ 最も平凡な、常に豫想外な偶然でありながら、避けることの出来ない——死か？ さうだ、併し彼は妻の死を、従つて自分の自由を考へるよりも、パーンシンにリーザがどういふ返事をするかといふことの方をより多く考へてゐた。彼はこの最近三日間に彼女を別な眼で見るやうになつたのを感じた、彼は、家へ歸りながら、そして夜の静けさの中で彼女のことを思ひながら、自分自身に「若しも……」と言つたのを思ひ出した。過ぎ去つて了つたもの、不可能なものと思つてゐたこの



「若しも……」が、假令それが彼の思つてゐた通りにはなかつたとしても、本當になつたのだ、——しかし彼の自由だけでは足らなかつた、「彼女は母親のいふことをきくだらう」と彼は思つた、彼女はパーンシンのもとへ嫁ぐだらう、だが萬一彼女が彼を拒絶したとさへしても、——わたしにとつては同じ事ぢやないか？」鏡の前を通るとき、彼はチラと自分の顔を覗き込んだ、そして肩をすぼめた。

その日はかうした物思ひのうちに非常に早く過ぎた、晩になつた。ラヴレツキイはカリーチン家へ出掛けた。彼は急いで歩いた、しかし家の見える所まで來ると、彼はゆつくりした足どりでそれに近付いた。階段の前ところにパーンシンの馬車がとまつてゐた。「さア」とラヴレツキイは思つた、「エゴイストになつてはいけないぞ。」そして家へ這入つた。家では彼は誰にも會はなかつた、客間もひっそりしてゐた、彼は扉を開けた、そしてパーンシンとピケートをやつてゐるマリヤ・ドミトリエヅナを見出した。パーンシンは黙つて彼にお辭儀をした、が女主人は「思ひがけない！」と叫んで、微かに眉を曇らした。ラヴレツキイは彼女の近くへ坐つた、そして彼女の手札を眺め始めた。「貴方ピケート御存知？」と彼女は一種の隠された不満をもつて彼に訊いた、そして直ぐと、もうお仕舞、と言つた。

パーンシンは九十を數へた、そして慇懃に、落着いて死札を取り始めた、尤もらしい眞面目くさつ

た顔をして。かういふ風に外交官といふものはカルタを取るものに相違ない、きつと、かういふ風に彼もペテルブルグで自分の確かりものであることを知つて貰ひたいと思ふどんなかの有力な大官とカルタを取つたことだらう。「百一、百二、ハート、百三」と規則正しく彼の聲が響いた、そしてラヴレツキイはそれがどう響いてゐるのか、非難かそれとも自惚か、理解することが出来なかつた。

「マルファ・チモフェーエヅナにお目にかかれるでせうか？」と彼は、パーンシンが尙一層鹿爪らしく札を撒き始めたのを見て、訊いた。彼の中にはもう藝術家らしい所は影もなかつた。

「いいでせうと思ひます。二階の、お部屋です」とマリヤ・ドミトリエヅナが答へた、「行つて御覽なさいまし。」

ラヴレツキイは二階へ上つて行つた。マルファ・チモフェーエヅナもカルタをしてゐた、彼女はナスターシャ・カルポヅナとドラチキーをやつてゐた。ロースカが彼に吠えた、しかし二人の老婆は愛想よく彼を迎へた、殊にマルファ・チモフェーエヅナは上機嫌だつた。

「ああ！ フェーヂャ！ よくおいで、」と彼女は言つた、「さア、掛けておくれ。直きお仕舞にするからね。ジャムを喰べるかい？ シューロチカや、苺のはいつた壘を出してやつておくれ。いらない？ ぢや、さうしてぢつと坐つておいで、だけど煙草は——喫つちやいけないよ、わたしやお前さんのやうな煙草吸ひは我慢が出来ないからね、それにマトロースが唾をするからね。」



ラヴレツキイは急いすこしも煙草を吸ひたいとは思はないと言つた。  
 「階下にゐたのかい？」と老婆は續けた、「あすこで誰にお會ひだつたえ？ パーンシンが相變らず  
 ゐるのかい？ リーザに會つたかい？ 會はない？ あれはここへ來たいと言つてゐたが……。ホラ、  
 あの子だよ、噂をすれば影とやら。」  
 リーザが部屋へ這入つて來た、そしてラヴレツキイを見て、さつと顔を赧くした。  
 「ちよつとお邪魔さして頂きますわ、マルファ・チモフェーエヅナ」と彼女は言ひかけた……。  
 「何故ちよつとさ？」と老婆は遮つた、「どうしてお前達はみんな、若い娘つてものは、そんなに落  
 着かないんだらうね？ 御覽、わたしの所にはお客があるのだよ、この人と話をしておやり、お取持  
 ちをしておくれ。」

リーザは椅子の端しにそつと腰を下した、ラヴレツキイの方へ眼を上げた——そしてパーンシンと  
 彼女の會見がどう終つたかをどうしても彼に知らせなければならぬことを感じた。けれどもそれは  
 どうしたらいいだらう？ 彼女は羞づかしくもあれば、工合悪くもあつた。彼女は彼と、教會へもろ  
 く顔を出さない、その上妻の死に對してすらあんなにも平氣であるこの男と、久しい間の馴染だら  
 うか、——しかし彼女はもう、自分の祕密までも彼に打明けてゐる……。成る程、彼は彼女に温かい  
 同情をよせてゐる、彼女自身彼を信じ、彼に心を惹かれるのを感じてもゐる、でも矢張り彼女は羞づ  
 かしかつた、丁度自分の清い娘らしい部屋へ知らない人に這入られたやうに。

マルファ・チモフェーエヅナが助けに來てくれた。

「お前がお取持ちして呉れないで。」と彼女が言つた、「誰があれを、可哀想に、見てやるのさ？ わ  
 たしやあれにはあんまり年をとり過ぎてゐるし、あれはわたしにや賢すぎる、ところがナスターシ  
 ヤ・カルボヅナにはあれはあんまり年をとり過ぎてゐます、この女ひとはなんでも若い男でなくちやいけ  
 ないんだから。」

「わたくしどうしてフョードル・イワーヌイチをおもてなししたらいいでせう？」とリーザが言つた、  
 「お望みなら、わたくしピアノを弾きませうか、」と曖昧に附け加へた。

「結構だとも、お前は伶俐ものだね」とマルファ・チモフェーエヅナが押戻すやうに言つた。「それ  
 では、お前達、階下へおいで、濟んだら又おいでよ、わたしは馬鹿な目に會はされたんだから、口惜  
 しくつて、取り返したいんだよ。」

リーザは立上つた。ラヴレツキイは彼女の後に従つた。階段を降りながら、リーザはちよつと立ち  
 どまつた。

「本當に、」と彼女は始めた、「人間の心は矛盾だらけですのね。貴方の例はわたくしを驚かさなけれ  
 ばならないし、わたくしに愛の結婚を疑はせなければならぬ筈ですわ、それなのにわたくし……」



「貴女は拒られたのですか？」とラヴレツキイが遮つた。

「いいえ、でも承諾もしませんでしたの。わたくしあの方に何も彼も、わたくしの感じたことをみんな申しましたの、そしてあの方に待つて下さるやうに願ひしたんですの。よろしく御座いますして？」と彼女はちらと微笑を泛べて附け加へた、——そして軽く欄干に手をかけながら、階段を駆けおりた。

「何を弾きませうか？」と彼女はピアノの蓋を開けながら訊いた。

「好きなものを、」とラヴレツキイが答へた、そして彼女の顔を見ることが出来るやうに坐つた。

リーザは弾き出した、そして長いこと自分の指から眼を放さなかつた。彼女は、やがて、ラヴレツキイの方をちらと眺めた、そして弾くのを止した、彼女には彼の顔が非常にをかしく不思議に思はれた。

「どう遊ばして？」と彼女が訊いた。

「何でもありません、」と彼は押戻すやうに言つた、「わたしは大變愉快です、わたしは嬉しいのです、貴女を見てゐると嬉しくなるのです、——續けてください。」

「わたくしかう思ひますの、」とリーザが暫くして言つた、「若しあの方がわたくしを愛していらつしやるなら、あの御手紙は下さらなかつたでせう、あの方はわたくしが今何とも御答へ出来ないのをお感じにならない筈ですわ。」

「それは重要なことぢやありません、」とラヴレツキイが言つた、「重要なのは貴女があの人を愛してゐないことです。」

「およし遊ばせよ、何といふ話でせう！ わたくしもう始終あなたの亡くなられた奥さまが眼に見えらるやうですの、貴方が可怖い氣がします。」

「ワルデマールさん、うちのリゼータが何んで上手に弾いてゐるでせう？」とその時マリヤ・ドミトリエヴナがパーンシンに言つた。

「さうです。」とパーンシンは答へた、「非常にお上手です。」

マリヤ・ドミトリエヴナは優しく自分の若いパートナアを眺めた、併し相手は尙一層勿體ぶつた鹿爪らしい顔で、キングの十四と言つた。

ラヴレツキイは青年ではなかつた、彼はリーザによつて喚び起こされた感情に關して長く自分を欺いてゐることは出来なかつた、彼は完全にその日の中に彼女を愛してゐることを確信した。この確信は多くの喜びを彼に齎さなかつた。「果して、」と彼は思つた、「三十五にもなつて、再び自分の心を



女の手に渡す以外に、わたしは何も出来ないのだらうか？ 併しリーザはあれとは違ふ、彼女はわたしから差すべき犠牲を要求しないだらう、彼女はわたしからわたしの仕事を取上げないだらう、彼女自身がわたしを正しい、眞面目な仕事に勵まして呉れるだらう、そしてわたし達は二人で前方へ、美しい目的に向つて進むだらう。さうだ、と彼は自分の黙想を結んだ、「凡てこれはいい、だが悪いのは彼女が決してわたしと一緒に行くことを欲しないことだ。彼女がわたしに、わたしが可怕的氣がすると言つたのも偶然ではないのだ。その代りパーンシンをも彼女は愛してゐない……。心細い慰めだ！」

ラヴレツキイはワシリーエフスコエへ歸つた、しかし四日とそこに落着いてゐられなかつた、——非常に退屈した。同様に或る種の期待も彼を疲らした、シュール氏によつて傳へられた報道は確められなければならなかつた、が彼はどこからも手紙を受取らなかつた。彼は市街へとつて返した、そしてカリーチン家で夜を過ごした。彼はマリヤ・ドミトリエヴナが彼に好感を持つてゐないのを容易に見て取つた、しかし彼は、ピケートで十五留負けてやつて、御機嫌を取り結ぶことに成功した、——そして彼は半時間ばかり殆どリーザと二人きりで過ごした、尤も母親は彼女に昨晚のうちに“*qui a un si grand ridicule*” (註—非常にをかきな) 男とあまり親しくしないやうに忠告したのであつたが。彼は彼女の中に變化の起つたのを感じた、彼女は何か一層考へ深くなつたやうであつた、彼の訪ねて行かなかつたのを責めた、そして彼に——明日彌撒へ行かないかどうかと訊いた、

(明日は日曜日だつた)。

「おいで遊ばせよ、」と彼女は彼がまだ返事をしない先に言つた、「御一緒にあの方の爲めにお祈りいたしませう、」それから彼女は、どうしたらいいか解らない、——パーンシンにこれ以上彼女の決心を待つて貰ふ権利があるかどうか解らないと付け加へた。

「何故です？」とラヴレツキイが訊いた。

「それは、」と彼女が言つた、「わたくし今ではもうこの決心がどんなものになるのか疑はしくなり始めたからですの。」

彼女は頭が痛いからと言つて、そして曖昧にラヴレツキイの方へ指先だけを差し出して、二階の自分の部屋へ立去つた。

翌る日ラヴレツキイは彌撒へ出かけた。リーザは彼が着いた時にはもう會堂へ入つてゐた。彼女は彼の方を振り返りはしなかつたが、彼に氣附いた。彼女は熱心に祈つてゐた、彼女の眼は靜かに輝き、彼女の頭は靜かに上下した。彼は彼女が彼の爲めにも祈つてゐて呉れるのを感じた、——そして限りない感動が彼の心を一杯にした。彼は愉快でもあれば、すこし恥かしくもあつた。行儀よく立つてゐる會集、大きな顔、合唱の聲、乳香の匂ひ、窓々から差してゐる斜の長い光線、壁と圓天井の黒



い聞——すべてが彼の心に語つた。長いこと彼は教會を訪れたことがなかつた、長いこと神に向はなかつた、今も彼はどんな祈りの言葉も發しなかつた、——彼は黙禱すらしなかつた、——がホンの一瞬間であつたとは言へ、身體でこそなくとも、全精神を傾けてひれ伏し、素直に地面に額突いた。子供の時分に彼はいつも會堂で自分の額に誰かの爽かな接觸を感じるまで祈つたことが思ひ出された、彼はそれをその時分、守護の天使がわたしを受け入れて呉れて、わたしに選びの印を押してくださいさるのだと思つてゐた……。彼はリーザの方を望み見た。「お前がわたしをこゝへ連れて來たのだ、」と彼は思つた、「わたしに觸つておくれ、わたしの心に觸つておくれ。」彼女は同じやうに靜かに祈つてゐた、彼女の顔は彼に悦ばしげに見えた、そして彼は再び感動した、彼はもう一つの靈のために——平安を、自分のそれには——赦しを乞うた……。

彼等は會堂の入口のところであつた、彼女は悦ばしげな愛想よい重々しさで彼に挨拶した。太陽は明るく會堂の廣庭の若草や、女達の色とりどりの着物や頭巾を照らした、近所の會堂の鐘が高い所で鳴つてゐた、雀が垣根のところを囀つてゐた。ラブレッキイは帽子を被らずに立つたまま、頬笑んでゐた、微風が彼の髪とリーザの帽子のリボンの端を吹き上げた。彼はリーザとそれから彼女と一緒に來たレーノチカを馬車に乗せた、持つてゐた金を全部乞食達に分けてやつて、それから靜かに家の方へ歩き出した。

フョードル・イワノイチにとつて苦しい日が續いた。彼は絶え間のない瘡の状態にあつた。毎朝彼は郵便を受取りに行つては、どきどきしながら手紙や新聞の封を切つた——しかもどこにも何も、致命的な噂を確めるか打ち消すか出来るやうなものを發見しなかつた。時々彼は自分に愛想がつきた、「俺は何といふことだらう、」と彼は思つた、「大鴉が血を待つてゐるやうに、妻の死の確かな報せを待つてゐる！」カリチン家へは毎日出掛けた、併しそこでも彼は樂でなかつた、女主人は露骨に彼に膨れ面を見せ、お情で彼の訪問を受けてゐた、パーンシンはいやに叮嚀に應對した、レンムは厭人主義を發揮して、彼にはお辭儀もしなかつた、——がそれよりも、リーザが何となく彼を避けるやうにしてゐることである。彼女は彼と二人きりになるやうなことがあると、彼女のうちには、以前の信頼の代りに、困惑が現れた、彼女は彼に何を言つたらいいのか解らなかつた、そして彼自身も當惑を感じた。リーザは數日のうちに、彼が知つてゐた彼女とは別のものになつてしまつた、彼女の動作にも、聲にも、笑ひにも隠された危惧が、以前には無かつた心の亂れが認められた。マリヤ・ドミトリエヴナは、生へ抜きのエゴイストとして、何も氣附かなかつた、しかしマルファ・チモフェーエヴナ



は自分の氣に入り娘をひそかに注意するやうになつた。ラヴレッキイは一度ならず彼が受取つた新聞をリーザに見せたこと責めた、彼は彼の心理状態の中に何か純潔な感情にとつて不穩なものあるのを認めない譯にはいかなかつた。彼はまたリーザの變化が彼女の内心の苦闘から、パーンシンにどう返事をしたらいいかといふ彼女の迷ひから、來てゐるのだとも考へた。或る日彼女はわざわざ彼から借りた、ウォルター・スコットの小説を持つて來て返した。

「お濟みになつたんですか？」と彼は言つた。

「いいえ、わたくし今本どころぢやありませんの、」と彼女は答へた、そして立ち去らうとした。

「一寸お待ちください、わたし達は隨分長いこと二人だけで話をしませんでした。——貴女はまるでわたしを恐れてゐるやうです。」

「ええ。」

「何故ですか、失禮ですが？」

「知りませんわ。」

ラヴレッキイはちよつと黙つた。

「それで、」と彼は始めた、「貴女はまだお決めになりませんか？」

「どういふことで御座いますの？」と彼女は眼を伏せたままと言つた。

「解つてゐるぢやありませんか……」

リーザは急にカツとなつた。

「何もわたくしに訊かないで下さいまし、」と彼女は激して言つた、「わたくし何も存じません、わたくし自分で自分が解らないので御座います。」さう言つて彼女は直ぐと向うへ行つてしまつた。

次ぎの日、ラヴレッキイは晝食の後にカリーチン家に行つた、そして彼等のところでしたつかり通夜の禮拜式の仕度が出來てゐるのに出會つた。食堂の片隅の、綺麗な卓布に覆はれた四角なテーブルの上には、既に壁のところへ立てかけられた、圓光へ小さな鈍い光の金剛石を鑲めた金の橡飾りをした、あまり大きくない聖像が幾つか並べてあつた。灰色の燕尾服を着て半靴を穿いた年をとつた下男が、ゆつくり靴の踵をゴトゴトいはせないで、ずうつと部屋に這入つて來て、細い燭臺に挿した二本の蠟燭を聖像の前に立てた、十字を切つて、お辭儀をして、そして靜かに出て行つた。燈火のついてゐない客間の方はガランとしてゐた。ラヴレッキイは食堂の中を歩いて、誰の名付け日かと訊いた。さうぢやありません、リザウエータ・ミハイロヴナさまとマルファ・チモフェーエヴナさまの御希望で通夜の禮拜式が行はれるので、あらたかなお像を招じたのだけど、そのお像は三十露里離れた病人のところへ行かれたのだと小聲で答へた。間もなく番僧達と一緒に坊さんも着いた、大きな禿のあるもう若くない人で、玄關で大きな咳拂をした、婦人たちは直ぐさま列をなして書齋を出



て、祝福を受けるために彼のところへ近付いた、ラヴレツキイは黙つて彼女達にお辭儀をした、彼女達も彼に黙つてお辭儀をした。坊さんは暫く立つてゐた、もう一度咳拂ひをして、そして低い聲で尋ねた。

「始めませうかな？」

「お始め下さいませ、」とマリヤ・ドミトリエヅナが言った。

彼は法衣を着はじめた、法衣を着た一人の番僧が炭火を呉れるやうに慇懃に頼んだ、乳香の匂ひが漂ひ始めた。玄關から召使達や下男達が出て来て、一塊りになつて戸口のところに佇んだ。二階から降りたことのないロースカが、突然食堂に現れた、それを追ひ出し始めた——犬は吃驚して、ぐるぐる廻つて、そして坐つてしまつた、給仕人がそれを捉へて持つて行つた。通夜の禮拜式が始まつた。ラヴレツキイは隅つこに小さくなつてゐた、彼の氣持ちは奇怪で、殆ど物悲しかつた、彼自身何を彼が感じてゐるかよく解らなかつた。マリヤ・ドミトリエヅナは誰よりも前に、肱椅子の前のところ立つてゐた、彼女はいい加減に、奥さま風に、氣取つて十字を切つた——よそ見をしたり、さうかと思ふと眉を高く上げたりした、彼女は退屈してゐた。マルファ・チモフェーエヅナは氣づかはしきやうな様子をしてゐた、ナスターシヤ・カルポヅナは跪いて禮拜した、そして慎ましやかな柔かい音を立てて立ち上つた、リーザは立つたきり、ぢつと動かなかつた、身動きもしなかつた、彼女の顔の嚴肅

な表情によつて、彼女が熱心に熱烈に祈禱してゐることが解つた。通夜の禮拜式が終つた後で十字架に接吻する時、彼女は坊さんの大きな赤い手をも接吻した。マリヤ・ドミトリエヅナは彼をお茶に招待した、彼は司祭の法衣を脱いで、多少俗人らしくなつて、貴婦人達と一緒に客間の方へ移つた。大して活氣のない話が始まつた。坊さんは四杯お茶を飲んだ、絶えずハンケチで自分の禿頭を拭きながら、商人のアウォシニコフが會堂の圓屋根を鍍金するために七百ルーブル寄進したといつたやうなことを話した、それから雀斑の確實な療法を教へた。ラヴレツキイはリーザの隣へ坐らうとした。併し彼女は嚴肅な、殆ど素つけない様子をして、一度も彼の方を見なかつた。彼女は故意と彼に氣附かない風をしてゐるらしかつた、一種の冷やかな、重々しい緊張が彼女の上にあつた。ラヴレツキイは何故か微笑して、何か面白いことを言つてやりたくてならなかつた、しかし彼の心の中には困惑があつた、で彼は、遂に、ひそかに思ひ惑ひながら、立ち去つた……。彼は彼の洞察し得ない何物かがリーザのうちにあるのを感じた。

何時だつたかラヴレツキイは、客間に坐つて、巧なしかし重苦しいゲデオノフスキイのお喋りを聞いてゐながら、不圖、自分でも何故か解らずに、後をふり返つた、そしてぢつと注意深い、物問ひたげなリーザの眼差しを捉へた……。それは、この不思議な眼差しはぢつと彼の上に注がれてゐた。ラヴレツキイはその後一晩中それについて考へた。彼は子供のやうに戀をしてゐるのではなかつた、



溜息をついたり、懊惱したりすることは彼に相應しくなかつた、それにリーザ自身もさうした種類の感情を彼のうちに喚び起したのではなかつた、併し戀愛は如何なる年齢にも自分の悩みを用意してゐる、——そして彼もそれを完全に経験したのである。

三三三

或る日ラヴレツキイは、例によつて、カリイチン家に坐つてゐた。暑苦しい日のあとで非常に美しい夜になつた、マリヤ・ドミトリエヅナが、透き間風をひどく嫌ひなのに拘らず、庭園に面した窓や扉をすつかり開け放すやうに命じたり、かういふ天氣にカルタをするのは罰が當る、自然を楽しまなければならぬと言ひ出したりするほどだつた。客はパーンシン一人だつた。夜に氣分をそそられて、ラヴレツキイの前で歌ふことを欲しないながらも、藝術的な亢奮をもつて、彼は詩を朗讀した、巧に、併し餘りに意識して、必要のない穿鑿を加へながら、レールモンツフの幾つかの詩を朗讀した（當時ブーシュキンはまだ流行に入らなかつた）——そして突然、自分の調子に乗り過ぎたのを恥かしく思つたものやうに、有名な「思想」を取上げて新しい世代を攻撃し非難し始めた、その時も、若し彼に權力があるなら、何も彼も自分の思ふ通りに改革したいといふ事を附け加へることを忘れなかつた。

「ロシヤは」と彼は言つた、「歐羅巴から遅れました、追ひ立てなくちやなりません。我々は若いのだと言ひます——それは愚なことです、尙その上に我が國には發明力がありません、ハー氏自身すらわたし達が捕鼠機さへ發明しなかつたことを認めてゐます。従つて、わたし達はどうしても他人のものを借りて來なければならぬのです。我々は病的だ、——とレールモンツフが言つてゐます、——わたしは彼に賛成です、併しわたし達が病的なのは、半分だけヨーロッパ人になつたからです、毒を以て毒を制さなければなりません。（「le cadaster」（土地臺帳）とラヴレツキイは思つた）——我が國でも」と彼は續けて言つた、「頭のいい人達は——les meilleurst etes（秀れた人々）は——久しい以前にこの事を信じた、總ての國民はその本質に於て同様です、立派な制度を立てさへしたら——それでいいのです。大丈夫です、現在の國民生活に適合させることが出來ます、それがわたし達の仕事です、それが職を奉じてゐるもの……（彼は殆んど國家にと言はないばかりだつた）、仕事です、しかし、必要な場合には、御心配なさるな、制度が生活そのものを變へてゆきます。」マリヤ・ドミトリエヅナは感動してパーンシンに諾いて見せた。「まあ何といふ、」と彼女は思つた、「賢い人が話をしてゐることだらう。」「リーザは窓の方へ寄りかかつて黙つてゐた、ラヴレツキイも黙つてゐた、隅の方で自分のお馴染とカルタをしてゐたマルファ・チモフェーエヅナは、何か鼻聲でブツブツ言つてゐた。パーンシンは部屋の中を歩き廻りながら、雄辯に、しかも隠された憎惡を持つて話した、



彼は全世代ではなくして、彼の知つてゐる幾人かを罵つてゐるやうに見えた。カリーチン家の庭園には、こんもりとしたライラックの繁みの中に、夜啼鶯が巢喰つてゐた、その最初の夜の啼聲が雄辯の合間々に響き渡つた、最初の星がざつと動かぬ菩提樹の上の薔薇色の空に輝き初めた。ラヴレツキイは立上つて、そしてパーンシンを反駁し始めた、論争になつた。ラヴレツキイはロシヤの若さと獨立を主張した、自分を、自分の世代を犠牲にした、——しかし新しい世代に、彼等の信念と希望に味方した、パーンシンは苛々して鋭くやり返した、聰明な人々がすべてを改革しなければならぬと宣言して、遂には、自分の侍従の稱號も官吏たることも忘れて、ラヴレツキイを時代遅れの保守主義者だと言ひ、尤も非常に遠廻しにはあるが——社會的な彼の虚偽の立場を暗示さへした。ラヴレツキイは怒らなかつた、聲を高めなかつた（彼は、ミハレウィツチが同様に彼を時代遅れの——只しかしポルテール主義者と名付けたことを思ひ出した）——そして穩かにパーンシンを凡ゆる點から批判し始めた。彼は生れた土地の知識によつても、假令それが否定的なものであらうとも、理想に對する眞實の信仰によつても、保證されないやうな飛躍乃至は思ひ上つた革新の不可能を論證した、自分自身受けた教育を例に取つた、何よりも先づ國民的眞實の認識と、その眞實の前に跪づく素直さ、それ無しには惡に對して勇敢に戦ひ得ないその素直さを要求した、そして最後に、時間と精力の輕卒な浪費に對する、彼の意見によれば、當然の非難を、回避しなかつた。

「すべてそれは結構です！」と遂に癩に觸つてパーンシンが叫んだ。「ところで、いま貴方はロシヤへお歸りになりました、——何を貴方はなさるお意りですか？」

「土地を耕します」とラヴレツキイは答へた、「そしてそれを出来るだけよく耕すやうに努めます。」  
 「それは非常に稱讚すべきことです、疑ひもなく」とパーンシンが言つた、「そしてわたしは貴方がもうこの方面で大きな成功を納められたと承つてゐます、併し誰でもさういつた種類の仕事が出来るものでないことをお認め下さい……」

「Une nature poetique (註—詩人肌の人)」とマリヤ・ドミトリエヅナが口を出した「勿論、耕すことは出来ませんね…… et puis, (註—それに) 貴方は、ヴラヂミル・ニコライチ、何も彼も grand (註—大仕掛) になさる使命を持つておいでです。」

これはパーンシンに取つてすらあまりひど過ぎた、彼は面喰つた——そして話を臺なしにして了つた。彼はそれを星空の美しさに、シューベルトの音楽に持つて行かうと焦慮つた——でも何だか取つてつけたやうだつた、彼は到頭マリヤ・ドミトリエヅナにピケートをしようとして申込むことにまでなつて了つた。「まア！ こんな晩に？」と弱々しく彼女は言つた、それでもカルタを持つて来るやうに言ひつけた。

パーンシンは音を立てて新しいカルタの封を切つた、ガリーザとラヴレツキイは、言ひ合したやう



に、二人とも立上つて、マルファ・チモフェーエヴナのそばに坐つた。彼等は突然二人とも、差し向ひでゐるのが恐ろしくさへなつたほど、非常に愉快になつた、——そして同時に彼等は二人とも、この數日間彼等によつて經驗され續けて來たあの困惑が不意に消えて了つて、もう二度とかへつて來ないことを感じた。老婦人はちよいとラヴレツキイの頬をついた、ずるさうに眼を細くして、そして小聲で、「お伶俐者をやつつけたね、有難うよ。」と言つて、二三度頭を振つた。部屋の内がすつかり靜かになつた、ただ蠟燭の弱々しいパチパチいふ音と、時々卓子に手の當る音と、それからアツといふ叫び聲か點數の計算かが聞えるばかりだつた、——そしてそれから幅廣い浪のうねりになつて、しつとりと露ばんだ涼氣と一緒に、力強い、憎いほど響き高い夜啼鶯の歌が明け放された窓々から流れ入つて來るばかりだつた。

## 三四

リーザはラヴレツキイとパーンシンとの論争の間一言も口を利かなかつた、しかし注意深くそれに耳を傾けて、そしてすつかりラヴレツキイの味方だつた。政治上のことはあまり彼女には興味がなかつた、しかし自惚れ切つた俗吏の（彼はこれまで一度もまだそんな風を見せたことがなかつた）調子が彼女の氣色を悪くした、彼のロシヤに對する輕蔑は彼女を怒らした。リーザは自分を愛國者などとは思つたこともなかつた、しかし彼女は心持ちに於てロシヤの人々と一緒だつた、ロシヤ人らしい考へ方が彼女には嬉しいのだつた、彼女は、勿態ぶることなしに、幾時間も幾時間も母親の領地の村長と、彼が市街へ出て來た時に話し込んで、同等のものと話をしてゐるやうに、主人らしい寛大なぞすこしもなしに、話したのだつた。ラヴレツキイはすべてそれを感じた、彼はパーンシン一人に反駁を加へてゐるのではなかつた、彼はただリーザの爲めに話したのだ。お互には二人は何も話さなかつた、彼等の眼さへも稀にしかぶつからなかつた、併し彼等は二人とも、この夜びつたりと意氣が合つて、同じものを愛し又嫌つてゐることを知つた。唯一點に於て彼等は分れてゐた、しかしリーザはひそかに彼を神に近付けうることを信じてゐた。二人はマルファ・チモフェーエヴナのそばに坐つてゐた、そして勝負をぢつと見守つてゐるやうに見えた、事實また彼等はそれを見守つてゐた、——が併し二人の胸の中では心が大きく育つてゆき、そして何物も彼等のためでないものはなかつた、彼等の爲めに夜啼鶯が歌ひ、星が輝き、夢と、夏の夜の甘い喜びと、濫かさに揺られてゐる木々が靜かに囁いてゐた。ラヴレツキイは身をも心をも引いてゆく浪に打ちまかせた、——そして樂しかつた、しかし何が乙女の清い心に起こつてゐるか、それを言葉は表現し得ない、それは彼女自身にとつても秘密であつた、何人にも秘密であらせて置くがいい。生長と開花とを運命づけられた地中の粒が、如何



に生長し生熟するかは、誰も知らない、誰も見なかつた、また誰も見ないであらう。

十時を打つた。マルファ・チモフェーエヴナはナスターシヤ・カルボヅナと一緒に二階の部屋へ引きとつた、ラヴレツキイとリーザはずうつと部屋の内を歩いていつて、庭に面して開け放された戸口の前立つた、暗い遠方をちつと眺めた、それから顔を見合せて——微笑んだ、かうして、彼等は手執り合つて、心ゆくまで語りあかしたら、と思つてゐるやうに見えた。彼等はビケートをやつてゐるマリヤ・ドミトリエヅナとパーンシンの方をふり返つた。最後の「王」が到頭了つて、女主人は咳をし、溜息をついて羽根蒲團を重ねた脇椅子から立上つた、パーンシンは帽子を執つた、マリヤ・ドミトリエヅナの手に接吻をして、幸福な人達は夜寝ようが遊ぼうが誰にも邪魔をされないが、彼は朝までくだらぬ書類に目を通さなければならぬのだと言つた、それから冷やかにリーザにお辭儀をして（彼は彼の申込に對して彼女が暫く待つて呉れるやうに頼まうとは思つても見なかつた——でそれゆる彼女に對して腹を立ててゐた）——そして立去つた。ラヴレツキイは彼の後に従つた。門のところでは彼等は別れた、パーンシンは自分の馭者を起こして、ステツキの先で彼の頸を突いた、馬車に乗つて、立去つた。ラヴレツキイは家に歸りたくなかつた、彼は市街から野原へ出た。夜は静かで、月は無かつたが明るかつた、ラヴレツキイは長いこと露つぽい草の中を歩き廻つた、狭い小徑へ彼は出た、それについて歩いて行つた。それは彼を長い生垣の方へ、耳門へ導いた、彼は何故か自分でも解らずに、それを押して見た、耳門は微かに軋んで、彼の手の觸れるのを待つてゐたかのやうに、開いた。ラヴレツキイは庭へ這入つてゐた、並木道を五六歩あるいて、突然驚いて立ちどまつた、彼はカリイチン家の庭であるのを知つた。

彼はいきなり生ひ茂つた榛の木の繁みから投げ出されてゐる黒い蔭の中に這入つた、そして長いこと驚きながら、肩をすぼめながら、ちつと立つてゐた。

「これは偶然ぢやない、」と彼は思つた。

四邊は森と静まり返つてゐた、家の方からは何の物音も聞こえて來なかつた。彼は注意深く前へ進んだ。並木道の曲り角まで來ると、家全體が急にその暗い全正面を彼に見せた、二階の二つの窓にだけ灯の光りが差してゐた、リーザのところでは白い窓かけの後に蠟燭がともつてゐた、それからマルファ・チモフェーエヴナのところでは寢臺の聖像の前に燈明の赤い火が、金の椽飾りに當つてなだらかな光を反射しながら、チラチラと燃えてゐた、階下の露臺へ通ずる扉は、ボタンと開け放されたまま大欠伸をしてゐた。ラヴレツキイは木のベンチへ腰掛けた、片方の手で倚りかゝるやうにしてその扉とそれからリーザの部屋の窓に眺め入つた。市街では夜半を告げてゐた、家の中では小さい時計が細々と十二時を打つた、番人が急しなく板を叩いた。ラヴレツキイは何も考へなかつた。何も待たなかつた、彼はリーザのそばに自分を感じ、彼女の庭の幾度か彼女も腰掛けたことのあるベンチに腰を



掛けてゐるのが愉しかつた……。光がリーザの部屋から消えた。

「お休み、わたしの可愛い娘よ、」とラヴレツキイは、ちつと坐り続けながら、暗くなつた窓から眼を放さないで、囁いた。

不意に光りが階下の窓の一つに現れて、それから次へ、又次へと移つて行つた……。誰かが蠟燭を持つて部屋の中を歩いてゐた。「リーザか知ら？ そんな筈はない！……」ラヴレツキイは立上つた。……見馴れた顔がチラと見えて、リーザが客間に現れた。白い着物を着て、解かれない辨髪を肩に垂れて、彼女は静かに卓子に近付いた、その上にごんで、蠟燭を置いて、そして何かを探し始めた、それから庭の方へ顔を向けた、彼女は開け放された扉に近付いた、そして全身白々と、軽やかに、すらりと閤の上に立つた。戦慄がラヴレツキイの全身を走り通つた。

「リーザ！」と殆ど聞こえないくらゐに彼の唇から漏れた。

彼女はビクリと震へた、そして暗の中をちつと眺め始めた。

「リーザ！」とラヴレツキイはすこし聲を高めて繰返した、そして並木道の蔭から出た。

リーザは吃驚して頭を擧げた、そして後しごりをした、彼女は彼が解つた。彼は三度彼女の名を呼んだ、そして彼女の方へ手を差し伸べた。彼女は扉から離れて、庭へ下り立つた。

「貴方でしたの？」と彼女は言つた。「貴方こゝにいらつしやいましたの？」

「わたしは……わたしは……わたしの言ふことを聞いてください、」とラヴレツキイは囁いた、そして、彼女の手を執つて、ベンチの方へ連れて行つた。

彼女は逆らはずに彼の後に従つた、彼女の蒼白い顔、ちつと動かない眼、彼女のすべての動作が言ひ知れぬ驚愕を現してゐた。ラヴレツキイは彼女をベンチに坐らせた、そして自分は彼女の前に立つた。

「わたしはここへ来ようとは思つてゐませんでした、」と彼は始めた、「わたしは知らずに来たんです……わたしは、……わたしは……わたしは貴女を愛してゐます、」と彼は思はず恐怖に打たれながら言つた。

リーザは静かに彼を見上げた、彼女は今やつと彼女が何處にゐるか、そしてどうしてゐるのかが解つたらしかつた。彼女は立上らうとした、出来なかつた、で両手で顔を覆うた。

「リーザ、」とラヴレツキイは言つた、「リーザ、」と彼は繰返した、そして彼女の足下に跪いた……。

彼女の肩は微かに震へ、蒼白い手の指が一層強く顔に押しつけられた。

「どうなすつたのです？」とラヴレツキイは言つた、そして静かに歔歔の聲を聞いた。彼の心は冷たくなつた……。彼はこれらの涙が何を意味してゐるかを知つた。「貴女はわたしを愛してゐて下さる



「でせう？」と彼は囁いた、そして彼女の膝に觸つた。

「お立ちください、」と彼女の聲が聞こえた、「お立ちください、フォードル・イワーヌイチ。わたし達は何といふことをしてゐるのでせう？」

彼は立上つた、そして彼女と並んでベンチの上に腰掛けた。彼女はもう泣いてゐなかつた、注意深く自分の潤んだ眼で彼を見てゐた。

「わたくし恐ろしい御座いますわ、わたくし達は何をしてゐるのでせう？」と彼女は繰返した。

「わたしは貴女を愛してゐます、」と彼は再び言つた、「わたしは喜んでわたしの全生命を貴女に差上げます。」

彼女は再び何かに刺されたやうにビクリと震へた、そして眼を高く上げた。

「それは皆な神さまのお力のうちにあることですか、」と彼女は言つた。

「しかし貴女はわたしを愛してゐて下さるでせう、リーザ？ わたし達は幸福になる？」

彼女は眼を伏せた、彼は靜かに彼女を自分の方へ引寄せた、そして彼女の頭は彼の肩の上に落ちた。……彼は自分の頭をすこし反らした、そして彼女の蒼白い唇に觸れた。

半時間後に、ラヴレツキイは既に庭の耳門の前に立つてゐた。彼はそれが鎖されてゐるのを見た、

生垣を飛越えなければならなかつた。彼は市街へ戻つた、そして寢静まつた通りを歩いて行つた。豫期しなかつた大きな悦びの感情が彼の心を一杯にしてゐた、彼のうちにあつた一切の疑惑が影をひそめた。「消えて了へ、過去よ、暗い幻よ、」と彼は思つた、「彼女はわたしを愛してゐる、彼女はわたしのものだ。」突然彼は、空中に、彼の頭の上を、一種の美妙な、嚴肅な、勝ち誇つたやうな響が流れ渡るのを感じた、彼は立ちどまつた、響は一層美しく高まつた、和音の、力強い流れになつてそれは漂つた、——そしてその中に一切の彼の幸福が語られ歌はれてゐるやうに思はれた。彼はあたりを見廻した、響は小さな家の二階の二つの窓から流れて來るのだつた。

「レンム！」とラヴレツキイは叫んだ、そして家の方へ駈寄つた。「レンム！ レンム！」と彼は大聲に繰返した。

響はやんだ、そして寢卷を着て、胸をはだけ、髪を亂した老人の姿が、窓のところに現れた。

「あゝ！」と彼は勿態振つて言つた、「貴方でしたか？」

「フリストフォル・フォードロキツチ、何といふ素晴らしい音楽です！ お願ひです、わたしを入れて下さい。」

老人は、一言も言はずに、手を大きく動かして窓から戸の鍵を通りへ投げた。ラヴレツキイは急いで二階へ駈上つた、部屋へ這入つて、そしていきなりレンムに身を投げようとした、併し相手は命令



するやうに彼に椅子を差し示した、そして切れ切れにロシア語で言った、「坐つてそしてお聞きなさい。」それから自分はピアノの前に坐つて、傲慢げに厳しく四邊を見廻して、そして弾き出した。久しいことラヴレツキイはこれに似たやうなものを一つも聞いたことが無かつた、甘い、熱情的な旋律が最初の響から彼の心を捉へた、全體が美妙に輝き渡つて、感激と、幸福と、美に浸り切つてゐた、それは大きく廣がり伸びてゆき、融けてゆき、消えて行つた、それは地上一切の貴きもの、神祕なるもの、聖なるものに觸れた、それは死ぬることのない哀愁を息吹き、天上に死ぬべく地上を去つて行つた。ラヴレツキイは身體を眞直にした、そして歡喜のために冷たくなり蒼白くなつて立つてゐた。これらの響は只た今愛の幸福に揺すぶられた許りの彼の靈を張り裂けるばかりに一杯にした、響そのものが愛に燃え輝いてゐた。「もう一度、」と彼は最後の音譜が響くと直ぐ囁くやうに言つた。老人は彼の上に驚のやうな眼差を投げた、片方の手で胸を叩いた、そして、ゆつくり、自分の國の言葉で、「これはわたしが作つたのです、何故ならわたしは偉大な作曲家だからです、」と言つて、——再び自分の驚嘆すべき作品を弾き始めた。部屋には蠟燭がなかつた、登りかけた月の光が斜に窓に差し入つてゐた、感じ易い空氣が響高く顫へてゐた、小さな、蒼白い部屋が聖堂のやうに見え、高く、感激に充ちて、銀色の薄明の中に老人の頭がふり上げられてゐた。ラヴレツキイは近付いて行つて、彼を抱擁した。レンムは最初彼の抱擁に應へなかつた、彼を肘で突き退けさへした、長いこと、身動き一

つしないで、彼は相變らず厳しく、殆ど無作法なまでに彼を見詰めた、そしてただ二度ばかり「あゝ、」と唸るやうに言つた。遂に彼の變り果てた顔が和らいだ、伏せられた、そして彼は、ラヴレツキイの熱烈な祝福に對して、初めてすこし頬笑んだ、それから子供のやうに弱々しく啜り上げながら、泣き出した。

「驚くべきことです、」と彼は言つた、「貴方が丁度今こられたといふことは、しかしわたしは知つてゐます、何も彼も知つてゐます。」

「貴方は何も彼も知つてゐるのですか？」とラヴレツキイは困惑しながら言つた。

「貴方はわたしの音樂を聞かれた、」とレンムは言つた、「だのに貴方はわたしが何も彼も知つてゐるのを理解されなかつたのですか？」

ラヴレツキイは朝まで睡ることが出来なかつた、彼は終夜寢臺の上に坐り通した。リーザも睡らなかつた、彼女は祈り續けた。

## 三五

讀者はラヴレツキイが如何に成長し發達したかを知つてゐる、でリーザの教育に就いてすこし述べ